バカとテストと召喚獣 ～蒼い瞳の従姉～

ＧＡＵ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと召喚獣　～蒼い瞳の従姉～

【Ｎコード】
Ｎ７５５７Ｘ

【作者名】
ＧＡＵ

【あらすじ】
明久と同じ日同じ時間同じ病院で生まれたイタリア人ハーフの少女、夏目綾香は、その自由奔放且つ傍若無人な性格で彼を振り回す！
双子同然に育った彼と彼女のドタバタコメディー♪
この作品はバカとテストと召喚獣二次創作です♪

ぷろろーぐ☆（前書き）

気が付いたら書いてました。
読んでくれる方が楽しんでくれたら幸いです♪

ぷろろーぐ☆

とある家族向けマンションの一室。
春の陽気にあてられ、その少年は惰眠をむさぼる。
しかし、ベッドの上の盛り上がりは、一人分にしては大きい。
「んん……」
窓から差し込む日差しに、少年が寝返りを打つ。
その鼻腔を、柔らかい匂いがついた。
「ん？　んんん？」
眉根を寄せた少年が身じろぎしようとすると、全身が柔らかい何かで締め付けられる。
「んん？　な、なに……」
軽く寝ぼけたまま眼を開いていくと、視界いっぱいに金色が広がる。
ぼんやりしながら“それ”へと手を伸ばし、軽く撫でる。
柔らかい金色の手触りは気持ちよく、なんとはなしに撫で続ける。
「ん、うぅん……」
不意に気持ち良さげな声が聞こえた。つづけて体にまとわりついた柔らかいものがもどかしそうにうごめく。
そして、金糸の向こうに白い肌が見え、閉じられた眼の長いまつげが揺れた。
「……」
その“顔”を見た瞬間、少年吉井明久の霞がかかった頭がクリアーになっていく。
すると、自分のみぞおちのあたりにに二つの柔らかい膨らみを感じとり、意識は一気に覚醒した。
「……！！」
状況を瞬時に把握したところで、金糸の向こうの瞼が開き、蒼い

瞳が表れる。
「……」
「……」
数瞬、見つめ合う二人。そして、蒼い瞳の少女が天使のように、ふんわりと笑った。
「おはよ☆　アッキー♪」
その笑顔に朱を散らす明久。
それを見た瞬間、天使の微笑みが、悪魔の笑いに変化した。
「なーに？　アッキー。おねーさんに欲情した？」
「……おねーさんもなにも同い年だよね綾香と僕は」
少女、夏目綾香の嫌らしい笑みを見てゲンナリとなる明久。
「そもそも何で綾香が僕のベッドに……」
「あー、抱き枕〈明久〉が気持ちよさげだったから、つい☆」
「なんだか別のもののルビに僕の名前が使われた気がするんだけど？」
悪びれることもなくのたまう綾香に、明久がジト目になる。
「またまたそんなこと言って、おねーさんのおっぱいの感触楽しんでるくせに☆」
「……否定はしない」
吉井明久と夏目綾香は従姉同士だ。
同じ日同じ病院で同じ時間に生まれた二人は、双子のごとく時間を共有して育った。
ゆえにお互いのことはたいてい解ってしまう。
下手に誤魔化そうものなら、綾香はアダルトコードぎりぎりのボディタッチを駆使して明久に吐かせようとするだろう。
そして、このイタリア人ハーフの娘は、明久の反応を見て喜ぶのだ。
故に、素直に吐いた方が実害は少ない。
「ちぇー、つまんねーのー」
言いながら身を起こし、ベッドから降りる綾香。

そのまま軽く伸びをしてからあくびを一つ。
その様子を見て嘆息した明久は身を起こし、ハッとして綾香の姿を見た。
いまの綾香は、私立文月学園女子の制服に身を包み、肩をグリグリ回している。たわわに実ったソレのおかげで肩こりがヒドいという話を聞いた気がしたが、今はそんなことはどうでもよかった。
急いで首を巡らし時計を見やる。
「……」
「ん？　アッキー、どしたん？」
時計の短針長針の行方に唖然呆然となる明久。
その様子に綾香が首を傾げる。
「ち……」
「ち？」
「ちこくだーっ！？」
「あ、ほんとだ」
焦った様子の明久にのんびり同意する綾香だった。

ぷろろーぐ☆（後書き）

いかがでしたか？
まあ、続きを書くかは反響次第かな？
突発ネタですし。

それでは失礼します♪

綾香のぷろふぃーる☆

☆夏目綾香（なつめあやか）

身長：１７０ｃｍ

体重：ないしょ☆

Ｂ９２
Ｗ６３
Ｈ９３

▽明久と同じ日の同じ時間同じ病院で生まれた、イタリア人ハーフの従姉。
　明久の実家と綾香の実家は数百メートルほどしか離れておらず、互いの家を遊び場として時間を共有しながら育った。
　ほとんど双子同然に育ったことから、家族同然の気安さがあり、明久とはアイコンタクトすら不要なくらい互いの考えが読める。
　小さい頃から活発で、明久とともに男の子に混じって泥だらけで転がり回るように遊ぶ子供だった。
　だからといって女の子と合わない訳ではなく、明るく元気で男女ともに友人が多いタイプ。
　そのため勘違いされることが多く、小学校の時分から告白されることが多かったらしい。
　そのすべてを断り、現在に至る。
　外見は金髪碧眼で、顔立ちはどちらかといえば日本人のもので、瞳の蒼さが際だつような大きな目をしており、肌もきめの細かい白い肌をしている。

もっとも活発な代償として、生傷が割とあったりするが。
長く伸ばした金髪はハーフとは思えないほど美しいが、くせっ毛がひどく、手入れを面倒がる。
服装も、制服以外にスカートは持っていないくらいで、活動的な格好を好む。
美人というほどではないものの、いつも笑顔でいるため、不思議な魅力があり、人を惹き付ける少女だ。

▽明久とは距離感が近すぎるほど近く、前述したように双子と言っても過言ではない関係。その分互いを異性として認識していない節もあり、仲の良い姉弟のようでもある。
さすがに頻度は減ったが、同じ布団に二人で寝たり、綾香が明久に髪を梳いて貰ったりなどがいまだに行われている。
また、中学に上がったくらいまで一緒にお風呂に入った経験まである。

▽性格は明るく快活で、運動神経も抜群に良く、父親のサバイバル訓練の趣味に付き合わされた結果、同年代のアスリート並の体力と運動能力を誇るが、趣味の大半はインドア系。
楽しいことやお祭り騒ぎ、とくにイタズラを仕掛けることが好きで、仲の良い同性や明久にはセクハラまがいのイタズラを仕掛けることも多々ある。
しかしながら、心理的に男性との線引きは意外なほど厳しく、ボディタッチなどは無意識に避けてしまうようだ。　その割には、女性としては無防備すぎるところがあるため、誤解を招くことが多々

ある。
　このようにアンバランスな彼女ではあるが、それらがうまくかみ合った不思議な魅力を醸し出しているのも確かだ。

▽特に勉強しているわけではないが、学力は割と高く、学年で五十位前後。つまりＡクラスとＢクラスの狭間くらいの成績。本人曰く「授業を聞いてキチンと理解して、予習復習を忘れなければこの位は普通」らしい。
　総合科目は２１６１点で、調子が良ければ２５００点を超えることもある。
　得意科目は数学と物理で、パズル感覚で黙々と数式を解いていくのを好む。
　特に集中しているときの解答速度は群を抜いており、調子の良いときは、どちらも５００点前後とれる。
　他の科目はだいたい１５０点ほどをコンスタントにとっていて、苦手科目はない。

▽綾香の召喚獣は、ディフォルメされた綾香の容姿で、文月学園の冬の制服に、金細工の施された黒いガントレットとレガース、そして腰に下げた二本の柳葉刀を武器とする。
　敵の攻撃は、ガントレットとレガースで受け止めたり弾いたり、受け流すスタイル。
　武器の柳葉刀とは、先端の方が大きく分厚い中華刀で、その大きな剣先の生み出す遠心力で切断力を増す武器。これの二刀流で戦う。
　また、柄頭から紐が伸び、先端が柳葉刀の鞭のように使える。この紐の長さも相当長いため、二本同時に振り回せば、召喚フィールド内のほとんどをカバーできる。
　特殊能力は、『ミラージュステップ』。使用ごとに分身が一体生

み出され、本体の行動を追従する。この分身による攻撃も通常の攻撃と同じ扱いになる。

一体生成するごとに、１０点を消費する。

分身は、フィールドを出るか、攻撃を受けるかしない限り消えることはない。

だい☆いちもん♪（前書き）

なにやら思っていたよりずいぶんと反響がありましたので、続きを書いてみましたよ？
読んでくださるみなさんに、楽しんでいただければ幸いです♪

校舎へと続く坂道。
両脇を桜で彩られたその道に、鮮やかな金色が踊る。
「疲れた～、アッキーおんぶ～」
「もう、しっかり走ってよ綾香」
少しネジの緩そうな少年に手を引かれ、金髪の少女がぶーたれる。
「だいたいバイク通学ダメなのが問題なんだよ～。二ケツすれば遅刻なんてしなかったのに～」
ぶつぶつ文句を言いながらも手を引く少年にならって走る。
おかげで癖っ毛の長くて柔らかそうな金髪と、文月学園指定のブレザーを内側から盛り上げるふくらみと、腰回りを覆うスカートが上下に揺れていた。
「どっちにしたって僕を抱き枕にして寝ちゃった時点でアウトだったと思うよ」
苦笑いする少年、吉井明久にうながされ、仕方無しに足を早める少女、夏目綾香。
唇をとんがらかせながら明久の後頭部をにらみつける。
「むー、アッキーのくせに生意気な……とうっ☆」
っと楽しげなかけ声が響いて明久の背中に衝撃が走り、少女の柔らかい体がぶつかってきた。
「わわっ?!」
思わぬ衝撃に驚いて声を上げるも彼女の体をしっかと支えてみせる明久。彼の背中に笑顔でおぶさった綾香は身を起こしてご満悦だ。
「らっくち～ん☆　いっけー明久号～☆♪」
元気良く右手を突き出した彼女に対し、深々とため息を付いた明久は、彼女を支え直してから軽く走り出した。
どちらかといえば細身な明久だが、その体はきっちり鍛え上げら

れていた。
　幼い頃から綾香と一緒に、サバイバル訓練が趣味だという彼女の父親の訓練に付き合わされた結果だ。
　綾香はそんな明久の首に手を回し、彼の背中に体を預ける。
　彼が坂道を上りきるまでの、わずかな間、綾香は桜を楽しむ。
　明久が、足取りも息づかいも乱れぬまま坂を上りきると、そこには浅黒い肌の巌のごとき漢が仁王立ちしていた。
「遅刻だ。吉井に夏目」
「あ、鉄じ……じゃなくて、西村先生。お早うございます」
「あー♪　てっちゃんだー♪　おっはよ～ん☆」
　明久は軽く会釈し、綾香は明久におぶさったまま身体を目一杯伸ばしながら右手を大きく振った。
　その様子にため息をつく西村教諭。
「はあ、おまえ達は……普通に『お早うございます』じゃないだろう。それから夏目。おまえは教師に対してフレンドリー過ぎだ」
「はあ、じゃあ……今日も肌が黒いですね？」
「だねー♪　今日もいい感じに暑苦しいぞ☆」
　明久が首を傾げながら言う真上で、綾香が片目をつむってペロリと舌を出しながらサムズアップする。
「お前ら……遅刻の謝罪より俺の肌の色や暑苦しさ……の方が重要なのか？」
「あ！　そっちでしたか。すいません」
「あたし的には重要かな～☆？」
　謝る明久に、楽しげな綾香を見て嘆息する西村教諭。
「とにかく受け取れ」
　そう言って差し出してきたのは二枚の封筒。
　それを綾香が受け取り、明久の背から飛び降りると、自分のものと一緒に彼宛の封筒もさっさと破り開ける。
「って？！　ちょ！？　ま？！」
　流れるような彼女の行動に、焦る明久。

「アッキーのクラスはっと……へぇ……ほぉ……ふぅ～ん♪」
明久に見せないように中身を見てにんまり笑う綾香。
「ちょっと返してよ！」
「や～だよ～ん☆♪」
明久は自分のクラスが書かれた紙を綾香から取り返そうと掴みかかるが、彼女は楽しそうに逃げ回る。
それが少し続いたところで……。
重いものが石に落とされたような重量感あふれる音がふたつ響く。
西村教諭の拳が二人の頭を痛打した音だ。
「まったくいい加減にせんか。とっとと自分の教室に行け」
呆れたような声を出す西村。その足下で頭を押さえてうずくまる二人。
そして、綾香が痛みのあまり取り落とした紙には……。

『吉井明久……Fクラス』
『夏目綾香……Fクラス』

ふたりの学園最低クラスでの生活が始まった。

だい☆いちもん♪（後書き）

いかがでしたか？
普段書いてる分量より短い感じですが、テンポ良く行きたいなと思っております♪

だい☆にもん？（前書き）

さて、『だい☆にもん？』更新となります♪
読んでくださる方に楽しんでいただければ幸いです♪

「おー☆　でっかい教室だー♪」
「……うん。ばかデカい教室だね」
去年は足を踏み入れなかった三階。
そこで目の当たりにしたのは巨大な教室だ。
「おー☆　すっげーぞアッキー！　個人エアコンや冷蔵庫までついてる！」
「なんかもう高級ホテルだね……」
目をキラキラさせてる綾香に対し、明久はちょっと引いてる感じだ。
「あ！　優子だ☆　おーい♪　ゆーこー♪」
豪華な教室の廊下側の窓から中を覗いていた綾香は知り合いを見つけた喜びに、体をいっぱいに伸ばして両手を振る。
それに気づいた眼鏡にボブカットの少女は不思議そうな顔になり、ボーイッシュなショートヘアの緑髪の少女は面白そうな表情となる。
そして綾香の目当ての少女は、彼女を一瞥して、無視した。
「あっれー？　気づかないのかなー？」
目当ての少女の様子に綾香は首を傾げる。
「……なんか注目されてるね綾香」
「ん～？　別にいーじゃん？　はあ。じゃ、教室行こうか」
言うが早いか明久の手を取り歩き始める。
そんな二人を鋭く見つめる二対の視線に気づかずに。

三階、旧校舎部。明久と綾香は連れだってその古ぼけた……いやさ廃屋のような教室の前に立った。

「すっげー。きっとこの教室崩れるぞ？　アッキー☆」
先ほど同様、目を輝かせる綾香。対して明久は顔をひきつらせるばかりだ。
「ま、まあ中はマシかもしれないしね」
おのれに言い聞かせるようにつぶやく明久。
「なあなあアッキー☆　どんな奴がいるんだろうな♪」
言いながら綾香は明久を引っ張りながら戸を開けた。
「早く座れウジ虫野……ぼぐればぐらしゃっ？！」
開口一番罵倒を口にした赤い髪をツンツンに立てた少年の顔面に、きれいに揃えられた白い両足が突き刺さり、吹き飛ばされる。
綾香がショートダッシュからひねりを加えたドロップキックを決めたのだ。
ちなみにスカートを太股で挟んでめくれないようにしているが、瞬時にベストポジションを確保した小柄な少年がシャッターを切っていた。
が。
着地した綾香がにんまり笑う。
「……ま、まさか？！」
「そうだよ？　康太。あたしはちゃんとスパッツ履いてるから☆」
ぴらりとスカートをめくって見せる綾香に鼻血を噴出する小柄な少年。
「……くっ。スパッツを履いていながらもあたかも履いていないようにガードして見せるとは……不覚……」
そのまま力尽きる、康太と呼ばれた少年。
一方、明久は綾香のロケットキックを食らった赤毛の少年のところへ近づくと、足先で彼をつついた。
「おーい、雄二～？　生きてるか～？」
「ぐ……あ、明久か……いったい何が……」
頭を振りながら身を起こした、雄二と呼ばれる少年。
その顔面には、しっかりと綾香の上靴の底の模様が刻まれている。

「綾香の全力ロケットキックを食らったんだよ。あれ、地味にひねりまで加えてるから威力あるんだよね」
「……綾香？　アイツはＢクラスかＡクラスだろ？　なんでＦにいるんだ？」
頭がはっきりしてきた雄二は、クラスに思いもしない人間がいたことに驚く。
「あー、うん。綾香、途中退席したからね。点数が無いんだよ」
雄二の質問に顔をしかめながら答える明久。
「あー面白かった☆　あれ？　雄二じゃん。どったの」
向こうで康太をイジって遊んでいた綾香がやってきてそうのたまう。
「てめえに蹴り飛ばされたんだよ！　このエセ外人！」
「あー。さっきの雄二だったんだ。ウジ虫呼ばわりされたから反射的に蹴ったんだけど、雄二ならいっか☆」
花が咲くように笑う綾香。そのまま明久の腕をとって歩き出す。
「アッキー、こっちで一緒に座ろうぜ～☆」
周囲から明久に向けられる殺気と嫉妬の視線を気にもせずに、明久と腕を組むようにしながら教室の後ろの方へ引っ張っていく。
畳敷きにちゃぶ台という、本来教室としてあり得ない環境も気にしない綾香。
果たして彼女はこのおんぼろ教室で、どんな騒動を引き起こすのか？

だい☆にもん？（後書き）

いかがでしたか？
基本自由な綾香の活躍は、まだまだこれからですよ♪

だい☆さんもん！（前書き）

だい☆さんもん！　更新しました♪
よろしくお願いします♪

周りの目を気にすることなく空いてるちゃぶ台へ向かった綾香と明久。
「おー☆　ここにしよーぜー♪」
隅の空いてる席を発見した綾香が楽しそうにそちらへ向かう。そして苦笑い気味にその後を着いていく明久。
着席しながら手招きする綾香。
「アッキーは、あたしの後ろな☆」
言われて明久はうなずき、綾香の後ろの席に着く。
するとちょうど担任とおぼしき中年男性が教室に入ってきた。
未だダメージの抜けきらない雄二と康太に対して席に着くよう促すと、自己紹介を始めた。
「つー、まだ頭がくらくらするぜ……」
ぶつぶつ言いながら明久から一つ席を挟んだ向こうに座る雄二。
その目は綾香をにらんでいるが、彼女は気にしない。
と、明久の眼前に金髪が広がった。綾香が頭を背中に向けてそらすように明久の方へ顔を向けたからだ。
「なあなあアッキー。なんで黒板に名前書くのやめたんだろうな？」
綾香に言われて前を見ると、福原慎と自己紹介した中年男性が黒板の方から生徒の方へ向き直ったところだった。
「あー、さっき見たんだが、チョークのクズしか無かったからな」
つまらなさそうに答える雄二。それを聞いて綾香は目を丸くした。
「すげーな！　……たはぁ～☆」
無理な姿勢で耐えていた彼女だったが、力尽きて明久のちゃぶ台に背中をつけた。
ちなみに先ほどから自己主張の激しい双子山が際立っていて、男子の視線がそこへ集束しており、康太がシャッターを切っていた。
「それでは、順番に自己紹介してもらいましょう」

福原教諭の声に、綾香はパッと身を起こした。
目をキラキラと輝かせて聞く体勢だ。
そして、ひとり立ち上がった。
「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」
独特の言葉遣いに小柄な体。美少女と見間違うばかりの愛らしい容姿の少年、木下秀吉。
明久の去年のクラスメイトだ。
「おー☆　秀吉じゃん♪　相変わらずかわいーよなー」
そう綾香が口にすると、秀吉が綾香の視線に気づき、一瞬、複雑そうな表情になったがすぐに座ってしまった。
そして再開される自己紹介。
「……土屋康太」
康太が立ち上がって名乗ると、綾香が“あの”悪魔の笑みを浮かべた。
康太が座ろうとしたところで綾香がおっきな声を出す。
「いよっ♪　ムッツリスケベ☆」
「……そんな事実はない（ブンブンブン）」
顔と手を左右に振って否定する康太。
クラス中に注目されながら否定を続ける彼を見て、綾香は大笑いする。
その騒ぎが終息し、再開された自己紹介。
「島田美波です。海外育ちで、日本語の会話は出来るけど、読み書きは苦手です。あ、でも英語も苦手です。ドイツで育ったので。趣味は……」
そして今自己紹介をしている赤茶色の髪をポニーテールにした少女を見て、またもや綾香が笑う。
「まぁた美波と同じクラスじゃんアッキー♪　嬉しいんじゃない？」
「そりゃ友達だしね……。けど彼女。段々と技の切れ味が上がってきてるから、避けるの大変なんだよね……」
すこしげんなりしながら答える明久。

「はろはろ～♪」
手を振る美波に、綾香も笑いながら手を振り返していた。
「やっは～☆　美波～♪」
さらに自己紹介は続いて、綾香が立ち上がった。
「夏目綾香だよ☆　よろしくね♪　好きなものはプリン♪　嫌いなものはしつこい人。身長は１７０。体重はないしょ☆　スリーサイズは上からバスト９２、ウエスト６３、ヒップ９３だよ☆　ちなみに恋愛とかメンドいから彼氏の募集はしてないよん♪」
その言葉に、Ｆクラス男子の大半が絶望した。

だい☆さんもん！（後書き）

だい☆さんもん！　いかがでしたか？
綾香の恋愛メンドい発言に、全Ｆクラス男子が泣いた！

次回は綾香が何を始めるんでしょうか？

綾香がFクラス男子を絶望のずんどこに追いやったのを後目に、明久が立ち上がる。
「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さい……」

シンッ……。

誰も明久の自己紹介なぞ聞いていなかった。
「ノ……ノーリアクションって、地味にダメージデカいよね……」
さめざめと涙を流しながら着席する明久。
すると綾香が楽しそうに振り向いて、明久のちゃぶ台に、笑顔で頬杖を着く。
「気にすんな♪　ダーリン☆」
「……やっぱ痛々しいからその呼び方やめて……」
明久の涙が加速するのを見て、綾香はさらに楽しげになった。そして膨らむ殺意と嫉妬。「……気のせいか僕へのプレッシャーが凄いことになってる気がするんですけど……っ？！」
「？　そうかぁ？」
あまりの圧力に滝のような汗を流す明久。それを受けて綾香が周りを見回すと、プレッシャーが霧散する。
「なんともないじゃんよ☆」
言いながら明久に笑顔を向ける綾香。
と、そのとき。
教室の戸が開いて、一人の少女が息を切らせながら入ってきた。

「あの、遅れて、すいません……」
『え？』
その少女の姿に、教室中が呆気にとられた。
そして綾香も驚いた顔で立ち上がった。
「み、瑞希？！」
「え？　あ、綾香ちゃんですかっ？！　な、なんで綾香ちゃんがっ？！」
「それはこっちの台詞だよ～♪」
そう言いながら立ち上がると、瑞希の方へ行って彼女を抱きしめる綾香。
「わたしは振り分け試験中に熱を出しちゃって……。それで綾香ちゃんは？」
綾香に抱きつかれながらふわふわのピンクブロンドの少女、姫路瑞希は苦笑い気味に答えてから綾香に訊ねる。
綾香は瑞希の言葉を聞いて、大変だったねとつぶやくように言ってから、相好を崩した。
「あたしは、祖父ちゃんが倒れたって連絡が来てさ、途中退席したんだよ。まあ、実は祖父ちゃんのイタズラだったんだけどね」
その後、祖母ちゃんやパパ達に怒られてたよ～などと笑いながら話す綾香。
「けど、今年はアッキーも瑞希も同じクラスだなんて、あたし嬉しいよ～♪」
「え？　明久君も居るんですか？」
綾香の言葉に、瑞希が顔をほころばせた。
あっちだよ。と、綾香が指さした方を見て花が咲き乱れるかと思うほどの笑顔を浮かべる瑞希。
これによって明久への殺意と嫉妬はうなぎ登りに上がっていく。
そんな空気など読まぬとばかりに中年男性の弱々しい声が通った。
「え～、嬉しいのはわかりましたが、席について下さい夏目さん。それから姫路さんは自己紹介を」

言われて綾香は目をぱちくりさせる。
それから腰を折って頭を下げた。
「あーゴメンね？　福ちゃん。席戻るから怒んないでね？」

そう言ってから席へと戻っていく綾香。
そして、残った瑞希が軽く会釈した。
「姫路瑞希です。一年間、よろしくお願いしますね？」
そう言って顔を上げると、少し頬を紅潮させながら小走りで教室の後ろの方へ向かった。
「ふう、緊張しました～」
ほう。と息をついて、明久と雄二の間の席へと着席する瑞希。
それを待ちかまえていたように綾香が瑞希の方へ体を向けた。
「けど、瑞希と同じクラスになるのって小学校以来だよね～」
そう綾香が話すと、瑞希も笑顔で応じる。
「そうですね。中学は違うところでしたし」
「去年なんか、アッキーともクラス違っちゃったしさ。小中で違うクラスになったこと無かったのに……」
そう言ってちょっとだけしんなりとなる綾香。
するとその時のことを思い出したのか、明久が苦笑いを浮かべた。
「あの後ひどかったっけ。『何で違うクラスなんだー！』って怒鳴られたんだよ？　僕のせいじゃないのに」
やれやれと肩をすくめる明久に、綾香はバツが悪そうになる。
「う。い、いいじゃんさーその事は！」
「クスクス、私の所にも相談しにきたくらいですしね」
「み、瑞希っ？！　バラすなんて裏切り者ぉっ！！」
などと騒ぎになり始める。
すると当然。
「はい、そこの人達。静かにして下さい」
と、教卓を軽くたたきながら注意する福原教諭。
それに対して明久達が謝ろうとした瞬間。

パキィ、ガラガラガラ……。

そんな音を立てて、教卓が廃材の山になった。

福原教諭が廃材となった教卓の換えを取りに行っている間、明久は雄二を誘って廊下に出ていた。
「戦争だと?」
「そう、試験召喚戦争」
訝しげに聞き返す雄二に対して、明久はしっかりうなずいてみせる。
「……おい明久、てめえなにを企んでやがる?」
「別に企んでなんていないよ。あんまりにも教室が酷いからね」
探るような雄二に対して、軽く肩をすくめる明久。
その様子を見ていた雄二の目が細く鋭くなる。
「……姫路と夏目だな?」
「!?」
雄二の指摘に、体が震える明久。
「……やっぱり、わかるかな?」
「カマかけただけだっての」
「うぐ」
「まあ、いいだろ。Aクラスとの勝負に勝つ策もなんとかなりそうだしな。と、戻ってきたみたいだ。中へ入るぞ」
雄二に言われて明久はうなずきながら教室に入っていった。
福原教諭が戻ってきてから再開される自己紹介ではあったが、淡々と進むそれに飽きた綾香は、明久のちゃぶ台に寝そべり、組んだ両手に顎を乗せながらあくびをかみ殺していた。
綾香の頭は明久の顔の下あたりにあり、彼のちゃぶ台は美しい金糸のテーブルクロスが敷かれているようだった。
「つまんねーなー?　アッキー。そっから紐無しバンジーしてきなよ~♪　笑ったげるから☆」

頭を横に倒し、横目で明久を見上げながら小悪魔の笑みを浮かべる綾香。
その突拍子もない提案に、明久はため息をつく。
「笑ったげるから☆　じゃないでしょ？　ここは三階だからね？　紐無しバンジーなんてしたら怪我しちゃうからね？」
「ちぇー、つまんなーい」
唇をとんがらかせ、頬を膨らませながらぶーたれる綾香。白い足がパタパタと動き、赤いスカートと黒いスパッツに包まれた丸いヒップが揺れる。
この綾香の体勢に、明久への殺意と嫉妬を向けたいFクラス男子であったが、そんなことより、無防備な綾香をガン見したいという欲望がせめぎ合っているようだった。
そして血涙を流しているのは綾香と同じ列に座る男子諸君。
真後ろを向かなければその絶景を見ることができない為、激しい葛藤に身を焦がしていた。
「さて、グダグダではありますが、自己紹介最後の一人は君ですね？　坂本君」
誰も聞いていない自己紹介はいつの間にやら終盤だったようだ。
福原教諭に言われた雄二が、うーっす。と、答えながら立ち上がり、教壇へと向かう。
その様子になにか感じるものでもあったのか、綾香も身を起こして座り直した。
雄二が教壇まで来ると、福原教諭が声をかけながら教卓を譲った。
「坂本君は、Fクラスのクラス代表でしたね」
「はい」
返事をしながら教卓に手を着きながら立った。
「俺がFクラスの代表、坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」
そう言って少し間を置く。
自然、クラス中の視線と意識が雄二に集中した。

それを確認した雄二はおもむろに口を開いた。
「さて、ここでひとつ、みなに問いただしたいことがある」
そう言って言葉を切り、教室を見回す。
その視線の先を追ってしまう一同。

古ぼけてガタガタなちゃぶ台。

つぎはぎだらけで、綿の代わりにホコリが詰まっていそうな座布団。

隙間だらけの壁と、割れたガラスしかはまっていない窓。

それらを見てから、皆に向き直る雄二。
「……Aクラスは、システムデスクにリクライニングシートらしいが……不満はないか？」
『大アリじゃああぁぁっっ！！』
クラスの男子が一斉に唱和した。
そしてそこかしこから、不平不満の声が、止めどなくあふれでる。
「そうだろう？　俺も代表として問題だと思っている。そこでだ」
雄二の雰囲気が、カミソリのごとく鋭くなった。
「我々Fクラスは、Aクラスに対し、試験召喚戦争を挑もうと思う」
引かれた引き金。
そして、その言葉に、綾香の目が☆になった。

『勝てるわけがない！』

雄二の引いた引き金に対する第一声。そしてこれこそが、クラスの総意を代弁していた。

試験召喚戦争とは、文月学園独自のシステム、“試験召喚システム”を利用し、テストの点数に応じた強さの召喚獣を召喚し戦わせて行う疑似戦争だ。

これに勝てば、相手の教室設備を奪うことが出来るのだ。

しかし、文月学園は、第二学年からは成績順にクラス分けがなされる。最底辺のＦクラスと最高位のＡクラスでは、三倍以上の点差があり、それがそのままクラスの戦力差につながるのだ。

いくら最底辺のクラスとはいえ、その位のこともわからないような人間はおらず、さらにあちらこちらから開戦に対する否定的な意見が飛び出し始めた。

その中にあってなお、明久は真剣な眼差しで、綾香は楽しげな顔で、雄二を見つめていた。

そして、クラス中が騒ぐ中、それを貫く声が響いた。

『いや、勝てる！！　俺が勝たせてみせる』

力強い言葉。

それを発したのは雄二だ。

呑まれるように、クラスが静かになる。

「だが、そうは言ってもにわかには信じられないだろう。そこで、このクラスに存在する勝てる要素を説明しようと思う」

雄二の言葉に、クラス中が顔を見合わせ、ざわつく。

しかし、彼は意にも介さずに口を開いた。

「まずは康太。姫路のスカートを覗いていないで前に来い」

その雄二の言葉に、瑞希が、え？　となり、畳に顔をつけていた康太があわてて起きあがる。

「……！？（ブンブンブン）」
「ひゃわっ？！」
赤くなり、太股を閉めながらスカートを押さえる瑞希。
その様子に綾香は楽しそうに笑う。
「あっはっはっは☆　康太のムッツリスケベ～♪」
「……そんな事実はない」
はっきり否定する康太。その視線が、綾香の視線と絡み合う……
ことも無く、彼女のわがままな双子山に注がれていく。
ふいに、綾香が口を開いた。
「……何色だった？」
「……水色」
「やっぱ見てんじゃん」
「……巧妙な誘導尋問」
「ひどいです綾香ちゃん！　何で私のパンツの色を公開しちゃうんですか？！」
パンツの色を暴露されて目をぐるぐるにしながら憤る瑞希。
「ぱんつくらい良いじゃん☆　特に何も減らないし」
「減ります！　何かこう、大切なものが減っちゃうんです！」
バラしたのは綾香ではないが、瑞希は混乱していて気づかない。
一方の綾香も気にした風でもなく瑞希に応じている。
「あー。話つづけたいんだが……」
不意に雄二から声をかけられ、瑞希はハッとなり、顔の紅の面積と色合いを増加させながらぺこぺこ謝った。
「……ま、いい。少し脱線したがこいつは土屋康太。まあ、この名前ではあまり知られてないだろうが、こいつの正体はあの“有名な寡黙なる性識者（ムッツリーニ）”だ」
雄二のその紹介に、教室が騒然となる。集まる視線は畏怖と畏敬。
「よ☆　ムッツリスケベ♪」
さらには綾香が合いの手まで入れて教室は大盛り上がりだ。
しかし当の康太はそれどころではない。

「……！！（ブンブン）」
こんな状況にあってなお否定する康太。その姿は哀れを誘う。
「はあ、煽るな夏目。次は姫路。今更説明する必要はないだろうが、その力はみんなも知っての通りだ」
「わ、私ですかっ？」
「うちの主戦力だ。期待させて貰う」
言われて瑞希は神妙な顔つきで、ハイ。と返事をする。
「それから島田美波」
「ウチ？」
突然話を振られて驚く美波。
「こいつは自己紹介にあったように帰国子女で、数学ならBクラスレベルだ」
その雄二の言葉に、どよめきが生まれる。
「ちょ、ちょっと坂本！　ウチはそんな戦力には……」
美波は持ち上げられて、若干焦り気味に否定しようとするものの。
「木下秀吉だって居る」
雄二はスルー。
「ワシかの？」
名前を呼ばれると思っていなかった秀吉は、きょとんとなる。
だが、教室は秀吉の名前が挙がったことにさらなる盛り上がりを見せる。
「そして夏目綾香」
「いぇーっす☆」
続けて挙がった自分の名前に、綾香は立ち上がりながら応え、スキップするように前へ出ると、そのまま教卓に飛び乗った。
「お、おい！？」
これには雄二も驚いてやめさせようとするが、綾香は気にしない。
「綾香だよ～☆　みんな、勝つぞーっ！♪」
そう大きな声で宣言し、大きく両手を振り回しながら軽く飛び跳ねる。

するとFクラスの士気は最高潮を迎えた。
『ウオオォォーーッッ！！』
そんな雄叫びが響き、教室が揺れる。
そして綾香の足が、再び教卓に着いた瞬間。

バキバキィッ！！

「へ？」
「な？　ぐおっ？！」
崩壊する教卓に雄二を巻き込みながら教壇へと落ちる綾香。
埃が煙のように舞い上がり、二人の姿を覆い隠す。
「綾香っ！？」
「綾香ちゃんっ！？」
明久や瑞希をはじめとしたクラスメイトたちが、あわてて教壇に集まった。
次第に晴れたそこには、元教卓の廃材の山。そして、クラス代表の少年の顔の上にぺたんと女の子座りした綾香の姿があった。

「うへぇ……ぺっぺっ、ホコリまみれだよ～」
頭からホコリを被ってしまった綾香は、それを払う。
「もがあ～！！」
「きゃんっ？！」
すると突然尻の下から声が響き、その刺激に驚く綾香。
「もめえっ！！　まあくおえっ！！（重えっ！！　早く退けっ！！）」
「ひゃあんっっ？！」
立て続けに刺激を受けて少し艶っぽい悲鳴を上げながら飛び退く綾香。
「くっそ、ひでえ目にあった……」
綾香の尻の下から現れたのは、赤毛の少年の顔。
ホコリと廃材まみれのまま身を起こした彼は、周囲の空気の変化に気づかない。
「……おい、夏目！　ふざけるのもいい加減に……？」
激高した様子で綾香に怒鳴り始めた雄二は、そこで初めて教室の空気がドス黒いことに気づいた。
よく見れば明久の背後に隠れるようにしている綾香は珍しく涙目で、瑞希に慰められている。
「お、おい？　なんだお前ら？　何殺気立ってるんだ？　俺はどっちかと言えば被害者……」
焦りを滲ませ弁解する雄二。
その時、綾香が口を開いた。
「ぐす……。アッキー、雄二にえろい事されたー」
その一言で、クラスの男子が臨界点を迎えた。

『坂本を殺せーーっっ！！』

「俺が何をしたーっ？！」

跳ね起きながらダッシュする雄二。それを追尾するFクラス男子生徒たち。

それを見送る明久と綾香、そして、瑞希に美波。

皆の姿が見えなくなったところで、明久にしがみつくようなかっこうの綾香の口が悪魔のように笑う。

「ざまみろバカ雄二☆」

先ほどのしおらしい態度はどこへやら。小憎らしいほどのいい笑顔になる綾香。

それを見て、美波と瑞希は軽く嘆息する。

「やっぱりね」

「ダメですよ？　綾香ちゃん。あれじゃ坂本君が気の毒ですよ？」

苦笑いを浮かべる美波と、軽く諭そうとする瑞希。それに対してぶーぶー文句を垂れる綾香。

不意に、明久の肩をつかんで強ばっていた綾香の手が優しく包まれた。

明久がそっと彼女の手に自分の手を重ねたのだ。

それだけで、綾香の体の奥が落ち着きを取り戻していった。

そんな四人を見つめる一対の目。その目は綾香に強い意志をぶつけるかのように細まる。

長い黒髪を翻し、立ち去る影。

そのまなざしが意味するものは……。

少し経って。

その教室には奇妙な集団が集まっていた。

上方に向かって尖った黒い被りものとこれまた黒いマント。
手には大鎌を携え、衣装には『F』の文字がワンポイントで入っていた。
そんな装束の“怪人”が数十名集っているのだ。
そしてその中央には、猿ぐつわをかまされたうえに縛られて転がされている雄二の姿。

『諸君。ここはどこだ?』

『『『最後の審判を下す法廷だ!』』』

『異端者には?』

『『『死の鉄槌を!』』』

『男とは?』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの!』』』

『宜しい。これより……2－F異端審問会を開催する!』

もはやそこはサバトの会場だった。

裁判か何かのように罪状が読み上げられ、蓑虫のような雄二の罪が読み上げられていく。

むろん雄二は反論しようとするが、猿ぐつわまで咬まされ、罪を認める台詞をねつ造されていた。

その様子を明久と美波は、とても残念なものを見る目で眺め、瑞希は苦笑いを浮かべている。どうやら冗談だと思ったらしい。

一方で綾香は……。

「アハハハハ、アッハハハハハハハ♪♪」

腹を抱えて笑っていた。

廃屋のような教室内に十字架が打ち立てられ、そこに雄二が掛けられる。
すでに灯油とライターまで用意されたあたりで、雄二の顔がひきつった。
一方、そんな雄二を見て笑い転げていた綾香もそろそろ落ち着き始めていた。
「あー笑った笑った。あ、でもさアッキー」
と、彼女の隣に立つ明久へと顔を向ける。
それに彼が応じると、綾香は花が咲くように笑いながらこう言い放った。
「あいつら、すっげえおもしろかったけど、正直“キモイ”な☆」
その言葉に異端審問会の面々の動きがピタリと止まる。
「なんだろーな？あんな“キモイ”ことしてたら、女の子に避けられるよなー？」
しみじみつぶやかれた言葉に白くなり、ピシリとヒビが入った。
「あたしだったら絶対近づきたくないなあ」
全員、砕け散って灰になった。
その様子を見た綾香は、彼らを指差しながら腹を抱えて笑う。
そんな綾香を見て、明久は苦笑いを浮かべると口を開いた。
「騒動の発端は綾香じゃないか。そんなこと言っちゃ……別に構わないか」
綾香を注意しようとした明久だったが、ハッとなって顎に手を当てると意見を翻す。
その言葉に綾香は我が意を得たりとばかり笑顔になる。
「でしょでしょ？！」
おおげさにはしゃぐ綾香を見て、明久は柔らかく笑った。

つられて美波と瑞希も仕方ないとばかりに苦笑いを浮かべる。
「……？」
そんな彼女らをファインダーに収めていた康太は、微妙な違和感に首を傾げていた。
不意にフレームインした明久が彼の方を見て、人差し指を口に当ててみせる。
そこで気づいた。
綾香の表情がわずかに硬いことに。
これには康太も驚いた。こと、女子が絡むことならば細やかな機微に至るまで気づける彼が、ほとんど気づかないような違和感を、明久がすでに感じ取っていたことに。
だからこそ、明久は綾香の近くで一緒に笑っているのだということに。
「……フ」
小さく笑い、デジカメを仕舞う康太。
どうせ撮るなら、その女子の最高の顔を撮る。
それが康太のやり方だった。

福原教諭が廃材を片づけ、新たな教卓をやっとこさ発見して戻ってきたことにより、騒動は終息を見せた。
それ以前にFクラスの大半が屍になっているわけだが。
そして珍しく怒った感じの福原教諭に注意された綾香が、ちょっとしょげたのは完全に余談だ。
「くっそ、ひでえ目に遭ったぜ……」
ボロボロの雄二が肩で息をしながらつぶやくと周りを見回した。
広がるのは死屍類々としたクラスメイト達。
彼らが一応復活するのを見計らって先ほどの話を続ける。
「はあ、グダグダになっちまったが……。あー、どこまで話したん

だったかな？　とにかく！　俺たちなら勝てる！！　そのための方策も、“ここ”にある！！」
　自分の頭を指しながら力強く言う雄二。
「みんな、この境遇は大いに不満だろう？」
『当然だ！！』
「ならば戦争だ！！　全員筆を執れ！　出陣の準備だ！」
『おおーーっ！！』
「俺たちに必要なのはちゃぶ台じゃない！　Ａクラスのシステムデスクだ！」
『うおおーーっ！！』
「おーー☆」
　一度鎮火しかかった炎が、今再び燃え上がった。
　綾香もノリノリである。
「よし。まずは俺たちの力の証明として、Ｄクラスを落とす。明久！」
「ん？　なんだよ雄二」
「お前が宣戦布告の使者だ。大任だが、お前にしか任せられないと思ってる」
　威厳たっぷりに言う雄二。しかし、当の明久の反応は薄い。
「……下位勢力の使者って、たいていひどい目に遭うよね」
「バカを言うな。大事な使者にそんな事をする訳がないだろう？　騙されたと思って行ってみろ。大丈夫だから」
　まじめな顔で返す明久に、雄二も真剣な顔で応じる。
　その表情を見て、明久は軽く息を吐いた。
「仕方ないか。じゃあちょっと行ってくるよ」
　言いながら立ち上がる明久。
　それを綾香が見送る。
「おー☆　がんばれよーアッキー♪」
　その口元に、悪魔のような笑みを浮かべながら。

ちなみに、秀吉は未だに灰化から復活出来ていなかった。

「失礼しま～す。代表の方おられますか～？」
ところ代わってＤクラス。宣戦布告の使者となった明久は、その教室の戸を開けた。
誰かを呼ぶ声が聞こえ、奥から一人の少年が姿を現す。
「俺が代表の平賀だけど、なんのようかな？」
少し不思議そうな顔で明久を見る平賀。
「えっと、僕はＦクラスの吉井明久だけど……」
明久が自己紹介をして用件を告げようとした瞬間。

『て、天使ちゃんっっ？！』

素っ頓狂な声に遮られてしまう。しかも明久は、その声に聞き覚えがあった。
「こ、この声……ま、まさか……」

恐る恐る声のした方を見た瞬間、黒い影が明久に突進してきた。
「キャーーーッッ☆♪　天使ちゃんキターーーっ！！」
「グフォッ？！」
しっかり腹筋を締め、腰を落としていたにも関わらず、明久の体が二メートルは後退した。
「た、玉野さん……」
文学少女然としたこの少女、玉野美紀の姿に明久はげっそりとなる。
「天使ちゃん天使ちゃん天使ちゃん天使ちゃん天使ちゃん天使ちゃ

ん天使ちゃん天使ちゃん天使ちゃ

顔をひきつらせてつぶやく明久。
次の瞬間、背筋に寒いモノを感じて避けると、明久の首元を何かが通過した。
それは制服の黒い袖だ。
その先に伸びる白い手には、文月学園指定のネクタイ。
あの一瞬で抜き取ったらしい。
見ればその手の主は、復活した美紀だった。
「さあ、天使ちゃん！！　お着替えしましょう！」
「豚野郎！　死になさい！」
美紀が明久に迫り、美春の手からはいくつもの文房具が投げ放たれる。
「くっ？！」
軽くバックステップしながら、すばやく上着を脱いで左腕にもち飛翔してくる文房具をなぎ払う。
そして右から伸びてくる美紀の手を、右手一本で弾いていく明久。
その間にもどこに隠していたのか大量の文房具を投擲する美春。
二人の猛攻に、防戦一方になる明久。
そんな彼らを見つめるDクラスの面々と、戸口から覗いてくる蒼い瞳とボリュームが有りすぎて隠しきれない金色の癖っ毛。
綾香だ。
教室をこっそり抜け出し、明久の様子を見に来たらしい。
その口元には、あの、小悪魔のような笑み。
どうやら明久の窮地を楽しみに来たらしい。

ピンチの明久。
それを楽しげに眺める綾香。
はたして宣戦布告は出来るのだろうか？

Dクラスにて、二匹のケモノ相手に苦戦する明久。
その視界の端に、ボリュームのある金色がかすめる。
一瞬そちらに視線を向けて確認すれば、それが綾香の金髪だとすぐにわかった。
そして、口元にはあの笑み。
「って綾香ぁっ！！　おまえ知ってたなっ！？」
攻撃を捌き続けながら声を上げる明久。
すると綾香が笑みを深くする。
しかし、明久にはそれを確認する余裕もない。
たまりかねて声を上げてしまう。
「くっ？！　見てないで手伝ってよっ！！　綾香っ！！」
「えー。どうしよっかなあ☆」
必死な明久に対し、値踏みをするように返す綾香。
その様子に、明久は渋面を作る。
次第に追いつめられはじめる明久。
「ぐっ！？　くくっ？！　じょ、条件はっ！？」
苦し紛れに叫ぶ。と同時に綾香の蒼い瞳が輝いた。
「今日のお昼はアッキー持ち、夕食当番も交代ね？　後帰ったらマッサージね♪」
「ふっかけすぎだろっっ？！」
綾香の出した条件に、思わず突っ込む明久。
すると綾香は大げさに肩をすくめた。
「ああ、残念だな～。従弟が女装趣味に走ったあげく、グロテスクに殺されるなんて……。いやー残念残念」
そう言って見せつけるようにきびすを返して立ち去ろうとする綾香。それを感じて明久はあわてた。

「ま、待ったぁーーっ！！」

思わず叫ぶ明久。その横を文房具がすっ飛んでいき、綾香が足を止めた。

「飲む！！　さっきの条件飲むからっ！！　助けて綾香ぁっ！！」

徐々に追いつめられ、半泣きになりながら承諾する明久。

しかし。

「えー。でもさっき断られたしな～」

言いながら渋り、横目で明久を窺う。

いよいよ進退窮まり始めた明久はマシンガンのように繰り出される美紀の手を片手で払い続ける。

「……帰りにプリン買ってあげるからっ！！」

飛来する文房具から飛び退き、もはや後が無いとばかりに叫ぶ明久。綾香の足が止まり、勝ち誇ったかのような顔になる。

「二個ね♪」

「わ、わかったぁっ！！」　嬉しそうに言う綾香に、明久はやけくそ気味に答えた。

次の瞬間、美紀の目の前に金色の影が踊り込む。

「！　あ、綾香ちゃん？！」

「また邪魔をするのですかっ？！　夏目綾香！！」

その影に、見覚えのある蒼い瞳を認めて驚く美紀と美春。

「交渉成立♪」

言いながら美紀の前に立ちはだかる綾香。それを見て美紀は綾香に手を伸ばす。

「なら！　天使ちゃんの前に綾香ちゃんにお着替えを！」

「ごめん美紀ちゃん、あたしは“それ”パスだわ」

美紀に苦笑いしながら答えた綾香は、伸びてくる手をすべてパリングしていく。

美紀と綾香の腕が見えなくなるほどの速度で繰り出され、手を打ち合わせる音が、マシンガンを撃つかのように響き渡る。

が、終わりは唐突にやってきた。
「きゃっ？！」
美紀の可愛らしい悲鳴とともに彼女の両腕が上に向かって万歳するように振り上げられた。
綾香が美紀の手を捌くときに、角度とタイミングを調整して上に弾いたのだ。
そのまま美紀の右脇を抜けるように左足を踏み出し、右腕を横へ軽く出しながら、二の腕を相手の鎖骨に当て、右足で美紀の両足を刈る。
刹那、綺麗に宙を舞う美紀。
「にゃ～～～っ？！」
悲鳴を上げ一回転しながら落ちる彼女の首根っこをひっつかんで床に叩きつけられるのを防ぐ綾香。
「おっとっと。危ない危ない。で、アッキーは」
目を回した美紀をその場に横たえ、長い付き合いの従弟へ信頼しきった目を向ける。
その彼女の視線の先で、大きく振り回した制服の上着を目くらましにして美春の背後に回り込み、その首筋に手刀を落とす明久の姿があった。

「な、なんとかなったあ……」
大きく息を吐きながらつぶやく明久。もはや天敵と呼ぶに等しい二人だが、やはり女子を殴ったりはしたくない。
かといって手加減しながら二人同時に無力化するのは難しかったのだ。
「お疲れ☆」
と、ボリュームのある金色の癖っ毛を揺らし、蒼い瞳の少女が明久の元へ歩み寄りながら片手をあげる。
「うぃ～～～～」
疲れた声を出しながら明久も片手を上げ、二人で打ち合わせた。
「って！　綾香あの子たちがDクラスだって知ってたな！」
声を上げた明久を見て、綾香が軽く驚く。
「あ、覚えてた。いや～、美紀からメールが来ててさ、それに美春も居る旨が書かれてたんだよね～。アッキーが面白……マズい事になると思って野次馬……心配で見に来たんだよ～。いやあ、無事で良かった良かった☆」
顔に憂いの表情を浮かべながらそう言う綾香を見て、明久はジト目になる。
「本音がだだ漏れてるよね？　それ」
指摘され、不〇家のペ〇ちゃん顔になる綾香。
それを見た明久は、深く深く嘆息する。
「あ、あのー……」
不意に声をかけられ、顔を上げると、Dクラス代表の平賀が所在なさげに佇んでいた。
「俺に用事って……？」
平賀の言葉に、明久がアッとなり、綾香もそちらを見る。

「あー、あの二人のことで、すっかり忘れてたよ……」
「まだ言ってなかったの？」
肩を落としつぶやく明久に綾香があきれたように言う。
「言う前に襲われたんだよ……。だいたい綾香が事前に教えてくれれば……」
「うまく対処できたって？」
「いや、何としてでも雄二に押しつけた」
それを聞いて、綾香が快活に笑う。
だが、Ｄクラスの面々の困惑は深まるばかりだ。
「和んでるところ悪いんだが、早くしてくれないかな？　俺も暇じゃないんだ」
焦れたように声をかける平賀。言われた明久は愛想笑いを浮かべながら、ゴメンゴメンと返す。
「えーと、改めてＦクラスの吉井明久です。僕たちＦクラスは、Ｄクラスに対して宣戦布告します」
「……え？　宣戦布告？　Ｆが？　Ｄクラスの俺たちに？」
さらりと言われた宣戦布告に呆気にとられる平賀。
「開戦は午後一ってことで☆　じゃ、戻ろっアッキー♪」
その隙に明久の言葉を綾香が引き継ぎ、彼の腕をとってさっさと退室していく。
後には今起きていた騒動と、宣戦布告されたことに困惑するＤクラス一同が残された。

廊下に出るなり、綾香は上機嫌で明久の左腕に右腕を絡め、手のひらを合わせて絡めるようにして手を繋ぐ。
「おっ昼っは、なっに食べよっかな♪　あ、デザートもつ～けよっと☆　いいよね？　アッキー♪」
「……ハァ。別にかまわないよ」

楽しそうに訊ねる綾香に、明久は億劫そうに答える。
「むーノリ悪いぞ？　アッキー。楽しめ楽しめ♪」
そんな明久に、綾香は口をとんがらかせるが、すぐに笑顔になった。それを見た明久は自分の顔が、自然と弛むのを感じた。

『ちっ。夏目の奴、俺を袖にしておいてあんなバカとイチャつきやがって……。この俺をバカにするとどうなるか、思い知らせてやるからな……』

お皿の上に載せられたハンバーグへ、乱暴にフォークが刺さる。
その衝撃に一口サイズに切られたそれと、お皿が跳ねた。
への時に結ばれた口元へそれを運び、金髪の少女、綾香が仏頂面でそれを頬張った。
「なによアッキーってば！　雄二がアッキーを戦力に数える訳無いんだから、ミーティングなんて出る必要ないのに！」
ぷんすか怒りながら食事を続ける。
あの後、教室に戻った二人だったが、明久は食事をしながらミーティングをするという雄二達についていってしまった。
その前に、明久は自分の財布からお金を出して、綾香に渡し、一人で食べに行くよう言ってきた。
明久的には、昼食は明久持ちというのを履行したつもりなのだろう。
だが、綾香は明久と二人で一緒に学食で食べるつもりだった。
そこで二人は揉めてしまった。
結局に明久はミーティングへ。
綾香は一人で学食へ来てしまった。
「食事をアッキーが持つ話なんだから、一緒に来るのが当たり前じゃない！」
ぶつぶつ文句を言いながらハンバーグの定食を平らげていく綾香。
と、そこに近づく影があった。
「……なんだか荒れてるわね？」
「ふへ？」
かけられた声に、ハンバーグを頬張ったままそちらを見る綾香。
そこにいたのはキツい感じの顔が特徴的なＣクラス代表の小山友香がサンドイッチとミルクを載せたトレーを手に立っていた。

その姿に、綾香は口の中のものを急いで嚥下していく。
「ぷはー。やっほ☆　ゆっか♪」
去年クラスメイトだったこともあり、にこやかに挨拶する綾香。
「おひさ。なんだか荒れてるみたいだけど、どうしたの？」
対して友香は軽くはにかむように返すと、となり良い？　と、訊ね、綾香がうなずくのを見てから席に座った。
「それがさー、聞いてよ、ゆっか。アッキーがさー」
仏頂面のままそう切り出す綾香が珍しく、友香は聞く体勢になる。
「アッキーって吉井君？　綾香の彼氏の？」
「違うって。ただの従弟だよ。で、そのアッキーがさあ……」
と話を続けていく綾香。友香はそれを聞きながら顎に手を当てている。
「……なるほどねえ。試召戦争か。けど綾香、はっきり一緒に食べるって約束をしたわけじゃあないんでしょ？」
そう言われて綾香はフォークの先をくわえたまま固まった。
「それは……そうだけど……」
バツが悪そうに目を逸らしつつぶやく綾香。
言っていることは解る。けれど納得できない。
綾香はそんな表情だ。
その様子を横目で見ながら、友香は軽く嘆息する。
「吉井君が坂本君たちに着いていったのには意味があるのかもよ？　ちゃんと話し合った方が良いわね。本格的にこじれる前に」
「……うん」
しんなりうなずく綾香。それを見ていて友香はため息一つ。
どう見ても痴話喧嘩だが、本人達にはまるでそのつもりがないらしい。
去年から見ていてやきもきすること甚だしいが、踏み込みすぎるのもこじれる要因だ。
だが、友香は普段見ているだけで元気になれるこの友人の力になってやりたかった。

「はあ。あ、そうだゆっか」
ため息をついた綾香が突然なにか思い出したような顔になる。
友香はまた相談かと、食事の手を止め、綾香の方を見た。
「なに？」
そう訊ねてくる友香に、綾香は口を開きかけ、軽く思案しつつ頭を軽く掻き始めた。
珍しく言い淀む彼女を、訝しげに見る友香。
「どうしたの？」
怪訝な様子で聞いてくる友香に、綾香は苦笑いを浮かべた。
「いやその……彼氏で思い出したんだけど……」
「？」
はっきりものを言う綾香にしては珍しい歯切れの悪さに、友香は首を傾げる。
「……うん、やっぱ言おう。ゆっかの彼氏なんだけど……」
「恭二？　恭二がどうかしたの？」
「うん、その恭二君なんだけどね？　二月の頭くらいにあたしに告ってきてさ……」
「……は？」
友香の目が点になった。
「断ったんだけどしつこくって……なんとかならない？　電話までかかってきてさ」
「へ、へえ……恭二が綾香にね……」
ひきつり気味に答える友香。
「やっぱ知らなかったんだ。こんなこと言いたくないけど、彼はやめた方が良いと思うよ？　いい噂も聞かないし……」
綾香は申し訳なさそうに続ける。すると友香はふらりと立ち上がった。
「教えてくれてありがと。……ちょっと、恭二と話し合ってくるわね」
「う、うん……」

黒いモノをまといながら学食の出口へ向かった友香を見送りながら、綾香は教えない方が良かったかなあ。と、ひとりごちた。

カリカリとペンを走らせる音だけが、その教室に響く。
その教室に、幾人かの教師と、女生徒二人。
Ｆクラスの姫路瑞希と夏目綾香の二人が、試験を受けていた。
午後の授業開始時間と同時にＦクラスはＤクラスと交戦状態に入った。
それと同時に、点数の無い瑞希と綾香は回復試験に挑むことになる。
集中して問題を解いていく瑞希に対し、綾香は気もそぞろで集中できていない風だった。
それもそのはず、綾香は結局明久と話が出来ていなかった。
いろいろ悩んでいるうちに昼休みが終わりに近づき、あわてて戻ったときには、すでに開戦準備。
そのまま開戦してしまい、明久は前線へ。綾香は別室で回復試験に挑むことになった。
現在受けているのは数学のテスト。綾香がもっとも得意とし、一番好きな科目だ。
数式をパズルを解くかのように解いていくのが楽しく、寝食を忘れて解き続けることも出来るほどだ。
それが、まるで楽しくない。
どうしても明久の事が気になってしまい、それが彼女の集中を阻害しているのだ。
気持ちは晴れないまま、綾香の回復試験は続いていた。

一方、前線。

前衛がDクラスの先陣と激しい鍔迫り合いを繰り広げていた。
その様子を見て、中堅部隊副隊長の島田美波は、中堅部隊が待機するEクラス前まで戻ってきた。

「吉井！　木下の前衛部隊が、Dクラスとの戦闘に入ったわよ！」
「……」
しかし、美波の報告を聞いた隊長の明久は何の反応も見せない。
そんな彼の様子に、美波が怪訝そうにする。
「吉井？　吉井ってば！」
「……」
何度か呼んでみるが反応がない。
次の瞬間、美波の顔が特大の青筋となった。
「シャキッとしなさい！！」
「ごぶらばごべしゃっ？！」
美波の声とともに明久の横っ面へとコークスクリューブロウが突き刺さり、明久の体はきりもみしながら吹っ飛んでいった。
「まったく、ぼんやりしてないでよね！　木下達が支えきれなくなったら、ウチ達が代わりに前線を支えなきゃいけないのよ？　隊長のあんたがそんなんじゃ困るのよ！」
「う……そ、そうだね島田さん。僕たちのすぐ後ろは本陣。中堅隊が頑張らないと、後方で回復試験を受けるみんなが安心できないもんね」
そう言って立ち上がる明久。
それを見てうなずく美波。
と、そのとき、誰かの声が響いた。
『前衛が後退をし始めたぞ！』
その声に、明久は表情を引き締めながら口を開いた。
「よし、中堅部隊は前進するよ！　後退してくる前衛のみんなを援護しつつ、戦線を形成するんだ！」
明久のその声に、中堅部隊が移動し始める。

すると、向こうから男子の制服をまとった美少女が走ってきた。
「木下！」
「む？　島田に……明久か。すまんが頼むぞい。前衛部隊はボロボロじゃし、ワシの召喚獣も大分やられた」
「わかったよ、秀吉。後方で回復試験を受けてきて」
「……んむ」
明久に言われるも、視線を外しながら脇を抜けていく秀吉。
そんな彼を、明久は少し悲しそうに見送った。
「どうしたのかしらね木下の奴。ミーティングの時も、あんたに目を合わせようとしないし」
「そうだった？　僕は気づかなかったけど。疲れてるんじゃないかな？　秀吉」
そう言ってごまかす明久だったが、内心、美波がなにか言い当てるのではないかと冷や冷やしていた。

「そんなことより、今は戦争に集中しなきゃね？　そう注意したのは島田さんだよ？」
「……わかったわ。行きましょ吉井」
釈然としない面もちのまま、美波は動き出す。その後ろ姿に、明久の口が小さく何かをつぶやいた。そして後方へ走りゆく秀吉の背中へと一瞬視線を巡らせてから、瞑目し、振り切るように見開いて前線へと走り出した。

派手な金属音を響かせ、火花を散らし、レイピアとロングソードが激突する。

「美春いい加減にして！　ウチにそのケは無いのよっ！！」

「嘘ですわっ！　美春とお姉さまは永遠の愛によって結ばれているのですわ！」

「ウチは普通に男の子の方が好きなのよっ！」

「あり得ませんわ！！」

ポニーテールを揺らした美波と、ドリルツインテの美春の応酬が続く。

前衛部隊と交代した中堅部隊。しかし、戦力的に劣るＦクラス側は、そこかしこで劣勢に追いやられていた。

隊長格である明久や美波も参戦し、そこを美春に突かれた形だ。

「よ、吉井！　援護を！」

押し切られそうな美波は、明久に助けを求める。

と、同時に美春から吹き付けるような殺気を放射される。

「美春の邪魔をする豚はすべてコロします！」

Ｄクラスで相対した時を大きく上回る迫力。周囲の人間は、教師もＤもＦも関係なく怖れおののく。

ただ一人をのぞいて。

「試獣召喚（サモン）」

言霊に応じ、魔法陣が広がって、門が開く。

そこに顕現するは、一匹の使役獣。

両腕に籠手を填め、学ランをまとい、右肩の肩当てに当てるように木刀を肩に担いだ召喚獣。主である明久の姿をディフォルメしたその姿でたたずむ。

その頭上に示される点数は、“４６”。

「そんな雑魚召喚獣で美春に勝てると思わないことです！」
召喚したことで、敵対行動と認識した美春は、美波の召喚獣を捨て置き、明久の召喚獣へと己の召喚獣を走らせる。
突き出された剣を召喚獣に避けさせる明久。左足を引いて半身になるだけで、攻撃の軌道から外れ、美春の召喚獣はそのまま走り抜ける。
と、明久の召喚獣が足を引いた勢いのまま体を旋回させ、籠手のはまった腕を、美春の召喚獣の後頭部にたたき込む。
ダメージを受けてたたら踏んだところへ、すかさず木刀を突き入れた。
後頭部をさらに痛打され、一気に点数が減る美春の召喚獣。
「そ、そんなバカなっ！！　美春の召喚獣の方が強いはずですわ！！」
いいようにあしらわれてダメージを受けたことにショックを隠せない美春。
一方で明久はため息を吐く。
「やっぱ非力だなあ。もう少し点数採れるように頑張んないと……」
「戦闘中に余裕ですわね！」
美春の召喚獣が振り向きながら明久の召喚獣へと切りかかる。
それを丁寧に避けさせ、明久はカウンター気味に木刀で美春の召喚獣を叩いていく。
みるみるボロボロになっていく美春の召喚獣。
「こ、こんな……こんなことが……」
為す術もなくやられていく自分の使役獣の姿に動揺する美春。
そして。
「スキあり！」
「あ」
横合いから美波の召喚獣が美春の召喚獣に切りかかり、倒してしまった。
あまりのことに、明久は目が点になる。

「あーーっ?!　み、美春の召喚獣がっ!!　オノレ吉井明久ぁっ!!　かくなる上は、お姉さまだけでもっ!!」
「に、西村先生!　戦死者です!　早く連れていって下さい!」
実力行使に及ぼうとする美春を指さし、美波が西村教諭を呼ぶ。
「ほう、清水か。たっぷり補習漬けにしてやる。覚悟しろ!」
「は、放して下さいまし!?　お姉さま!?　おねーさまー!?　こうなったのも、全部吉井明久のせいですわっ!!　無事に卒業できると思わないで下さいまし!!　この豚野郎ぉーーっ!!」
西村教諭に担がれながら叫び続ける美春。
その様に、戦争は一時的に停止していた。
そして明久は。
「……トドメさしたの、僕じゃないのに……」
がっくりとうなだれていた。

「回復試験お願いします！」
聞こえてきた女子生徒の声に、綾香は顔を上げた。
聞き覚えのあるその声は、美波のものだ。
その前にも、秀吉と数人の男子が回復試験を申請しているのを綾香は聞いている。
「科目はどうしますか？」
「化学をお願いします」
前線のメイン科目は化学らしい。秀吉らも大半が化学の回復試験を受けている。
綾香自身はこれまでに数学と世界史を終わらせていた。
雄二の話では、時間稼ぎを主とするため、途中で世界史へと科目変更すると言うことだったからだ。
そして今、美波が化学の試験を受けにきた。
美波は明久を隊長とする中堅部隊の副隊長だ。
それが回復試験を受けに来たということは、かなり劣勢なのかもしれない。
綾香はいったん軽く瞑目しながら思案し、ついで目を見開くと、手を挙げた。
「先生！　採点お願いします！」
「いいんですか？　夏目さん。まだ二十分ちょっとありますよ？」
綾香の言葉に驚いた“化学”教師がそう言ってくるが、綾香はっきり「ハイ」と返事をした。
その様子に瑞希と秀吉も驚いて顔を上げる。
化学教師がテストを回収し、手早く採点していく。
「はい、採点終了です。これは入力しておきますが、次はなにを受けますか？」

「いえ、結構です」
次のテスト科目を聞かれるも、それに首を振って立ち上がる綾香。
ついで走り出した彼女に驚いて、皆が振り向く。
教師の注意する声を背に走る綾香。
その音を聞きながら、秀吉は唇を噛んだ。

一方、廊下戦。十八人居た明久率いる中堅部隊はすでに半分を切っていた。
Dクラス側にも相応の被害を与えはしたものの、戦力差があることは否めない。
部隊はもう半包囲されかけており、明久も召喚獣を呼び出し応戦している状況だ。
「……やっぱり地力が違うな」
被害の拡大を見て、一人ごちる明久。戦い続けた疲労がフィードバックとともに蓄積し、すでに肩で息をし始めている。
その召喚獣も、彼同様ぼろぼろの様相ではあるが、いまだ点数が三十点台をキープしているのは明久の操作技術のたまものだろう。
だが、その動きは明らかに精彩を欠いていた。
「吉井明久覚悟！」
「大人しく討ち取られてよね！」
二体の召喚獣による同時攻撃。
「く……」
迫る長剣を籠手でいなしながら、頭上に迫る戦斧の持ち手を木刀で叩いて軌道をそらす。
そのまま体が回転し、長剣持ちの頭を蹴り飛ばし、体勢を崩した戦斧持ちの脇腹へと拳が突き刺さった。
もんどりうつ戦斧持ちを置き、長剣持ちへと踏み込んで木刀を相手へ突き込む。

その戦死を確認せずに戦斧へと振り向き、床をこするように木刀をアッパースイングで相手の顎へ打ち込み、さらに返す刀で頭頂を殴りつけた。

そして粒子に還る二匹の召喚獣。

明久の操作技術と戦いの知識と経験が、彼の召喚獣を点数では測れない強さに押し上げていた。

だが、彼以外のものはそうはいかない。

『だ、ダメだ！　やられる！』

『くそっ！　すまん吉井！』

『た、助けてくれ！　補習はゴメンだ！』

『だ、だれか援護をっ！』

あっという間に討ち取られていく中堅部隊の男子生徒たち。

「み、みんなっ！？」

討ち取られていく仲間の姿に明久は動揺する。

そこへ攻撃を仕掛けられた。

「お前にも引導渡してやるよ！」

「くそっ！」

悪態をつきながら攻撃を避けさせる明久。だが、消耗し尽くし、五人からに囲まれた状況は絶望的だ。

逃げることもかなわぬなら、一人でも道連れにとばかりに明久が構えた瞬間。

キュキュッと、上靴が廊下をこする音が響き、その言霊が響いた。

「試獣召喚（サモン）！！」

同時に二本の飛刀が飛び、二体の召喚獣を貫く。

そして、明久の視界の端に、金糸が舞った。

「……綾香」

つぶやく明久に応えるように、蒼い瞳が彼を見た。

だい☆じゅうろくもんなんだな～♪

「……綾香」
「……アッキー」
二人の視線が絡み合い、眼差しが揺れる。
二人がどちらからともなく口を開きかけた瞬間、それを薙ぎ払うように大声が響く。
Dクラス前線指揮官の塚本だ。
『残り数人だ！　一気にしとめろ』
その声に従い、残っているDクラスの大半が、化学のフィールドへ突撃してくる。
二人はそちらへ向き直り、召喚獣を身構えさせた。
文月学園の冬服に、ガントレットとレガースを装備しただけの、ディフォルメ綾香な彼女の召喚獣が、両手に一本ずつ持った紐を引くと、それが柄頭に繋がった柳葉刀が引き戻され、それを器用にキャッチする綾香の召喚獣。
その頭上の数字は“８１”。
並ぶように立つ明久の召喚獣は、“２４”だ。
『残りは二人だ！　一気に押しつぶせ！』
その声に気づけば、中堅部隊の男子たちは一人残らず討ち取られていた。
対してDクラス部隊は、消耗はしているものの、十人以上残っている。
絶体絶命である。
にも関わらず、二人の顔には、焦燥も絶望も無い。
あるのは、互いの隣に立つ従姉弟への信頼感と安心感。
喧嘩をしていても、隣に立てば安心できる。
そんな顔の二人が居た。

『押し包めっ！！』

だがそんなことはDクラスの面々には関係ない。

塚本の号令に従い、十人からのDクラス召喚獣が化学のフィールドを走る。

その前へ、綾香の召喚獣が柳葉刀を手放しながら、ステップを踏むように躍り出た。

左腕を大きく振り回すと、紐で繋がれた柳葉刀が大きく振り回され、召喚獣たちを薙ぎ払う。ついで綾香の召喚獣が、くるんと回転しながら右手を振るい、もう一方の柳葉刀が飛翔する。

それを受けた一体が光に還るのを待たずに綾香の召喚獣がステップを踏みながら両腕を振りかざし、回転しながら腕を開いて屈み込む。

さらに伸び上がるように立ち上がりながら腕を振りあげた。

そんな舞いに合わせ、二本の飛刀がフィールド内を縦横無尽に舞い踊り、Dクラスの召喚獣を切り裂いていく。

美しいまでの“死の舞踊（ダンスマカヴル）”

それを召喚獣にあわせて綾香自身も舞う。

舞い踊る黄金の髪と、すべてを見透かすかのような蒼い瞳に、男女を問わず見とれてしまう。

その隙が、彼らの命取りだ。

彼らが見とれたのは、殺戮の舞い。その意味を彼ら自身が身を持って体験することとなる。

そんな死の刃が乱舞する中を、明久の召喚獣が疾る。刃と刃の間を潜り抜け、綾香の攻撃でダメージを受けた相手に一撃を加えて離脱。すかさず反撃に出ようとした相手は、真横から迫った柳葉刀に切り裂かれて光に変ずる。

アイコンタクトすら交わさぬ絶妙のコンビネーション。

綾香の刃が自らに当たるわけもないとばかりに駆け巡る明久の召喚獣。そして、綾香も明久に当たるわけがないと二本の飛刀を自在に振るう。

気づけば、ものの一分も経たずに、十体以上居たDクラスの召喚獣が五体にまで減じていた。

『な、なんてコンビだ……』
『こんなに強いなんて……』
『く、ほ、補習はゴメンだぜ』

二人のコンビネーションに、Dクラス側の動きが止まった。
その時、よく通る大きな声が廊下に響きわたった。

『明久、夏目、あと少し持ちこたえろ！』

聞こえた声に、一瞬そちらを見る二人。
「スキ有り！」
思わぬ方から聞こえた声に、綾香がそちらを見れば、己の召喚獣に凶刃が迫っていた。

綾香の召喚獣に迫る凶刃。その刃が到達するより早く、そこに割り込む姿があった。
明久の召喚獣だ。
そのまま刃が彼の召喚獣の胸食い込み、あっという間に点数が無くなる。
そしてその刃の持ち主にもまた木刀が突き込まれていた。
当時に光へ還る二匹の召喚獣。
その様に、綾香の蒼い瞳が見開かれた。
するとすかさずそこへ、巌のごとき地獄への使者、鉄人西村宗一が現れる。
「戦死者は補習！！」
その声を聞くなり逃げ出したDクラス生徒をあっさり捕まえ、ついで明久へ目を向ける鉄人西村教諭。
「……なんだ逃げんのか吉井」
油断無くそう明久へ声をかける西村。
その言葉に明久が胸元へ手を当てながら苦笑いする。
「あはは、今更逃げても無駄でしょうし、それに……」
「それに……？」
軽く瞑目してうつむく明久。西村はその言葉の続きを促す。
「それに、守りたいものを守れましたから、後悔はないです」
晴れやかな様子で顔を上げる明久。
その言葉に、西村が口の端を緩める。
「そうか。なら補習室へ向かうぞ吉井」
「はい」
素直に西村に続く明久。
「あ……。アッキー……」

その様子を、綾香は呆然と見送る以外無かった。力無く持ち上がった腕は、明久に届くことは無く、ただただ無為に宙をさまよった。

「大丈夫だったか？　夏目。明久は戦死か。まあ大勢に影響はないだろう」

本隊を率いて出ばってきた雄二は、綾香の元にたどり着いて開口一番にそう言った。その周囲では残敵の掃討戦が繰り広げられている。

それを眺めて綾香は少しうなだれた。

「……そうかもね」

そう雄二に応え教室へと足を向ける綾香。

その様子に、雄二は小さく息を吐く。

「……明久が気になるのか？」

「え？　あ、ああそうね。あたしを庇って戦死したわけだしね。まったくバカだよね。せっかく補習を受けずに済みそうだったのにね。だからアッキーはバカだって言われるんだよ……」

いつもの快活さはそこに無く、少し困ったような顔で笑う綾香。

それを見た雄二は嘆息する。

「……ま、良いさ。掃討も済んだようだし、一端教室に戻るぞ。全員撤収だ！」

雄二の号令一下、Ｆクラスのメンバーが教室へ向けて歩きだす。

綾香もそれに続こうとして一端足を止め、明久が向かった先を見つめ、軽く唇をへの字に結んでから教室へ足を向けた。

「さて、回復試験を受けていた連中も戻ってきたし、そろそろＤクラスの頭を穫るとするか」

双方共に兵を引き、一時的な小康状態に入ってはいたが、回復試験組が復帰したことで雄二は決断した。
その言葉に試験を終わらせてきた秀吉がうなずく。
「そうじゃな。ところで雄二よ。明久はどうしたのじゃ？　姿が見えんが……」
「あいつは戦死だ。助けに来た夏目を庇ってな」
周囲を見回しそんなことを聞いてくる秀吉に、雄二はどうでも良さそうに答える。
それを聞いて秀吉はまつげをわずかに振るわせた。
「！？　そ、そうか。あ、綾香をのう……」
その様子に雄二は珍しいものを見たという風に片眉を跳ねさせた。
それに気づいた秀吉がわずかににらむように雄二を見た。
「……なんじゃ？」
「いんや。秀吉が動揺するとは珍しいモンを見たなと思ってな」
「……ワシは動揺なぞしとらんぞい」
雄二の言葉を否定する秀吉だが、その口調には力がない。
そのまま逃げるように雄二から離れていく秀吉を見送りつつ、雄二は嘆息した。
「（あの秀吉が、よりにもよって明久ともめ事か？　こっちの作戦に響かなきゃ良いんだが……）」
誰にも聞こえぬほど小さくつぶやく雄二。
それは、己に言い聞かせているかのようでもあった。

Dクラスとの決着をつけるためにFクラスの残存戦力すべてが出撃し、もぬけの殻となった教室に綾香はひとりたたずんでいた。
雄二に気分が良くないと言って、作戦から外して貰ったのだ。
最初は渋っていた雄二だったが、瑞希の口添えもあって、最終的には折れてくれた。
頬杖をついて、ぼんやりと外を眺める綾香。
その耳には、下校する生徒を利用したゲリラ戦を仕掛けるFクラスの面々の声がわずかながらに聞こえてはいたが、綾香自身にとってはどうでもよく感じられた。
と、ひときわ大きな歓声が聞こえ、綾香の形の良い眉が小さく跳ねた。
「……勝ったんだ」
しかし、高揚感はない。その場にいないと言うのもあるだろう。
だが、それだけではない物足りなさが綾香をむしばむ。
次第に人のざわめきが教室に近づいてきたのに気づき、出入り口へ顔を向ける。
結構な人数の男子がぞろぞろとやってきたのを見て目当ての顔を探す。

『あれ？　夏目ちゃんだ』
『俺を待っていてくれたんだな』
『バカ言え、俺に決まっている』
『あの憂いを含んだ顔、きっと俺を心配して……』
『『『ないない』』』
『……デスヨネー』

教室に残っていた金髪碧眼の少女を認めたバカ達が、口々に勝手なことを言っていくが、綾香の耳を右から左へ抜けていった。
ふと、顔を上げて男子の一人に視線をあわせた。
「ねえ、新田君だっけ？」
「は、はははは！　新田純一です！　しゅ、趣味は……」
興奮した新田から視線を外しつつ、ただひとりを目線が探している。
「アッキーは？」
「……デスヨネー。はあ、吉井なら坂本の所へ行きましたよ」
「雄二の所？　……ありがと」
新田の答えに訝しげになった綾香は、お礼を言いつつ席を立つとそのまま教室から出ていってしまった。
そんな彼女の背中を、一同が見送った。

「なに？　明久だと？　確かに補習室から解放されて真っ先にこっちへ来たが、先に教室へ戻ったはずだぞ？」
Dクラス代表と戦後交渉する雄二の元へやってきた綾香が明久のことを訊ねると、雄二は少し面倒そうに答えた。
「……そう」
その言葉に、綾香がちょっぴりしおれる。
その姿に、近くにいた秀吉が口を開いた。
「恐らく行き違いじゃろうて、すぐに戻れば会えるかもしれんぞい」
言いながら慰めるように綾香の肩へ手を伸ばすが、その手が空を切った。
綾香がいきなり秀吉に向き直ったからだ。
「うん。ありがと秀吉。また明日ね？」
そう言って彼に笑いかけると、綾香はまた走り出した。
秀吉の手が所在無さげにさまよい、握りしめられる。

「……なるほど、夏目絡みか」
「？！　……何のことじゃ？」
雄二に言われて身を震わす秀吉。即座に取り繕うも、雄二の目は誤魔化せなかった。
「ポーカーフェイス、崩れてるぞ」
そう指摘してからDクラス代表の平賀に、タイミングは後で伝える。と言って交渉を終わらせた。
「……綾香はの」
「ん？」
「綾香は、ワシをきちんと男として見てくれているのじゃ。その証拠に、先ほども手を空かされたのじゃ。知っておるか？　綾香はあれでなかなか身持ちが硬いでな。男性が体に触れないように気を付けておるんじゃ」
「……いや」
「その事が嬉しくての。去年初めて会ったときから気になっておった。そして目で追うようになり、……気付いたら告白しておったのじゃ」
「おい……」
「いや、聞いて欲しいのじゃ。ワシのケジメのためにもの」
秀吉は泣きそうな顔で雄二に言う。
「普段なら軽い口調で断る綾香が真剣に考えて、答えてくれたのじゃ。そしてワシは振られた。初恋じゃった。じゃからこそ、綾香と仲良うしておる明久を見ると妬ましく思うじゃ」
「……」
「分かっておるんじゃ。ワシが女々しく引きずっておるだけじゃということも」
ひとり喋り続ける秀吉の視界が揺らぐ。
「ダメじゃのうワシは。こんなだから“性別：秀吉”などと言われるんじゃろうのう」
握った拳で顔を拭う秀吉。その肩に雄二が手をおいた。

「そんなことねえよ秀吉。それだけお前が夏目の事に本気だったって事だ。それなら明久を妬む気持ちだって当然だ。お前は立派な男だよ秀吉」

「……はは、そう言ってくれるのはお主くらいじゃのう。ワシが女じゃったら惚れとるぞい」

「……勘弁してくれ」

目元赤くしながら冗談めかして言う秀吉に、雄二はゲンナリとなる。それをみて秀吉が、冗談じゃよ。と笑った。

「うむ、すっきりしたわい。聞いてもらって良かったのじゃ。すぐにわだかまりが消えるとも思えんが、前へと踏み出せそうじゃ」

「そいつは良かった。んじゃ帰るとすっか」

晴れ晴れとした顔の秀吉に、雄二が笑いかける。

「心得た！」

それに応えて秀吉は笑った。

Fクラスの戸を開けて、蒼い瞳が中を覗いた。
すでに、男子達は帰宅したようで、もぬけの殻……ではない。
ただ一人、ちゃぶ台に向かう人影。
柔らかそうなふわふわのピンクブロンドの少女がひとり。
「綾香ちゃん？」
「瑞希？」
思ってもみない人物に遭遇し、綾香は目をしばたかせる。
「どうしたんですか？　綾香ちゃん」
「瑞希こそ」
「私は少し疲れてしまって」
苦笑いしながら答える瑞希。
無理もない。午後からぶっ続けで四科目の試験を受け、さらには試召戦争。体力のない瑞希には酷だったはずだ。
「大丈夫？　家まで送ろうか？」
心配そうに言う綾香へ、瑞希は首を振った。
「ひと息ついていただけですから大丈夫ですよ♪　それより、綾香ちゃんはどうしたんですか？　誰かを探していたみたいですけど」
「え？　うん、アッキーをね」
そう答えて人差し指で頬を掻く。そんな綾香の様子に、瑞希は首を傾げる。
「……綾香ちゃん、明久君と何かあったんですか？」
「へ？」
突然訊ねられてきょとんとなる綾香。その顔を見て、瑞希が小さく笑う。
「綾香ちゃんがこうやって頬を掻くときは大抵なにかを誤魔化そうとしているときですよ」

言いながら頬を掻くまねをする瑞希を見、自身のほほにやられた指先に視線を流す。
「あ、あはは、瑞希にはお見通しかぁ。まあちょっと喧嘩をね……」
苦笑い気味に言う綾香を見て瑞希はわずかに驚いた表情をした。
「喧嘩……ですか？　珍しいですね？」
言われて綾香は恥ずかしそうに頭を掻いた。
「ちょっと久々だったかも。でも、たぶんあたしが悪いのかなって漠然と思う位なんだよね。ねえ瑞希。なんでアッキーは試召戦争に入れ込んでるのかわかる？」
ついでとばかりに瑞希に訊ねる綾香。瑞希は目をしばたたかせ、明久君がですか？　とつぶやく。
綾香がそれに頷くのを見て瑞希は軽く思案するように見せてからイタズラっぽく笑って片目をつむった。
「なぁんて、綾香ちゃんならもう答えがわかってるはずですよ」
「……」
言われて面食らうが、すぐに笑顔になった。
「ま、ね……アッキーが」
「明久君が」
綾香に合わせて瑞希も口を開く。
「一所懸命に」
「頑張るときは」
ふたりで瞑目し、同じ人を想う。
「「いつも誰かのため」」
唱和しながら目を開けて互いを見る、綾香と瑞希。
そしてどちらともなく笑い出す。
「……うん、わかってるんだ。アッキーが。明久がそういう奴だってことくらい」
「ハイ」
視線を落としてつぶやく綾香に瑞希が返事をする。
「だから、いま、アイツにあって話がしたい」

綾香は少し照れくさそうに言う。それを聞いて瑞希は軽く頷いた。
「明久君ならさっきまでいましたよ？」
「ほんと？！　どこに行ったかわかる？」
「帰る支度をしてましたし、今頃昇降口じゃないかと思いますよ？急げば間に合います」
綾香にそう答える瑞希。
それを聞いて綾香は自分のちゃぶ台の下から荷物を引っ張りだした。
「ありがと瑞希♪　愛してるよ☆」
「ふえっ？！」
教室から飛び出し際にそう言いながら、ウインクと投げキッスを飛ばす綾香。
瑞希はそれに面食らってしまう。
そのまま綾香を笑顔で送りだした瑞希だったが、窓の方に移動すると、グランドに視線を落とした。
そこに広がるのは黄昏時の校庭。
人の姿もまばらな空間に視線を巡らす。
それが、校門のところにある長い影に止まった。
瑞希には、それが“彼”だとわかった。
ふいに、昇降口から茜色を反射して光るものが飛び出していく。
それだけで、瑞希には“彼女”だとわかった。九百人から在籍する生徒の中でもあれほど見事なものはない。
茜色を反射したそれが、長い影へ近づいていく。
立ち止まり、二つとなった影がわずかに動く。
そして、二つの影が校門の向こうに消えるのを見ながら瑞希は優しく笑った。

昇降口まで一気に駆け降り、周りを見回すも、求める影は見あたらない。
お互いの位置がわからないときは一人は動かず、もう一人が探す。ふたりの合流したいときの鉄則だ。
その際には、じっとしているのが苦手な綾香が探し、明久はなるべく綾香が見つけやすいところで待つ。これが二人のやり方。
だから明久があちこち移動して捕まらない場合は、意味があることが多い。
そして、最後に綾香が必ず探すであろう場所へと彼は移動するのだ。
だからこそ。
綾香はそこへ視線を向ける。案の定、校門のところにたたずむ長い影を見て、綾香はすぐに“彼”だとわかった。
上靴をスニーカーに履き換え、校庭を一直線に“彼”に向けて走る。
「アッキー！」
名前を呼ばれ、明久が振り向いた。はにかむように笑う明久を見て、綾香は戸惑う。
「じゃあ買い物をして帰ろうか」
そう言って歩きだそうとする彼に面食らいながらもうなずく綾香。
「え？　う、うん」
いつもなら並んで帰る道。
綾香は何となく気後れしてしまい、二歩後ろをついていく。
それから二人は終始無言だ。
綾香は切り出すタイミングを見計らいながらもなかなか言い出せずにいた。

そのままつかず離れずスーパーに入り、夕飯の買い物をする二人。
交わされる言葉はなにを買うかていど。
買い物が終わり、家路に着くも、時間が経ってしまい、さらに切り出しにくくなった。
しかも綾香があれやこれや考えてる内に、明久の住む家族向けマンションへとたどり着いてしまい、そのまま二人で玄関をくぐる。
明久が、買い物袋を持ったまま台所へ入り、本日使う材料とそうでないものに分け、冷蔵庫にしまっていく。
その間に、綾香は買ってきた消耗品を、しまっていく。
これが二人の分担。普段の行動故に、そのまま作業をしてしまう。
そして、いつもの流れで綾香は泊まりがけ用に置きっぱなしにしてある部屋着に着替えてしまい、明久の部屋と“泊まり用の自分の”部屋を簡単に掃除してしまう。
ついでにゴミをまとめながらマンガ類を片づけ、洗濯物を集める綾香。
一方で明久は夕食の準備に取りかかった。
明久が手慣れた様子で食事を準備する間、綾香は洗濯機に洗濯物を放り込んで洗濯。
そのままお風呂を掃除して湯張り。
そこまでやってリビングに戻ると夕食ができていた。
「洗濯や掃除もやっちゃったの？　別に良かったのに」
「んー？　やりたかったから」
明久の言葉に生返事を返す綾香。
そのまま夕餉が始まった。
本日の夕食は、白飯に、豆腐の味噌汁。豚肉の生姜焼きに刻みキャベツとプチトマト。そしてほうれん草のおひたしだ。
テレビのバラエティー番組をつけながら二人で夕食をとる。
その間……無言。
もはやどう切り出したら良いか、綾香にはわからなかったし、明久もどうしたものかと頭を悩ませる。

結局、食べ終わるまで終始会話は無く、二人は食べたものの味もわからない始末だ。
綾香は洗い物は自分がやるからと明久を風呂へ追いやり洗い場に立つと……頭を抱えた。
「ど、どうしよー」
弱々しくつぶやくその姿には、いつもの快活さは無い。
とにもかくにも洗い物をすませてしまう綾香。風呂から上がった明久に話そうと思っていると、明久がリビングにやってきて一言。
「お風呂空いたよ綾香。入っちゃいなよ」
「あ、うん」
反射的に返事をしながら風呂場に向かい。脱衣所に入ったところで頭を抱えてへたり込んだ。
「そうじゃないでしょ?!　あたし!?」
あーもー！　とばかりに頭を掻きむしり。少し頭を冷やそうと風呂に入る絢香。
風呂から上がると髪の水分を大雑把に取っただけで、ドライヤー片手にリビングへ向かう。するとソファで明久が待っていた。
そんな彼へ、「ん」。とドライヤーを渡す。
当然のようにそれを受け取る明久。
その隣に横向きに座って、濡れて灯りを照り返す金糸をさらす。
明久はそれを乾かし、手櫛で梳いていく。
この時間が綾香も明久も好きだ。
時を忘れて明久に髪を委ねる綾香。それを丁寧に手入れしていく明久。
一通り髪が乾くとそれなりの時間だった。
ふと、明日は補給試験があることを思い出し、二人で勉強を始めてしまった。
それが終わる頃には、夜中を回りそうな時間だった。
勉強道具を片づけた明久が、おやすみ。と言いながら自室へ入っていくのを眺め、綾香は口をへの字に結ぶと立ち上がった。

明久がベッドで微睡んでいると、誰かが部屋に入ってきた。綾香だ。
そのまま明久のベッドまでやってくると、するりと潜り込んできた。
幼い時分より互いの布団に潜り込むのが習慣化している二人には当たり前のことであり今更何ということもない。
と。
突然明久は綾香の香りに包まれた。
綾香が背中から手を回して抱きついてきたからだ。
その手はわずかに強ばっていることに明久は気付いた。
互いの体が接しているところが熱くなる。
そして、綾香は明久の背中に顔をうずめるようにしながら、「……明久。ごめん」と、つぶやいた。
綾香が明久をきちんと名前で呼ぶときは真剣な時。これは二人の暗黙の了解だ。
そして、明久は彼女の手に自分の手を重ね、「……うん」と、漏らす。
ついで明久は、身をよじり、綾香の方を向いて、彼女を抱きしめた。
「……僕も、ごめん」
明久の口からでた言葉に、綾香も「うん」と答える。
おでこをくっつけ、蒼い視線とコゲ茶の視線を絡まり合わせながら、二人で笑う。
お互い、相手のぬくもりを確かめるように抱きしめ合いながら、二人は眠りに落ちた。

翌朝。

明久は、なぜか床の上で目を覚ました。

だい☆にじゅうもんなのです♪（後書き）

さて、いかがでしたか？
今回の二人は。

“喧嘩をしていて”

このレベルです（笑）

それでは、また次回♪

「みんな、おっはよー☆♪」
Fクラスの戸を開け放ち、綾香が開口一番元気良くあいさつする。
それは、周囲を明るくし、皆に元気を与えるほどだ。
「お？　明久に夏目、今日は早いじゃないか」
「ふっふーん☆　まーねー♪」
「まあ、今朝の綾香はすんなり起きたしね」
調子に乗ってふんぞり返る綾香の横で、明久は苦笑いを浮かべた。
そこへ秀吉がやってくる。
「お早うじゃ、明久に綾香よ」
にこやかに笑って、“二人”に挨拶する秀吉。
その様子に明久と綾香が笑顔になる。
「うん、お早う秀吉」
「おっす☆　秀吉♪　今日も可愛いな♪」
「やれやれ、それは男へのほめ言葉ではないぞい？　綾香よ」
綾香に可愛いと言われ、苦笑いする秀吉。すると、綾香が顔をツイと近づけて、秀吉の胸を人差し指でつっつく。
「なに言ってるの。今時、男の子が可愛いのだって十分ステータスだって。秀吉は、もっとそれを武器にするべきかな？」
言いながら片目をつむった綾香に、秀吉は何も言えずに朱を散らす。
そのまま固まってしまった彼をおいて、綾香は明久へと向き直った。
「行こ♪」
そういって綾香は明久の手を取ると、自分のちゃぶ台へと向かった。
「おーい、秀吉ー」

「……完全に固まっている」
動かない秀吉に、雄二と康太がのぞき込みながら肩を揺らすが、反応がなかった。

「う〜ー。疲れたよう……」
ちゃぶ台に上半身とあごを乗せ、両腕を前へ放り出しながら、綾香が呻く。
癖はあるが美しい金糸が広がり、ブレザーに包まれながらも、男達の夢が詰まった大きな綾香のそれが、上に誰かが乗っかったバランスボールのようにひしゃげる。周囲の男子達はそれだけで後頭部を叩き始めた。
「あはは、おつかれさま」
そんな注目をされている綾香の後ろで苦笑いしながらねぎらうのは明久だ。
戦争では総合科目があったため、補給試験もまんべんなく受けなければならない。
そのため、今日一日と明日の午前中で併せて十科目以上テストを受けなければならないのだ。
「くあー、腹減ったぜ。今日はラーメンとカツ丼とカレーとチャーハンにすっか」
軽く伸びをしてからそう言って立ち上がる雄二を、綾香が半眼で眺める。
と、おもむろに口を開くと、「よく喰うねえ雄二は」
言うと雄二が首をごきごき鳴らしながら「育ち盛りなんだよ」と、笑ってみせる。
それを見ながら綾香が身を起こし、立ち上がった。
「行こうアッキー。腹減ったー」
少々元気のない調子で綾香が明久の袖を引っ張った。

「……わかったよ。姫路さん！」
綾香に答えつつ、明久が瑞希へ声をかけた。
「？　はい、なんでしょう？」
「ごめん、昨日の約束だけど、綾香に付き合わなきゃいけないから、また今度ね？」
「あ、そうなんですか？　残念です」
明久の言葉に瑞希は残念そうに眉を八の字にした。
そうして教室を後にする明久と綾香。
「どしたの？　瑞希となんか約束？」
聞きながら明久の腕を取り、下から見上げるように彼の顔をのぞき込んだ。
「うん、お弁当の味見をね」
「え〜」
明久の返答に、綾香は声を裏返しながら目をむいた。
「み、瑞希のお弁当の？！　アッキー死ぬ気？！」
「だ、大丈夫だと思うけど……」
明久も自信はないのか言葉は尻すぼみになっていく。
「去年一緒にお弁当したとき、『にくじゃが……中和が』とか言っていたし、直ってないんじゃないかな……」

そう言いつつ綾香が体を震わせる。
明久も綾香の言葉に遠い目となった。
そして思い出されるのは中学の頃。
学校が別々だった瑞希は、明久とはなかなか会う機会がなかったが、連絡を取り合っていた綾香のおかげで、たまたま予定が合った三人は、ピクニックに出かけた。幼なじみ三人で遠慮無く楽しもうと計画したものだったが、瑞希がお弁当担当だったのが運の尽きだった。
もはや食べ物ではないソレのおかげで三人とも倒れ、かなりやばいことになった。

一番頑丈な明久が、半死半生のままサバイバル知識を元に薬草などから解毒剤をそれこそ必死になって完成させ、事なきを得た。
後でわかったことだが、これがショックだったのか、瑞希はそのときのことをまるで覚えてなかった。　その記憶が二人の脳裏によみがえり、そろって震えた。
「か、考えるのはよそう」
「そうだね。今は普通にご飯を食べよっと」
二人でうなずき、学食へと向かう。

白い手で握られた箸が、少し大きめに切られたチキン南蛮を一切れ摘み、それを口元へと運ぶ。
普段なら小さく上品に感じられる、形の良い唇がこれでもか！とばかりに大きく開けられ、タルタルソースの付いたソレにかぶりついた。
「んぐむぐ……うんめーっ♪」
適宜に咀嚼し、チキンを味わう綾香。
金髪のお嬢様のような美少女然とした彼女だが、感覚は庶民的だし、普段から明久とご飯の取り合い押しつけ合いばかりしていたせいか、上品さはない。
しかし、食事は楽しくおいしくを体現するかのような食べっぷりは、かえって彼女の魅力になっていた。
そしてその隣に定食の乗ったトレーを持って明久がやってきた。
それに気づいて手を止める綾香。
「アッキーはなんにしたの？」
「日替わり定食だよ」
着席しながらトレーを置きつつ答える明久。
綾香は、ふーん。と定食の内容を眺めていたが、とある一品を見たとき、電撃が走った。
「あ、アッキー……、そ、それはまさかっ！！」
「うん、僕もちょっとびっくりした」
おののくように言う綾香に、明久は苦笑い気味に返す。
綾香の言うそれとは……。
「カ、カニクリームコロッケじゃん！！」
そう、日替わり定食のめいんでぃっしゅはメンチカツと二個乗っかったカニクリームコロッケだった。

日替わり定食は、学食のおばちゃんがわりとてきとーに決めているため、普段は存在しないメニューがある時があるのだ。
綾香の蒼い瞳は、そのキツネ色の衣に釘付けだ。
綾香ののどが溢れんばかりの唾を嚥下する音が明久の耳に入った。
「む、ぐう。いくら何でも雄二じゃないから定食二人前なんて無理だし……な、なあアッキートレードしよう。チキン南蛮一切れやるから、一個くれよ……いや、交換して下さい」
土下座せんばかりの勢いで明久に頼み込む綾香。その様子に明久はやれやれと言わんばかりの顔になる。
「まあ良いけど……はい」
少し笑いながら箸でカニクリームコロッケを摘むと、綾香へ差し出す。すると綾香は蒼い瞳に☆を散らしながら喜び口を開けた。
「あーーん♪」
「……しょうがないなあ綾香は」
ひな鳥が親鳥に餌を貰うように口を開けて待つ綾香に苦笑しつつ明久はカニクリームコロッケを彼女の口へ。
一個まるまるほおばる綾香。
ほっぺたをリスのように膨らませ、蒼い瞳を☆にしながら軽くじたんだを踏む。
「むぐ、むぐ、ふめーー☆♪」
まだ口の中に残っているにも関わらず、いかにもうまそうに興奮気味に言う綾香。それを見て明久は笑顔になる。
「んぐ、んぐ、ぷへー。ほんとにうまいぞこれ！　しかも冷凍もんじゃなくて手作りだ！」
「え？　うそっ！？」
綾香の一言に、明久もあわててもう一つのカニクリームコロッケにかぶりつく。
「……ほんとだ。しかもカニの風味がすごい！」
「だろ？　こういうところは無駄にすごいよな文月学園って」
そう言いつつ白飯を掻き込み、味噌汁をすする綾香。

その様子に微笑みながら明久は綾香のお皿に箸をのばした。
「んじゃ、約束の一切れを……」
「ん？　そうだな。ホレ、あ～ん♪」
明久が一切れ摘むより素早く皿を遠ざけつつ、半分かじったチキン南蛮を差し出してくる綾香。
「それ、半分かじってあるよね」
「あ～ん♪」
「約束は一切れのはずなんだけど？」
「あ～ん♪」
「……」
「あ～ん♪」
「……わかったよ。あー」
けして譲らぬ綾香に嘆息しつつ口を開ける明久。そこへ綾香が南蛮を摘んだ箸をつっこみ、明久は口を閉じた。

ちゅぷん。

と、明久の口から綾香が自分の箸が抜き取った。
「あ、南蛮もおいしい」
つぶやく明久に、彼女はニコニコしながら食事に戻ろうと、軽く箸の先っちょをしゃぶってから次のチキン南蛮を箸で摘んだ。
幼い頃より互いの口を付けたものを普通に食べさせあったり、おやつの半分こなど日常茶飯事な二人にとっては、ごく自然なこと。

もちろん、綾香に言わせれば、“まるまる一切れあげるより、半分になったのを渡した方が損は少ない”という判断からの行動だが、周りの判断は異なるだろう。
と、綾香の隣に人影が現れた。
「……相変わらずね？　あなた達は」
と、言われ、綾香はご飯を口一杯に頬張ったままそちらを見上げ

た。
「ふぁ。ゅっふぁ（あ。ゆっか）」
「口の中に食べ物積めた状態でしゃべらないの。相変わらず行儀が悪いんだから。吉井君も久しぶり。ここ、いいかしら？」
「久しぶり小山さん。かまわないと思うよ？」
友香に注意されて綾香が口の中のモノを必死で嚥下している間、明久と挨拶を交わした友香は明久とは綾香を挟んで反対の席に座る。
テーブルに置いたトレーには、やはりサンドイッチとミルク。
「ング、ング……ぷはあ。ゆっか昨日振り☆」
「仲直りできたみたいね？」
「うん♪　ありがとねゆっか♪」
ほっぺにご飯粒ひとつ付けたまま笑顔でお礼を言う綾香に、友香も微笑んだ。
それから周囲を見回すと、一言漏らす。
「でも、仲が良いのは分かるけど程々にね？」
見ればブラックコーヒーの注文や砂糖以外の調味料を追加している生徒が続出し、あてられたカップルがイチャつき始めていた。しかし、当の明久や綾香は気づいておらず、二人そろって首を傾げており、それを見た友香が嘆息した。

だい☆にじゅうさんもんであーる。

学食での昼食を終えた明久と綾香は、瑞希の弁当の味見をしているであろう屋上へと足を向けた。
なんというか、“知るものの責任”みたいなものを感じてしまったからだ。
処刑台の十三階段を昇る面持ちで屋上への階段を上がり、死地へ赴く覚悟で屋上に続くドアを開けた。

そこに広がる光景は……。

青くなって震える美波。

白目をむいて倒れる康太。

明らかに死相が浮いている雄二。

エビフライをくわえたまま泡を吹いて転がる秀吉。

そして……何が起きているのか、いまいち理解していないっぽい笑顔で座る瑞希の姿があった。
惨憺たる有様である。

「こ、これは……ゆ、雄二？」
表情をひきつらせ、絶句しながらもなんとか雄二へ声をかける明久。
「う？　あ、明久か？　よく見えん……花畑と川が……」
「駄目だ雄二！！　その川を渡っちゃあ！！」
無事なように見えて、実は駄目らしかった。

「怖かったわ……怖かったのよぉ綾香ぁ～」
未だに震えの止まらない美波の頭を、よしよし。とばかりに撫でる綾香。
明久と軽く相談した結果、彼が注意するということで、瑞希を向こうへ連れていった。
その間、明久に一発貰って正気を取り戻した雄二は、康太の蘇生作業をしており、秀吉はというと……。
「う……なんじゃ？　ワシはいったい……」
後頭部に柔らかい羽毛に包まれているかのような感触を感じながら、秀吉が目を覚ますと、蒼い瞳が上からのぞき込んできた。
「あ、秀吉、起きたー？」
「……は？」
綾香の声に、秀吉の思考が一瞬止まり、視界に存在する彼女の女の象徴の迫力に息を呑む。

そして気づいた。

今、自分が。

大好きな少女《綾香》に。

膝枕されていることに。

「……」

そこへ思考が至った瞬間、秀吉は全身が石のように固まり、真っ赤に染まった。

そして。

「のぅっはぁ〜〜〜っ?!（ブシャアァァ〜〜!!）」

康太もかくやと言うほどの鼻血を噴出し、昏倒する秀吉。

「きゃっ?!　ちょ、ちょっと?!　秀吉っ?!　だ、大丈夫なの?!」

突然のことに悲鳴を上げてしまう綾香。

ついで秀吉を見ると、滝のような鼻血を垂れ流しつつ幸せそうに永眠しようとしているところだった。

「（我が生涯に、一片の悔い無しじゃ……）」

そのつぶやきは誰にも聞こえない。

それを見て綾香と美波があわてて秀吉の蘇生作業に入った。

その様子を雄二と、意識を取り戻した康太がうろんげに眺める。

「……よく見とけムッツリーニ。あれが普段のお前だ」

「……断じて認めない（カタカタカタ）」

いまだ体の震えが止まらないながらも必死で否定する康太。

そんな騒ぎになっているところへ、ずーんと落ち込みオーラをまとい、肩を落とした瑞希と、それを慰める明久がやってくる。

「……うぅ。私もうお料理やめます……」

「だから化学薬品混入さえやめれば大丈夫だからって……何事!?」

「き、木下君っ?!」

戻ってきた明久と瑞希は、血溜まりを作って昏倒している秀吉を見て声を上げる。
秀吉の霊魂が手を振り天空へ還ろうとしているのを見て瑞希は決意した。
「……私、もう化学薬品使いません……」
これが後に、“癒しの料理人（ヒーリングシェフ）”と呼ばれるようになる世界的料理人が最初に誓った言葉だと言われた。

そんなトラブルは、まあ余談な訳だが、一同復活し、車座になって座る。
「そう言えば坂本。次の目標はＢクラスなの？」
美波がそう訊ねると、雄二は大きくうなずいた。
「ああそうだ」
それに対し、その場の全員が顔を見合わせる。
「雄二、どうしてＢクラスなのさ？　目標はＡクラスなんだろ？」
「……正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃＡクラスには勝てない」
明久の問いに、神妙そうな顔で言い切る雄二。
その雰囲気に一同息を呑む。
無理もないだろう。Ａクラス上位十名は平均三百点オーバーの化け物ぞろいだ。学年二位の瑞希ならまだ何とかなるかもしれないが、綾香ですら得意の物理と数学以外では負ける公算が大きい。
そしてＡクラス代表は第二学年最高成績者。
対抗できる手段は片手で数えられるし、下手をすれば代表一人でＦクラスの生徒をほとんどせん滅できるだろう。
最後の一手が打てない以上、勝つのは不可能に等しいのだ。
「んじゃ、狙うのはＢクラスに変更なの？　雄二」
少しまじめな様子で綾香が聞いてくるが、それに対しては首を振

った。
「いや、Ａクラスをやる。これに変更はない」
力強く言う雄二にみなが困惑する。
「クラス単位じゃ無理だからな。一騎打ちに持ち込む。その交渉カードにＢクラスが必要なんだ」
「ははぁん。Ｂクラスに攻め込ますぞって脅すつもりだろ。Ａクラスは戦争に勝っても旨みがないから嫌がるだろうしな」
雄二の言にピンときたのか綾香がいつもの小悪魔スマイルを浮かべながら言うと、雄二も悪童らしく笑う。
「ああそうだ。Ｂの連中には設備をＦに落とされたくなけりゃ言うことを聞けって交渉する」
雄二の言葉を聞いて綾香はさらに笑みを深くした。この二人、すっかり悪人風である。
しかし、そこで明久が口を挟んだ。
「でも、一騎打ちで勝てるの？　雄二」
「そこに関しては任せておけ。勝算はある」
雄二は自信たっぷりに答えるが、明久は不安が拭えなかった。
「なら良いけど……」
「とにかく、まずはＢクラスだ。これをクリアーしなけりゃ次の段階には進めないからな」
雄二の言葉に、一同うなずいた。

皆の反応にうなずいた雄二は明久の方を向いた。
「と、まあそういう訳だから明久」
「……なんだよ」
イイ笑顔の雄二に不信の目を向ける明久。しかし雄二はかまわず続ける。
「とっととBクラスに宣戦布告してこい」
「断る。雄二が行けば良いだろ」
即答だった。
そんな明久の態度に雄二がため息をつく。
「……明久。またトラブルが起きるとでも思ってるのか？　Bクラスは上位クラスなんだからそんなことするわけ……」
「Bクラスの代表が、あの根本恭二でも？」
明久を言いくるめようとする雄二の言葉を遮るように、蒼い瞳の少女の声が響いた。
その内容に、明久と瑞希以外が驚く。
「……根本がBクラス代表だと？」
「そ。さっきゆっか……あたしの友達の小山友香に聞いたから確かだよ。ね？　アッキー」
少しつまらなそうに伸びをしながら明久に振る綾香。
その言葉に明久は力強くうなずく。
それを見た雄二は、顎に手を当てて考え始める。
「……その小山ってのは信用できるのか？」
雄二のその問いに、今度は綾香の顔色が変わった。
「ちょっと雄二。あたしの親友を疑う気？　確かにゆっかは恭二と付き合ってたけど、昨日別れたって言ってたし」
「根本と？　物好きな女だな」

「……雄二。あんたね」
雄二の小馬鹿にしたような言いように、綾香の表情が険しくなる。
先ほどまで意気投合していたとは思えないほど二人の空気が悪くなっていくのが手に取るように分かった。
そこで明久が割ってはいる。
「ちょっと落ち着きなよ二人とも」
それによって二人とも無言で矛を収めた。
「雄二、宣戦布告には僕が行ってくる。根本君がいるかどうかも確認してくる。それで良いでしょ？」
明久がそう提案すると、雄二がうなずく。
「ああ、そうしてくれると助かるな」
「……じゃああたしも行くよ」
明久の提案を呑んだ雄二の言葉に綾香が続いた。
これに焦ったのは雄二だ。
「いや、お前は……」
「問題ないでしょ？　“安全”なんだし。行こ？　アッキー」
だめだと言おうとした雄二の言葉にかぶせるように綾香が言い放つ。
そして、さっと立ち上がって屋上入り口へと歩き始めた。
それを見て明久が慌てる。
「ちょっと待ってよ綾香！　ごめん雄二。綾香と一緒に行ってくるよ。けど、雄二も悪いんだよ？」
そう言いながら綾香を追いかける明久。
後には微妙な空気のままの五人が取り残された。

「綾香、綾香ってば！」
「なに？　アッキー」
明久に応じつつも足を止めない綾香。

「雄二にだって立場があるんだから、許してあげなよ」
「……確かに、代表なんだし情報の真贋に過敏になるのはわかるけどさ……」
それでも綾香は友香を悪く言われたのが悔しかった。
一年Aクラスで一緒のクラスだった彼女は、最初こそツンケンして怒りっぽい感じだったが、綾香とつきあい始めてからカドが取れ、落ち着いた性格になっていった。
その頃には綾香とは親友と呼べるほど仲良くなっていた。
明久もそのことは知っていたし、綾香の気持ちも痛いほど分かった。その反面、雄二の言うことも分かる。
「雄二はさ、あれでもFクラスの責任者なんだよ。自覚があるかは微妙だけど、そういう責任感から出た言葉だって思えないかな？」
綾香になんとか分かって貰おうと言葉を続ける明久。
それを聞いて綾香は小さく息を吐く。
そして明久の方へ振り向いた。
「……アッキー優しすぎ。まあ、そこがアッキーらしいけどね。ほら、行こ？」
そのまま明久の横にやってきて、彼の手を取って歩き始めた。

ところ変わってBクラスの教室。
Aクラスほどでは無いものの、一般的な高校と比べれば、十二分にお金のかかっている設備の教室だ。
スライドドアが音もなく開き、ボリュームのある金髪と蒼い瞳の少女と、優しい雰囲気だが、どこかネジが一本足りなさそうな少年が入室してきた。
「しっつれーしまー☆」
「Bクラスの代表の方はおられますかー？」
Bの教室に足を踏み入れた綾香が元気良く挨拶し、明久が教室を

見回すようにしながらそれに続いた。
「あれ？　綾香じゃない」
「ほんとだ。綾香久しぶり」
不意に声をかけられた綾香がそちらを見ると、一年の時同じクラスだった岩下律子と菊入真由美が小走りによって来た。
「どうしたの綾香。遊びに来たの？」
「ていうか、クラスどこよ？　遊びに行くわよ」
にこやかにそう話しかけてくる律子と真由美に、綾香は少し困ったような顔になった。
「いやあ、うちの教室はお勧めしないかな？　Ｆクラスだし」
『Ｆ？！』
綾香の答えに二人の驚愕が重なる。
「はあ、どうりであんな奴が代表の訳だ」
「あたし達、てっきり綾香がＢクラス代表だと思ってたしね」
嘆息しつつげんなりしながら漏らす二人。
その様子に綾香と明久は顔を見合わせた。
そして明久が一歩踏み出し二人に声をかけた。
「えっと、岩下さんに菊入さん、久しぶり。それでＢクラスの代表は？」
「あ、吉井君」
「相変わらず綾香と仲が良いのね？　で、代表だっけ」
「今呼ぶからちょっと待ってて？　代表ー！」
律子が教室の奥へと呼びかけると、数人の取り巻きを引き連れた一人の男がやってきた。
ツヤのある髪をマッシュルームカットにし、アゴ先に少し髭を伸ばした嫌らしい目つきの男。
根本恭二。

卑怯卑劣で知れたこの男が、綾香と明久の前に現れた。

「よお、夏目。俺の告白受けてくれる気になったのか？」
開口一番そんなことを言ってくる根本に、綾香は顔をしかめた。
友香の話によれば、昨日のうちに話し合って別れたらしいが、そのこと自体どうども思っていないようだ。
「……その話は何度も断ってるよね。あたし、しつこい人って嫌いなんだけど？」
根本の顔をにらみながら言う綾香。だが、彼は動じた風でもない。以前断ってにらんだときは明らかに怯んでいたが、今は余裕しゃくしゃくだ。
その差に綾香は違和感を覚えた。
と、その時明久が横から一歩前に踏み出してきた。
「えっと、根本君がＢクラスの代表なんだよね？」
「あん？　なんだゴミクズか」
話しかけた明久をゴミクズ扱いする根本。それと同時に取り巻きどもが笑い出す。
その様子に律子と真由美はあからさまに嫌悪感を表し、綾香は顔色を変えた。
「恭二！　あんたっ！！」
激高し、詰め寄ろうとする綾香を明久が制する。
「改めて、二年Ｆクラスの吉井明久です」
「ハッ。ゴミの分際で名乗りかよ」
「僕たちＦクラスは、明日の午後の授業開始時刻を以て、Ｂクラスに宣戦布告します！」
『！』
明久のその言葉に、根本のみならず、取り巻きも、律子も、真由美も、Ｂクラスの全員が絶句した。

一瞬の沈黙の後、根本が肩を震わせ始める。
「……ク、ククク……ハ、ハハハハ……アーッハッハッハッハ！　Fクラスが？　俺たちBクラスに？　何の冗談だ？」
爆笑しながら明久に訊ねる根本。
そのままズイっと顔を近づけ、笑みを消す。
「……笑えねえな」
明久の目をのぞき込むように言う根本。だが、明久の表情は小揺るぎもしない。
根本はしばらく明久をにらみつけていたが明久は柔和に笑みを浮かべてみせる。
「……そういう訳ですから。用件もすみましたし、僕たちは帰らせていただきますね？」
そう言ってきびすを返し、綾香へ、戻ろうか？　と声をかけて歩き出す明久。
だが、明久のその態度に、根本が頬肉を震わせる。
「余裕ぶってんじゃねえ！　やれ！　お前ら！！」
彼の叫びに取り巻きがふたり飛び出していく。
突き出された拳が明久の後頭部に迫り、激突……しなかった。
腰を落としながら体を反転させ、相手の足下へと大きく一歩踏み出す。
上体が伸びた相手の下に入り込んだ明久は、そのまま踏み込んだ足を踏ん張り、上体を上へと跳ね上げた。
ほとんど真上へと肩胛骨を叩きつけ、相手の体が宙を舞う。
「ガッハッ？！」
肺の中の空気をすべて吐き出し、重力と均衡した体が停止して落下する。
その下敷きにならぬよう、明久は素早く体をスライドさせた。
そして、その男は床へと落ち、悶絶する。
一方、もう一人は繰り出した拳を綾香にとられ、ひねりあげられながら額を床に着けていた。

瞬時に二人を制圧され、狼狽する根本。
しかし、すぐさま我を取り戻すと、残りの取り巻きにも攻撃を仕掛けさせる。
その数四人。明久と綾香はすぐさま思考を切り替えた。
綾香が視線をそらし、ドアの方へ振り向きながら「あ！　鉄人先生！」と叫ぶ。
その名前が出ただけで四人の足が一瞬止まった。
その隙に明久と綾香は即座に飛び退いて走り出す。
根本らは唖然とそれを見送ってしまった。
「！　鉄人なんざいないじゃないか！　ボケっとすんな！」
いち早く正気に戻った根本が叫ぶが、時すでに遅し。明久と綾香は脱兎の勢いで走り去った後だった。
「くそっ！　吉井の奴め……。まあ良い。切り札はこちらの手にあるんだ。これで夏目は……くっくっくっ」

「そうか、根本はいたか……」
Bクラスへの宣戦布告を終えて戻ってきた明久達の話を聞き、雄二は顎に手を当てながら考える。
その態度に綾香はムッとなる。
「それだけ？　ほかにも言うことあるでしょ？」
「……さてな。なんかあったか？」
綾香に言われるもとぼける雄二。それを見て明久は顔をしかめた。
「……雄二、あんたね」
「後にしてくれ。作戦を補正しなきゃならん」
詰め寄ろうとする綾香を避けて行こうとする雄二。綾香がその手を素早く取る。
そして一瞬の間を置いて自分の胸に雄二の手をくっつけた。
その行動に雄二は大いに慌てた。
「な、なにやってんだお前はっ！」
「きゃー雄二があたしの胸触ったー」
「は、はあっ？！　な、なに言ってやがるっ！？」
「いやー揉みしだいたー」
「てめえ、いい加減に……ハッ？！」
棒読みながらも騒ぐ綾香に抗議する雄二だったが、周囲に膨れ上がった殺気に気づく。
「……雄二。お主良い度胸じゃのう」
『綾香ちゃんの胸を揉みしだくなど、羨ま……万死に値する！』
『このゴリラが。調子にのってんじゃねーぞ？』
Fクラス男子の押さえきれない嫉妬と殺意を一身に受け、雄二は後ずさる。
「ま、まてお前ら。これは夏目が勝手にやったことで……」

「問答無用じゃ！」
『坂本を殺せえーっ！！』
「チキショー！！　俺がなにをしたーっ！！」
綾香の手を振り払って逃げ出す雄二。それを追跡する覆面の集団。
デスチェイスが始まった。
「ざまみろアホ雄二」
綾香は走っていく雄二の背に向けて舌を出しながら胸元を手で払った。

結局、雄二と彼を追跡していた秀吉以下Ｆクラスの男子達は鉄人に捕まり、補習室で補給試験を受けつつ、休み時間と試験終了後に補習を受ける羽目になったらしい。
教室で午後のテストを受けたのは明久、綾香、瑞希、美波のたった四人だった。
終わりのＨＲもその四人だけで、その後の清掃が少し大変だったが他には問題ないようだった。

校門を出たところで、用事があるというほかの二人と別れ、家路につく明久と綾香。
「ったく。雄二があんなアホだと思わなかったよ」
「雄二は誰かに頭を下げるのが嫌いだからね」
ブツクサ言う綾香に明久が苦笑い気味に答える。
「まーいーや。仕返しもしたし、溜飲を下げてやろう」
「あはは……でも、ああいうのはやめた方が良いよ？　その、さわらせるとか」
えらそうにふんぞり返る綾香を明久がたしなめる。

すると綾香は不思議そうにしながら明久の方を見て笑う。
「なーに？　アッキー。ヤキモチ？　ブラの上に手をつけただけだよ？　減るわけでも無し……」
「またそんなこと言って……」
楽しそうな綾香に明久は嘆息した。
それをのぞき込む綾香。そして楽しげに笑い、学生鞄を後ろ手に持ちながら一歩、二歩と後ろへ跳んだ。
「……なーによ。もしかしてイヤだったとか？　けどアッキーは直揉みしたことだってあ……」
ニヤニヤとあの小悪魔スマイルを浮かべながら明久を見る綾香。
それに対して明久は少し視線を外した。
「別に……そんなこと……」
言いよどむ彼に綾香は少し不思議そうな顔になったが、やがて小さく笑うながらくるりと向こうを向いて歩き出す。
黄昏時の陽に照らされながら二人そろって無言でしばし歩く。
不意に綾香の足が止まった。
「あ！　そーだっ！」
「な、なに」
突然大きな声を出した綾香に、明久も驚いて足を止める。
軽く一歩跳んで、着地と同時にターン。
長い金髪が、茜色の光を受けて輝きながら、スカートとともに広がる。
「プリン♪」
「へっ？」
綾香の言葉に、明久は一瞬反応できない。
「だから、プリンよ。プ・リ・ン。昨日買わなかったじゃない」
「あ。そう言えばそうだね」
「よし！　今から買いに行こう☆」
そう言って明久の元へ小走りに走りよると、その手を取って引っ張り出す。

明久が、わかったよ。と、苦笑いしながら応じて歩きだすと、綾香は彼の腕に自分の腕を絡めた。

二人で歩く黄昏時の道。彼らの足下から伸びる影は、ひとつだ。

軽い買い物の後、明久と綾香はとある一戸建ての前に着ていた。
表札には『夏目』とある。
「たっだいま～☆」
玄関の鍵を開け、スキップするように三和土へ靴を脱ぎ散らかしながら入っていく綾香。
「ただいま」
それに続いて明久が玄関をくぐり、綾香の靴を揃えてから自分の靴を脱いであがる。
家の中から反応がないことを感じつつリビングへ向かった明久は、すでにソファでくつろぐ体勢の綾香へ声をかける。
「アンナはやっぱり虎吉おじさんについていったの？」
「うん。パパもママも今頃ドイツかな～？　学会とかで四月の終わりくらいまで向こうだってさ。筋肉バカのクセになにを発表するんだか」
明久に答えつつテレビの電源を入れる綾香。彼女の答えに明久は苦笑いしながらキッチンへ。
「……まあ虎吉おじさんの趣味や経歴考えると、数学者って感じはしないよね」
「大学卒業と同時に、フランスへ。なにを間違えたのか外人部隊に所属して戦場へ。除隊してからは数学者としての名前が多少売れて今に至ると。で、趣味は体を鍛えること。小学校の作文で本気で悩んだよ」
ソファから立ち上がり、自分もキッチンへ。そのまま“二人の”マグカップを出してインスタントコーヒーを入れる綾香。
「あれ？　豆もう無いの？」
「パパのオリジナルブレンドだからね。こないだ使い切っちゃった」

明久の問いに肩をすくめる。それに苦笑いを返してリビングにプリンとスプーンを運ぶ明久。続いて二人分のコーヒーを綾香が運んできて二人並んで座るとお茶会が始まった。

「ん～☆　プリンうまうま♪」

「そうだね」

銀色のスプーンでプリンを掬って口にする綾香。

顔いっぱいにおいしいという気持ちをみなぎらせながら味わっていく。

綾香のプリンはミルクプリン。そして明久は上にモンブランの乗ったプリンだ。

お互い半分ほどに減ったところで綾香は自分のプリンを掬って明久に差し出した。

「ほいアッキー。こっちも食べてみなよ～♪」

「ん？　あーむ。へえ、ミルクの柔らかい味わいが良いね」

差し出されたスプーンをくわえ、明久はミルクプリンを味わう。

そんな明久を見ながら綾香は抜き取ったスプーンをしゃぶって、明久のプリンへ蒼い視線を向けた。

「じゃあ次はそっちのちょーだい♪　あーん」

「しかたないなあ」

明久は苦笑いしながら、モンブランとクリーム、そしてプリンにカラメルを絡めながらスプーンに掬って綾香に差し出した。

それをパクつきおいしそうに味わう。

そんな風にお茶会の時間は過ぎていった。

本日の夕食は綾香のお手製オムライス。

パエリアを知る以前の明久の大好物だったこともあり、当時まだ小学生だった綾香はかなり練習した一品だ。少々焦げてるのがご愛嬌だが。

それに舌鼓を打ちつつ、二人で夕餉を楽しんだ。
食事も終わり、二人で片づけ、一緒に洗い場に立つ。
「今日、泊まっていくでしょ？」
「う～ん、今から帰るのも面倒だしね。そうしようかな？」
並んで洗い物をしながらそんなことを話す。
「じゃあアッキー先にお風呂しちゃいなよ。それとも……何年かぶりに一緒に入る？」
小悪魔スマイルを浮かべ、隣の明久へ腰をぶつけてくる綾香。
「……さすがにお互い高校生でそれは無いっしょ」
「だよねー♪　あー。でも久しぶりにアッキーの象さん見たかったかも？　あれが羨ましくってさぁ、取れないかどうか色々してたらぺろーんって剥……」
「ハイ！　下ネタ禁止！」
綾香の暴走トークを遮る明久。しかし、綾香はその反応を面白がる。
「今更恥ずかしがること無いじゃん♪　わりと全部見せ合ってるし」
「全部小学校低学年の時の話でしょっ！」
やや焦り気味に言う明久。
何か、そう言っておかないと非常にマズい気がしたからだ。
「ちえー。つまんねーの」
明久のノリが悪くて唇をとんがらかせる綾香。
そのまま洗い物が終わって、明久を先にお風呂へ追いやり、自室を少し片す。
それが終わった頃には明久が風呂から上がり、綾香とタッチ。
その後は髪の手入れタイムだ。
「……明日はＢクラスと対決だね」
「午前中には補給試験があるけどね」
髪を丁寧に手櫛で梳いていく明久と明日のことを話す綾香。
「まあ、テストはこの後の予習復習で対処すれば良いけど……」
「……根本君だね」

「……うん」
根本恭二は学園内でも良くない噂の多い男子だ。
カンニングの常習犯、競争相手に下剤を仕込む、あげくは喧嘩に刃物だ。
「……まあ、雄二がそうそう後れをとるとは思えないけどね」
小さく息を吐きながらつぶやく綾香。
「そうだね。むしろ、僕らひとりひとりに何か仕掛けてこないかを気をつけないとね。ハイ終わり」
「そうね。ありがと♪　アッキー☆」
髪の手入れが終わり、明久に笑顔でお礼を言う綾香。その後ふたりで軽く勉強してから、綾香にせがまれ、彼女のベッドで一緒に寝た。

翌朝、やはり明久は床の上で目を覚ました。

一方そのころ。
「……これで良かったのでしょうか？」
一枚の写真を前に、燈色の髪をドリルツインテにした少女がため息をついた。
昨日の騒動で、怨敵とも言うべき吉井明久に復讐せんと、学年一のクズの口車に乗ってしまった。
そして、決定的な瞬間が撮れてしまった。
約束した以上写真の一枚は手渡してしまったが、さらに要求された元データはもう無いと誤魔化したものの罪悪感は消えない。
彼女と仲が悪いわけではないのだ。ただ、吉井明久を処刑しようとすると、邪魔をしてくる。不満はその一点のみ。
だからこそ。
この写真を撮り、あのクズ豚に渡してしまったことを、少女、清

水美春は後悔していた。

「さて皆、補給テストご苦労だった」
『……』
教壇に立った雄二が教卓に手を置いて皆に向かって言うが、クラスの反応はいまいちだった。
「……午後はＢクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」
『……』
雄二の言葉にも反応は微妙。
これには彼も苦虫を噛み潰したような顔になった。
少し思案し、ちゃぶ台に寝そべるようにダラッとした綾香へ顔を向ける。
「……夏目」
「んー？　あによー雄二」
返事はすれども顔は向けない。
それに構うことなく言葉を続ける雄二。
「昨日は俺が悪かった。許してくれ」
「……それは、何に対する謝罪？」
頭を下げて謝る雄二に綾香は蒼い瞳をジト目にしながら雄二を見、そう訊ねる。
「……お前の友人をバカにして悪かった」
頭を下げながらしかめっ面になりつつも今一度謝罪する。
「……はあ。今度同じ事したら許さないからね」
「……わかった」
降参だと言わんばかりの表情で顔を上げる。
すると、綾香が勢い良く立ち上がった。
「さあみんな☆　これからＢクラスとの試召戦争だよ♪　殺る気はＯＫ？」

『イェアァーーッ！！』
先ほどの静けさとはうって代わって大盛り上がりするそこで綾香が雄二の方を向いて目配せする。
すると男子どもが一斉に雄二の方を向いた。
「今回の戦闘は、敵を相手の教室の中へ押し込むことが最重要だ。従って開戦直後の渡り廊下戦は、絶対に負けるわけにはいかない」
「だ、そうよ」
『おおーっ！』
「そこで前線部隊は姫路瑞希に指揮を執ってもらい、その補佐役として、夏目綾香、吉井明久を任命する。野郎ども！　きっちり死んできやがれ！」
雄二の言葉でクラスの綺麗どころである瑞希や綾香と一緒に戦えると知った前線部隊メンバーの意気が上がった。
「が、頑張ります」
「みんな、よろしく～☆」
「……まあ、僕はおまけだよね」
握り拳を作った両を胸につけるようにしながら意気込む瑞希に、右の人差し指と中指をそろえた敬礼しながらウインクする綾香。
ついでに明久も一歩前に出る。
その様子に、前線部隊の士気は最高潮に達していた。
今回の戦いに置いて重要なステップでもある渡り廊下戦。
ここを確実に穫るために、全戦力の八割に、二枚看板《瑞希と綾香》を投入するようだ。
高いモチベーションに主力の二枚看板。
渡り廊下戦は穫ったも同然だろう。

キーンコーンカーンコーン

昼休みの終了を告げる鐘が鳴り響き、それが開戦の合図となる。
「よし、行ってこい！　目指すはシステムディスクだ！」
『サー、イエッサー！』
最後には威厳を取り戻したのか、雄二の指示に男子は従っている。
その勢いを笠に着て、Ｆクラス前衛部隊は廊下を駆けた。

そのなかを綾香と明久は走り抜けた。
最強の存在である瑞希は、運動が苦手なため、先に綾香達が前線を構築しようと急いで前進したのだ。
おかげでふたりは一番乗りだ。
そこへＢクラスの生徒が十人ほど並んで歩いてきていた。
その後ろには、総合科目勝負を承認できる、学年主任の高橋教諭の姿。
「これは、最初っからクライマックスかな？　綾香」
「ふふん☆　上等よん♪　一気に行くわよアッキーっ！」
「了解だよ綾香！　長谷川先生！　吉井明久と！」
「夏目綾香が！」
「「Ｂクラスに数学勝負を申し込みます！！」」
「承認します！」
ふたりに応え、長谷川教諭がフィールドを展開する。
通常のものより広いそれは、Ｂクラスの生徒を五人ばかり巻き込みながら展開された。
「「試獣召喚（サモン）！！」」
明久と綾香が、異口同音に言霊を紡ぐ。すると、大型の魔法陣が展開し、ふたりの召喚獣が召喚された。
それを見てＢクラスのふたり、岩下律子と菊入真由美がひきつったような声を出す。
「あ、綾香と数学勝負なんて……」
「か、勝てっこないじゃない……」
綾香の友人で、その成績を知るふたりが絶望に打ちひしがれるの

を不思議そうに見ながら、他の三人も召喚獣を召喚した。
「なにやってんだ?岩下に菊入。最下層のFクラスのふたりなんて壁にすらならないだろう？　さっさ倒して奴らの前衛に備えるぞ！」
一人がそう声を上げるのに合わせ、他のふたりはうなずいた。
一方、律子と真由美は、召喚フィール内で勝負を挑まれたら召喚獣を出さないと敵前逃亡したとして戦死扱いになってしまうため、あわてて召喚獣を呼び出す。
そして、点数が表示された。

『Bクラス　数学　野中長男１７１　金田一祐子１５９　里井真由子１５６　岩下律子２０９　菊入真由美１７１　ＶＳ　Fクラス　吉井明久１０２　夏目綾香５２１』

「「「５００点オーバー?!」」」
「「ですよねー」」

綾香の点数に、三人が驚愕し、律子と真由美が肩を落とす。
その隙をついて綾香は召喚獣に柳葉刀を投げさせた。ついでステップを踏んで踊り出す。
それに合わせて召喚獣もステップを踏み出し始め同時に腕輪が輝く。
すると、綾香の召喚獣の姿がブレ始めた。　長い紐の先の柳葉刀もその輪郭をブレさせ七本ずつに分かれた。
その頃には綾香の召喚獣自体が七体に分身しており、ステップを踏む。
広いフィールドの中を、綾香の舞に合わせて十四の飛刀が舞う。
それは二つの軌道をなぞる動きだが、分身の出現タイミングのズレ

によって軌道をなぞるタイミングが違う。　一刀目二刀目をかわしても三刀目四刀目が迫り、それをしのいでも五刀目六刀目にくわえ、一刀目が襲いかかってくる。

絶え間無く襲いかかってくる刃を、操作に慣れない者が捌ききれるわけもなく、為す術もなく切り刻まれていく。

フィールド内は、死の舞踊（ダンスマカヴル）の嵐のようだ。

そんな中ですら、明久の召喚獣は無人の野を行くが如く駆ける。

何とか凌いだ相手に止めを刺し、綾香に近づこうとする者を排除する。

フィールド内は、まさにふたりきりの独演会。

美しいまでの殺戮の嵐によって、Ｂクラスの五人は戦死してしまい、残る五人もひるんだ。

そこへ続々と到着するＦクラス前衛部隊。遅れて瑞希も到着する。

戦いは、Ｆクラスが有利な形で始まった。

Bクラス先発隊の出鼻をくじいた明久と綾香だったが、Bクラス代表の根本の事もあり、戦況が有利なうちに教室の様子見に行く人員を選抜した。

明久、秀吉をはじめとした数人が前線から離れていく。

一方で前線を任された綾香と瑞希。作戦の要ともいうべき瑞希を消耗させすぎないよう雄二に言い含められていた綾香は、必然的に矢面に立っていた。

だがそこで困ったことが起きていた。

『綾香ちゃんはこの君島が守〜る！』

『いやいやいや、この肉壁近藤こそが綾香ちゃんを守るにふさわしい！』

『バカを言うなこのオレ！　朝倉こそが綾香ちゃんの騎士にふさわしい！』

綾香が戦闘を開始すると、Fクラスの面々が乱入してくるのだ。

綾香はこれに辟易した。

綾香の召喚獣の武器は、効果範囲が広い一対多で真価を発揮する武器だ。

反面、乱戦では使い難い。

ウロウロしている味方を避けて投げられる程操作に熟達はしていないし、中途半端な舞では威力が出せないばかりか、武器を破壊されてしまう可能性もある。

隣に立つのが明久なら良い。

明久なら、“当たるわけがない”と確信できるから。

しかし、他の人間の操る召喚獣では、当たってしまうかもしれない。

その思いが、綾香の動きを萎縮させていた。

だが、Ｆクラス男子たちにはそんなことを感じ取れるはずもなく、綾香に良いところを見せようと突撃し、返り討ちに合う者が続出。
かえって綾香がフォローしなければならない局面が増えてしまい、召喚獣はみるみる消耗していった。
「ああ、もう！」
いらつきを隠せず、召喚獣に二本の柳葉刀を振らせる。
消耗したとはいえ、数学ならばいまだ２４３点の点数を誇る綾香の召喚獣に対し、１５０点程度のＢクラス召喚獣がかなうわけもない。
流麗に振られた二刀は、片方で相手の剣を弾き、もう片方が胴をなぎ払う。
その一撃だけで光に還る敵召喚獣。
しかし、その隙を突いて二体が追加される。
「綾香ちゃん！」
「瑞希ダメ！」
思わず足を踏み出した瑞希を鋭く制する綾香。
「瑞希まで消耗したら、後の作戦に響きかねないから！　ここは我慢して！」
ここまで瑞希は指令官役に徹していたため、消耗はない。
ある種、その場にいるだけで相手に対してプレッシャーを与え、味方には瑞希が控えているという安心感を与えられる優秀な戦力でもあるのだ。
もし投入するにしても効果的、かつ決定的な場面で投入しなければ、無駄な損耗を招いてしまう。
ここを任されている以上、綾香はそれだけはしたくなかった。
迫るメイスを蹴り逸らし、グラディウスを左の柳葉刀で弾きながら右手の刃で胸板を貫く。
体勢を崩したところへ再度メイスが迫り、綾香の召喚獣の左肩へ叩き込まれる。
そのままはね飛ばされつつ、右の柳葉刀を投擲。見事相手召喚獣

の顔面に突き刺さり、光へ帰す。
点数は１８２点まで下がってしまったが、綾香の意志は衰えない。
そんな彼女をＢクラス陣営は突破できずにいた。
長谷川教諭の範囲の広い召喚フィールドで渡り廊下から中央階段までをカバーしているため、迂回が難しいのだ。
すでに綾香一人のために、Ｂクラスの先陣、中堅、併せて十人以上が戦死させられ、それに倍する人数が数学の点数を削り取られていた。
逆に、Ｆクラスの戦死者は片手で数えられる程度だ。
これも綾香の奮闘によるものである。
こうして前線に出ているＢクラス生徒の数も減り、綾香は周りに指示して一気に押し込む準備を始めた。瑞希の火力で残りの戦力に大打撃を与え、潰走したところを追撃し、Ｂクラス戦力をさらに暫減するつもりなのだ。
しかし、そこでトラブルが起きてしまう。
『お前らそこで止まれ！』
『さもなきゃこいつに止めを刺すぞ！』
そんな声が響きわたり、Ｆクラスの面々が動きを止めた。
見れば英語Ｗのフィールドに、Ｂクラスの男子が二人と……。
「美波ちゃんっ？！」
瑞希が声を上げ綾香が、あちゃー。とばかりに顔を右手で覆った。
そこにはＢクラス男子のそばにへたり込んだ美波と戦死寸前まで削られ、武器を失い、刃を突きつけられた彼女の召喚獣の姿があった。

膠着状態に陥り、ほかのBクラス生徒は撤退を開始し始めた。
それを見た綾香が指示を出そうと口を開いたとき、従弟の声が聞こえてきた。
「綾香！　なにがあったの？」
「アッキー！　そっちは大丈夫だったの？」
足早に綾香へ近づく明久へ、彼女は驚きとともに問いかけた。
「なかなかやってくれるよ根本君は。教室設備を破壊されたよ」
明久の言葉に綾香が顔をしかめる。
「相手の補給を断つ作戦ね？　常套手段ではあるし、効果的ね」
「うん。けど、やり方が半端だったからね。リカバリーは容易だよ。それより……」
言葉を切って前を見る。
視線の先にいるのは優位に立って得意げなBクラスの二人と、あきらめたかのように消沈する美波。
そして撤収を完了しつつあるBクラスの残存戦力。
「参ったね。追撃はもう無理そうだ」
「うん。出来れば残りも掃討しちゃいたかったんだけどね」
ため息をつく明久に、綾香がうなずく。
「十六時には一時休戦になって、試召戦争に関するすべての行為が禁止になるから、その前になんとかしないと、回復試験も受けられなくなっちゃうんだよね」
「え？　そうなのアッキー」
驚く綾香に明久はうなずいてみせる。
それを見た綾香が思案顔になった。
「う～ん、追撃戦後に数学の回復試験受けるつもりだったのに。それじゃあ余計に時間掛けらんないわね。仕方ない」

「……島田さん、怒りそうだなぁ……」
向こうで美波を人質に取ったまま、がなり立てているBクラス男子を見やり、明久は嘆息した。
それを横目で見ながら綾香が苦笑いする。
「ま、一発くらい殴られておきなさい」
「……そうしとくよ……」
彼女にに肩をぽんぽんと叩かれながら肩を落とす明久。
気合いを入れ直し、顔を上げると前へ進み出た。
「島田さん！」
「よ、吉井！」
明久に声をかけられ、美波が珍しくしおらしい声を上げ、Bクラスの二人が身構えた。
が。
「Bクラスの二人とも、島田さんを放すんだ。それが君たちのためでもある」
「なに言ってやがるんだ？」
「バカの言うことなんかに耳を貸すんじゃない」
明久の話に耳を貸そうとしない二人。しかし、明久は話を続ける。
「君たちの命のためなんだ！！」
「「！？」」
明久の言葉に、二人がビクリと肩を震わせる。
「いいかよく聞くんだ。君たちが人質にしたソイツは、ただの女子じゃない。その一撃は岩をも砕き、巨木すらへし折る慮力を誇る魔人、“シマーダミィナミィ”と呼ばれる怪物なんだ！」
明久の突然の言葉に、美波もBクラスの二人も呆気にとられる。
そしてその後も明久によって、美波がどれだけ恐ろしいかの説明が続いた。
そこまで言われて彼女が黙ってるわけがない。
「よ～し～い～、あんたねぇっ！　『瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなって保健室にかつぎ込まれた』って聞いて心配してやっ

たのに、なによその言いぐさはっ！？」
憤怒の形相ですさまじいまでのドス黒いオーラを放ち始める美波。
その様子にＢクラスの二人はビビり始め、ドン引き状態だ。
しかし、明久の方も。
「あ、明久君！？　ほんとに私のパンツ見たんですかっ？！　答えてくださいっ！！」
と、涙目な瑞希に詰め寄られていた。
そんな喧噪の中、綾香は須川と新田を連れて、少しずつ移動していた。
数学のフィールドからそっと英語Ｗのフィールドへ移り、タイミングを計る。
そして、美波の放つ殺気に当てられ、Ｂクラスの二人が怯んだ瞬間、行動に移った。
「試獣召喚（サモン）」
言霊が響き、ディフォルメ綾香か召喚獣が顕現すると同時に二本の柳葉刀を投擲した。
横合いから現れた召喚獣の姿に驚くＢクラスのふたり。その瞬間、柳葉刀が美波の召喚獣に剣を突きつけていたＢクラス召喚獣の胴体へと一本が突き刺さり、もう一本は外れた。
素早くそれを、　紐を引いて回収しつつ、もう一体の召喚獣へドロップキックをかました。
一体は光へ還り、もう一体は吹き飛ばされた。
「な、なんだとっ！？」
「くそっ！？」
吹き飛ばされた方は戦死しなかったが、綾香に続いて召喚した須川と新田の二人掛かりでとどめを刺していた。
「ふう……」

戦死したBクラスの二人が補習教師に連れて行かれるのを眺めながら明久は息を吐いた。
そこへ長く癖のある金髪を揺らしながら綾香がやってきた。
「お疲れ」
「なんとかなったね」
綾香のねぎらいに、苦笑い気味に応じる明久。その背後に怒れる猛虎が現れた。
その気配に、明久の顔から滝のように汗が噴き出した。
「……よ～し～い～」
地獄の底から響きわたるような声に明久は身動き一つ取れない。
その肩に彼女の細い指がかかり、食い込んでいく。
「し、島田さん、ぶ、無事で良かったよ」
後ろを振り返る余裕すらなく、明久がそう言うと、肩に食い込む指の力がいっそう強まった。
「吉井！　よくもウチを化け物呼ばわりしてくれたわねっ！　また。彼女にしたくないランキングが上がっちゃうでしょっ！！　どうしてくれんのよっ！！」
「いや、あれは作戦……」
「問答無用！　歯を食いしばりなさいっ！」
明久の肩を引っ張って振り向かせると、渾身の力を込めて右ストレートを放った。

「ぐっ？！」

迫る拳を明久は避けようともせず甘んじて受けた。

そして美波がもう一発とばかりに振りかぶった腕を、ほっそりとした白い指が捕らえ、第二撃を防いだ。

それは、長くて癖のある金髪の少女の指。

「離しなさいよ！　綾香！　ウチは吉井をボコらないと気が済まないのよっ！」

そんな彼女に美波は吠える。

「落ち着きなさいよ美波。戦死しないで済んだんだから良いじゃない」

「冗談じゃないわよ！　何であそこまで言われなきゃならないのよ！　ウチだって女の子なんだからね！？」

そう叫ぶ美波の姿に、綾香は空いてる右手で頭を掻く。

「そりゃ普段からアッキーをボコろうとしてんだから当たり前じゃない？　それに、あれは美波を助けるためにアッキーがその場でっち上げた話だよ。まあ、美波を怒らせて相手の注意を逸らすためでもあったけど。大体あんな嘘に引っかかって敵に捕まって、みんなの足を引っ張った上に助けてもらっておきながら謝罪も礼も無しで殴りかかるってどうなのよ」

「う、ぐっ」

綾香に指摘され言葉に詰まる美波。頭に上っていた血も下がり始めたようだ。

「後ね、どうしてもアッキーをもう一発殴りたいなら、まずあたしをぶん殴ってくれない？　美波を怒らせるのにはあたしも同意したようなもんだし」

明久が美波を怒らせる話で相手の注意を逸らすのは分かっていた。

プロの交渉人や話術に優れているわけでもない一介の高校生の半端な交渉では二人同時に注意を逸らすのは難しい。
それゆえに明久は美波にも怒って貰うことでそちらにも注意を引かせるためにあんな話をしたのだ。
綾香もそれを察していたが、Fクラスで射程のある攻撃を繰り出せるのは自分くらいしか居ないため、交渉を明久に任せたのだ。
相談せずとも、互いのやることが分かっていてこその分担だ。
「綾香、それは……」
殴られて顔の一部を赤くした明久が声を上げる。
「いいの。あたしもアッキーと一緒に殴られるつもりだったんだから。けど美波」
「……なによ」
「殴った後で良いから、みんなに迷惑を掛けたことを謝って、助けて貰ったことに礼を言いなさいよ？」
そう言われて、肩を落とす美波。
「……もう……いいわよ……」
顔を逸らしながらつぶやくように言う。そして、一度顔を上げ、頭を下げる。
「みんな、迷惑をかけてゴメン！　それから……助けてくれてありがとう！」
謝罪と礼を口にする美波。
それに対して、クラスメイトたちは笑顔で応じる。
そのことにホッとしつつ明久の方を見る美波。
「よし……」
明久に声を掛けようとして止まってしまった。
そこには、明久の殴られた痕にやわらかい表情で手を当てている綾香の姿があった。
二人とも、今まで見たことないような優しい顔をしている。
「大丈夫だった？　アッキー」
「うん、とっさに全身で“受け”たから、見た目ほどひどくはない

よ」
明久の言葉に、綾香は小さくうなずいた。
その様子を見て、美波は我知らずにささやかな己の胸に手をやる。
そこへ。
「美波ちゃんどうしたんですか？」
瑞希が声を掛けてきた。
「え？　ううん、何でもないのよ？」
「明久君と、綾香ちゃん……ですか？」
瑞希の言葉に、体が震える。が、意を決して小さく頷いた。
「……そうですか。けど、覚悟はしておいた方が良いですよ？」
そう言われて美波は瑞希の方を見る。瑞希は、困ったような笑顔を浮かべていた。
「私、あの二人とは十年ほど付き合いがあるんですよ？　だから分かるんです。二人の絆が。それに割り込むのは、とても大変ですよ？」
そう語る瑞希の横顔を見て、それから二人を見やる美波。
「……けど、ウチは諦めたくない」
「……。なら、がんばって下さい」
そう言うと瑞希は二人の方へ足を進めた。
その後ろ姿を見送り掛け、強くかぶりを振ると、美波は自分の両頬を両の手のひらではたき、彼女を追うように足を踏み出した。

だい☆さんじゅうにもんなんだなぁ。

その後、ＦクラスはＢクラスを教室内に押し込むことに成功し、戦況は膠着する。

その間、綾香は回復試験を受けるために教室へ戻っていた。

「で、ちゃぶ台が足りないと」

教室の状況を見て、綾香はため息を吐く。

先ほどまでの渡り廊下戦において点数を消費した面々が回復試験を受けているのだが、根本の設備破壊の影響が少なからず出てきたことになる。

「ほかのちゃぶ台は使いものにならんし、時間的にも具合の良い奴を探してる暇はないからな。おまえの数学も必要なカードだから試験を受けさせないわけにもいかない。幸い視聴覚室が空いたそうだからそっちを確保してある。すぐに行って回復試験を受けてきてくれ」

「……ほんとにギリギリじゃん」

ノートで何かをチェックしながらそう言ってくる雄二に綾香は時計を見ながら息を吐く。

視聴覚室へ行ってすぐに試験を受ければギリギリ十六時前だろう。

綾香は小さく嘆息してから軽く走り出した。

それから時間が経ち、ギリギリ十六時前に回復試験を受け終わった綾香は息を吐く。

このまま戦争は一時休戦になるだろうと思い、少し休んでから視聴覚室を出た。

「今日はどうしよっかなあ♪」
しばらく両親はいないので、ぷち一人暮らしみたいなものである。明久の家に行っても良いし、一人暮らし気分を味わっても良い。
そんなことを考えながら階段を上っていく。

そして三階へたどり着き、廊下へ足を踏み出したとき、見計らったように声が掛かった。
「よう夏目」
その声に立ち止まり、顔をしかめながらそちらへ振り向いた。
「……恭二」
四階へ続く階段の踊り場。そこに居たのはBクラス代表の根本恭二。
「……なんであんたがここに？　休戦中って言っても大して時間も経ってないでしょうに？」
時間は十六時を五分ほど回った頃だ。休戦状態に入ってそうは経っていない。訝しげな顔になって彼を見る綾香。
そんな彼女の様子に、根本は口の端を歪める。
「お前に話があるんだよ。上階まで付き合ってくんねーか？」
そう言いながら、アゴで上を示す。
それに対して綾香は呆れと嫌悪を混ぜたような顔になる。
「……“また”あの話？　何度も断って……」
「吉井って観察処分者のことだ」
拒否の態度を示して歩み去ろうときびすを返し掛けた綾香の顔に緊張が走り、足が止まる。そして再度彼を見やり蒼い視線を投げかけた。
「興味……あるだろ？」
勝ち誇った顔の根本をにらむ。が、何も言わずに階段に足をかける。
それを見た根本は得意げな顔で上階へと足を進めた。

「で、話って？」
四階に着くなり綾香は問いただした。しかし根本の余裕は崩れない。
「おいおいせっかちだな。積もる話も無しかよ」
「じょーだん。あんたと語り合う話なんてありゃしないでしょ？」
にべもない綾香に根本は肩をすくめる。そして綾香を見下すようにしながら口を開いた。
「お前、あの観察処分者とイイ仲みたいだなあ」
「？」
言われた意味が分からず首を傾げる綾香。
「まさか、あんなバカと同棲してるとは恐れ入ったぜ」
「恭二？　あんた何言って……」
そこで根本は紙切れを一枚取り出して見せた。そこにプリントとされているものを見て綾香は口をつぐんだ。
「最近のコピー機の精度は悪かあねえが、写真のコピーは微妙だな。だが見ればわかんだろ？」
少しピンボケしているが、そこに写っているのは、マンションの玄関先。驚く少年の頬に、マンションから出てきた金髪の少女が口づけているシーンだ。
「これって……」
その紙をひったくった綾香は二の句が継げない。
「そこが観察処分者の自宅で、一人暮らししてるってのも調べがついてる」
そう、少年は明久。金髪の方は綾香だ。このシチューエーションには綾香も覚えがあった。
Dクラスとの戦争が終わった次の日の朝、仲直りできたのがうれしかった綾香は、出掛けにふざけて明久の頬にキスしたのだ。
「こんな不祥事が知れたら、大問題だ。しかも片や学園一の問題児。

片や学園でもよく目立ち、Aクラス入りも夢じゃない才女だ。体面を気にするこの学園で問題にならない訳がねえよな」

綾香の手に力が入り、紙がクシャリと音を立てる。

「まあ、成績の良いお前は厳重注意で済むだろうが、観察処分者はどうなるかな？　適当な理由付けて退学かもしれんな」

恭二の言葉に顔色が真っ青になる。

「違う！　明久とあたしは従姉弟で……」

「へえそうかい。だが、それは年頃の男女が同棲する理由になんねえだろ？」

「同棲じゃない！　あの日はたまたま泊まって……」

綾香は必死で否定しようとする。が、必死になればなるほど根本の思うつぼだった。

「そんなの誰が信じる？　まあ良い。なんならこの事は黙っていてやっても良いぜ？」

恭二の言葉に綾香は目を細めながら彼をにらむ。

「……条件は？」

「あの観察処分者（バカ）と縁切って、俺の女（モノ）になれ、“綾香”」

言いながら根本は綾香に近づき、綾香の髪を一房手にして匂いを嗅ぐ。

その行為に生理的な嫌悪を感じて飛び退く綾香。

「恭二……あんた最低の人間ね……」

綾香のその言葉に、根本はいやらしい笑みを浮かべながら肩をすくめた。

「返事は戦争後で構わんぜ？　ま、当然お前が戦争で“どんな活躍をするのか”も答えの一環として見させて貰うけどな。ハハハハ！」

笑いながら階段を下りていく根本。

綾香はどうしようもない悔しさに、ただただ肩を震わせた。

クズの笑い声が聞こえる。
その話し声を耳にしたのは偶然。決して罪悪感から彼女の様子が気になったわけではない。
聞こえてきたのは、最低の“脅迫”。自分の撮った写真でここまでするクズ豚には殺意を覚える。
と、同時に、そんな奴の口車に乗ってしまった自身の浅はかさにめまいがした。
下りてきたクズ豚に見つからぬよう身を潜め、通り過ぎるのを待ち、顔を出すと彼女が下りてきたところだった。
その顔を見て、ショックを受けた。
いつも底抜けの笑顔で周囲を明るくする彼女の顔が、乾いた荒野を覆う曇天のようになっていた。
そして、その蒼い瞳から銀の滴が一筋流れ落ちたとき、燈色の髪の少女は死ぬほど後悔した。

だい☆さんじゅうさんもんじゃのう。

日付が変わり、午前九時。
Ｆ対Ｂの試召戦争は、前日に中断したＢクラス前から再スタートした。
昨日の戦争は綾香の活躍によって被害が最小限とも言えたＦクラスではあったが、Ｂクラスの扉を挟んでの戦いでは小出しにせざるおえず、籠城戦の様相を呈していた。
そんな状況の中、Ｆクラスでは異変が起きていた。
いつもなら明るいキャラでみんなを鼓舞する綾香が、何のアクションも起こさないのだ。
それが気になり、戦いに集中できない者が続出し、さらには用意していた数学教師などもＢクラス内へ引き込まれてしまい、Ｆクラスの被害を拡大していた。
本来なら、ここで綾香が火消しとして動くはずだった。

だが、顔を上げて動こうとする度に、息を呑んで立ち止まってしまう。
必然、瑞希が代わりに火消しに走ることになる。
その状況に、隙を見て秀吉が明久に話しかけた。
「明久よ、綾香の様子がおかしいのじゃが、なにかあったのかの？」
「……ごめん。今回は本当に分からないんだ。昨日も一人でさっさと帰っちゃったし、今朝も一緒には登校しなかったから……」
帰りが別になること自体はそう珍しくない。綾香は交友関係が広いため、放課後に誘われることが多いからだ。
彼女は、友人を大事にするため、余程の事が無い限り誘いを断らない。
反面、朝は必ずと言っても良いほど明久と一緒に登校する。　一

緒に登校できない時はどちらかに事情があるためなので気にもしないのだが、今回は様子が違っていた。
明久は心配になって綾香の元へ歩み寄った。
「綾香、どうしたの？　具合でも悪いの？」
そう訊ねながら手を伸ばす明久。
それを。
綾香が避けた。
「え？」
「あ。」
思わぬ事に呆気にとられる明久。綾香もバツが悪そうにしながら顔を逸らした。
「なんでも……ないよ？　なんでも……」
うつむき、力無く答える綾香。
それを見た明久が口を開いた。
「……なにか、あった？」
その言葉に綾香は顔を上げる。
口を開き、明久へ向けて言葉を紡ごうとするも、目の端に映った嫌らしい笑みに、それはほどけて消えてしまう。
そして。

綾香は、

明久を、

そっと押して遠ざけた。

その拒絶のサインに、明久は頭を鋼鉄性の鈍器で殴られたかのようなショックを受けた。
そして見た。
綾香の、泣き出しそうな、苦しそうな、そんな顔を。
彼女のそんな表情に、明久の心は切り刻まれるように痛んだ。
そのまま離れていく彼女に声もかけられず、彼は立ち尽くした。
悄然となり、戦場の喧噪へ目を向けた。
と、奥に根本恭二に姿が見えた。
その目は真っ直ぐに“明久”へ向かい、勝ち誇ったような笑みを“彼”に向けながら手にしていたハガキ大の何かをポケットに突っ込んだ。
その根本の笑みに明久は違和感を感じる。まるで溜飲を下げたような笑み。
戦争が終わったわけでも無いのにするような笑い方ではない。
なら、おそらく自分と綾香のやりとりを見ての笑いだろう。
考え込む明久。
その時、後頭部に軽い衝撃が走った。
何事かと周囲を見回し、足下に転がる消しゴムに気づいて拾い上げる。
不意に、視界の隅に燈色がチラついた。
そちらを見ると、コロネのようなドリルロールの燈髪の少女が手招きしているのが見えた。
一瞬、戦況を確認し、戦線が崩れていないのを見てから周囲に気づかれぬよう彼女の方へ移動した。

「……やっと来ましたか豚野郎」
「……えと、何の用かな？　清水さん」
そこに居た美春の言葉に、明久は警戒しながら答える。

美春は少し逡巡してから口を開いた。
「……あなたにお話しておきたいことがあります」
それを皮切りに語られたのは、あの卑怯者に乗せられた自身の話。
そして、卑怯者と綾香の間で交わされた、言葉の陵辱。
美春の口から語られたそれに、明久の握った拳が白くなっていく。
美春の話が終わったとき、明久の口の端から、こすれる音が響いた。
「豚野郎……いえ、吉井明久。美春のことは許さなくて構いません。綾香を……綾香を助けてやってくださいまし。どうか、どうかお願いします」
そう言って明久に頭を下げる美春。そんな彼女へ明久は優しく声をかけた。
「ありがとう清水さん。話してくれて」
「！」
思わぬ言葉に顔を上げる美春。そこにあったのは少年の笑顔。
「大丈夫。綾香は必ず僕が助ける」
そう言って、明久はきびすを返し、戦場へと足を向けた。

「明久！」
戦線へ戻った明久へ、よく知る声が聞こえてきた。
Ｆクラス代表の雄二だ。
損害が増えてきたため、本隊を率いてやってきたらしい。
「夏目がまともに戦ってないと聞いたんだが、何かあったのか？
姫路の消耗が激しいと、この後の作戦に響くんだが……」
「ゴメン、ちょっと言えない」
離れたところでうつむく綾香を見やりながら明久に訊ねる雄二。
しかし、明久は真剣な表情で答えることを拒んだ。
「……そうか。だが、そうなると厳しい。本来夏目に任せて温存するはずだった姫路の消耗が大きくなり始めている。これ以上は敗北に繋がりかねん」
「それってどんな作戦だったの？」
明久に聞かれ、雄二はいったん口をつぐむ。両者の視線が絡まり、ほどなく雄二が白旗を揚げた。
「……根本への攻撃だ。扉周りの戦況はそのまま、みんなからのフォローも何も無しでだ」
つまり、圧倒的な火力を持って突破し、根本へと肉薄、強襲を仕掛ける。というものだ。
しかし、明久の表情はスッキリしない。
「……それ、もう一手有るでしょ？」
明久のその言葉に、雄二の眉が跳ねる。
「まさか、お前に気づかれるとはな……」
「雄二の作戦にしちゃあ雑だもの。でも、そうだね……姫路さんがやるはずのその役目……僕にやらせてくれないかな？」
そう明久に言われ、雄二は呆気に取られた。

「……できるのか？　お前に」
「出来るか出来ないかじゃない。やるんだよ」
明久の眼に宿る意志の力に、一瞬だけ雄二は呑まれそうになった。
だが、すぐに口の端に笑みが浮かぶ。
「……いいだろう。ただし、姫路も同時に突入させる。二カ所の扉から同時に突入すれば、どちらかがたどり着けるかもしれないからな」
「構わない。とにかく僕は、あのクズ野郎をぶっ飛ばさないと気が済まないんだ」
そう言って、瑞希のいるのとは反対の扉へ向かう明久。
その後ろ姿を見て、雄二は小さく息を吐く。
「……何があったのか知らねえが、明久の奴、完全にスイッチが入ってやがる。こりゃあ、もしかするかもな」
つぶやくような雄二の声は、誰にも届かない。

お昼を挟み、戦争は未だに続いていた。扉前の攻防は終わる気配を見せず、戦いは膠着状態が続いている。
そんな中、お昼前頃からBクラスの空調機がぐずりだし、戦争の熱気がこもって教室内の不快指数はうなぎ登りだ。
たまらずすべての窓を開け、涼を取る根本。
『このFクラス（バカ）どもが、いい加減諦めろよな！　暑苦しいのが雁首揃えやがって』
『ハッ！　Bクラスの代表様は軟弱だなぁ？　おい。そろそろギブアップか？』
『ケッ！　ギブアップするのはそっちだろうが、負け組代表さんよぉ』
『ハハッ！　それがFクラスのことなら、もうすぐお前がそうなるな！』

『ハッ！　口だけは達者だなあ坂本ぉ。姫路の消耗もでかい以上、もうすぐ決着だ。一気に押し出せ！　お前ら！』

『いったん体勢を立て直すぞ！　Ｆクラス後退！』

雄二の指示に、片方のドアに集まっていたＦクラス主力部隊が下がり、Ｂクラスの主戦力が廊下へと溢れ出る。

一方、蓋だけをしているような状態のもう片方のドアにはＦクラス生徒三人にＢクラスの生徒が三人ほど。

ほかのＢクラス生徒は突破に成功したドアの方に向かい、Ｆクラスを追撃しているようだ。

この状況に、Ｂクラス生徒が嘲りの表情を浮かべた。

「へっ、お前らの本隊は押し出されたようだな。こっちもさっさとケリを着けて向こうに加わんねえとな。試獣召喚（サモン）！」

召喚した相手に対し、Ｆクラスの三人の向こうから声が響いた。

『Ｆクラス、吉井明久が受けます！　試獣召喚（サモン）！』

言霊に応えて召喚獣が顕現し、木刀を構える。そして、明久が前へと出てきた。

「Ｆクラスなんざ誰が来たって同じだぜ！」

そう叫んだＢクラス男子の召喚獣が、明久の召喚獣へと切りかかった。

その斬撃の軌跡が、明久にはまるでスロー再生のように見えた。

極度の集中により感覚が研ぎ澄まされる。

迫る刃を籠手で押し退け、木刀を正確に急所へ六度振るった。

ただ一瞬。

Ｂクラス男子の召喚獣は光に還った。

「は？」

いま、何が起きたのかわかっていないＢクラス男子は眼をしばた

たかせる。

その目が閉じ、

そして開くと、

目の前に明久の顔があった。

明久が相手が目を閉じた瞬間に、一気に飛び込んだのだ。
「うおっ？！」
驚き、仰け反りながら、右足が一歩、いや、半歩下がった。
すると、彼ととなりの生徒の間に隙間が出来る。
そこへ明久が半身になりながら踏み込み、するりとすり抜ける。
「え？」
「嘘だろ？！」
ほかの二人が驚き、明久の方を見ると、滑るように明久が走り去るところだった。
「に、逃がすか……」
「それはこっちの台詞だ！　試獣召喚（サモン）！」
追おうとする彼らをFクラスの三人が阻止する。
『ねえぇもぉおとおぉぉーーーっっ！！』
「？！　な、なんだっ？！　よ、吉井だとっ？！」
走る明久の雄叫びに驚く根本。
二人の間に、近衛が一人割り込む。
そのことに根本が胸をなで下ろそうとした瞬間、主力が居た方のドア付近が赤く輝き、瑞希が肩で息をしながら姿を現す。

「う、嘘だろ……突破して来やがったのか……」
絶句し、窓の縁に腰をぶつける根本。
その時、ダダンッと大きな音が響く。
何事かとそちらを見れば、小柄で鋭く薄い気配の少年、土屋康太と保健体育の大島教諭が窓からロープを使って飛び込んできたところだった。
「……Fクラス土屋康太が、保健体育勝負を……」
「Bクラス山本慎也が受ける！」
「……近衛」
苦々しい表情になった康太を後目に、転がるように逃げる根本。
「は、ざ、ざまあみろ、まだ終わるか！　こ、この根本恭二が、ま、負けて……」
つぶやきながら這々の体で逃げる根本。その頭が、何かにぶつかる。
なんだ？　とばかりに見上げた根本の視界に、阿修羅が写る。
その向こうでは足止めしていたはずの近衛が戦死して連行されるところだった。
「ヒ、ヒィ」
尻餅をつきながら、情けない声を出しつつ後ずさる根本。
それを見下ろしながら、彼、吉井明久が口を開いた。
「Fクラス吉井明久が、Bクラス代表、根本恭二に数学勝負を挑みます！試獣召喚（サモン）！！」
「ま、まだだあ！　お前を瞬殺して、逃げきってやる！　試獣召喚（サモン）！！」
ふたりの言霊に従い、明久と根本の使役獣が現れる。
その点数は、“１０２”と“２０９”。ダブルスコアだ。
「し、死ねぇっ！！」
根本の声に応じ、彼の召喚獣が、明久の召喚獣に襲いかかった。

次の瞬間。

明久の召喚獣が鋭く踏み込み、脇をすり抜けつつ一撃し、さらに背後から回し蹴りを放つ。

それを背に受けて吹き飛ばされたところへ踏み込み、木刀を突き込んだ。

もんどり打って倒れたそれへ、一撃を加え、バウンドしたのを利用しながら上空へと蹴り上げる。為す術もなく宙を舞う根本の召喚獣。

落下してくるそれに、明久の召喚獣が突きを入れた。その衝撃で空中静止する。

そこへ二撃目が、三撃目が襲いかかり、四、五、六と続く。

「うぅぅぉおおおおぉぉーーっ！！」

明久の雄叫びに呼応し、そのギアは次第に回転速度を上げ始め、突きの連打になり、嵐と化す。

それが止んだとき、ぼろ雑巾となったそれが再び落ち始め、地に着かんとしたとき、明久の召喚獣が鋭く踏み込んで木刀でなぎ払った。その一撃がとどめとなり、根本の召喚獣が光の粒子となって消え去った。

『戦争終了！　勝者、Ｆクラス！』

「そ、そんな……お、俺が観察処分者（最低のバカ）に負けるなんて……」

四つん這いになり呆然とする根本。その胸ぐらが掴まれ、引っ張り起こされる。

「根本」

「ヒッ？！」

目の前には憤怒の形相たる阿修羅が根本を睨み付けていた。

「お前が綾香に何をしたかは聞いてる」

「……」

その言葉に青ざめる。

「二度は言わない。良く聞け」

「……」

この阿修羅のごとき表情の少年の普段からは想像できないような声。それは、すべてを殺し尽くす鬼神の如し。

そこから発せられる殺気に当てられ根本は竦み上がった。

「お前が綾香を脅すのに使った写真を寄越せ。コピーも全部だ」

「……」

圧力を増していく視線に、涙目で壊れたように首を縦に振りながらズボンのポケットの中から写真を取り出す。

それを阿修羅にあっさりと奪われる。

「それから、金輪際、綾香に関わるな。さもないと……」

「……」

膨らむ殺意に涙が溢れ、鼻水も出始める。

「ツブす」

言の葉とともに叩きつけられた気配に、根本の奥底で何かが折れ、股座の辺りに黒い染みが広がり、泡を吹きながら失神した。

「明久、なにやって……」
「悪い雄二。僕は用事があるから後よろしく」
明久と根本の様子に、雄二が声をかけながら明久の肩を掴んで振り向かせる。そして、その顔を見て雄二は絶句した。
だが、明久は関係ないとばかりに雄二の横を足早に抜けていく。
その背中に思わず視線を走らせるも追う気にも、声をかける気にもならなかった。
「……なんて顔してんだあいつは……アレじゃまるであいつの方が悪鬼羅刹じゃねえか……」
つぶやく言葉は誰にも聞こえない。ただ、雄二の耳にはっきりと残った。

勝利に沸くFクラスの面々。
対してBクラスはお通夜状態だ。
そんな悲喜こもごもからは離れた所に、彼女は佇んでいた。
暗い表情でうつむき、その特徴的な、ボリュームのある金髪もくすんで見える。
きびすを返し彼女はどこかへ歩き出そうとした。
そのとき。
「綾香！」
この世でもっとも近しい少年の声に、綾香は足を止めた。
そして振り返り彼を見る。
その顔を見て、体が少し強ばった。
「根本君とは話を着けた。もう、心配はいらないよ」
そう言ってくる彼に、悲しそうな顔をしながら近づく綾香。
「綾香？　どうし……」
湖面に空を写したような瞳で最後まで言わせず、彼の両頬にそっと両手を添える綾香。

「明久、怖い顔になってるよ？」
言いながら、小さく笑いつつ明久の頬を揉み始める綾香。
それによって明久の顔の強ばりがほどけていき、険がとれていく。
「……綾香」
ほどなく、いつもの緩い空気を取り戻す明久。それを感じ、綾香は彼の両頬を摘んで左右に引っ張った。
「ぴろーん」
「い、いひゃいよはやひゃ」
「プ」
「？」
「プフフッ」
突然吹き出した綾香に、明久も困ったように笑う。
と。
金糸がふわりと舞った。
彼に体を預けるように飛び込み、ぬくもりを確かめる綾香。癖のある金色の髪が、明久の鼻先をくすぐる。
明久はそのまま綾香の背に手を回し、抱きしめた。
その力が強くなって、綾香は息を漏らす。
「ん。ちょっと痛いかも……明久」
「じゃ、緩める？」
「んーん。もっと、強くして……」
ねだる綾香に、明久は力を込めて抱きしめる。綾香は、その体を締め付ける痛みと、彼の体温と、匂いに心地よさを感じながらその身をゆだねた。
「……明久」
「ん？」
「……ありがとう」
「……うん」

その後の戦後対談で根本は特に反抗することもなく唯々諾々と雄二の言うことを聞き、女装してＡクラスに向かった。
すでに心折れ、尊厳すら無くなった彼はおどおどしながらＡクラスに入っていったらしい。
それでもＢクラス内にすら彼に同情するような物好きはおらず、ただただ白い目で見られるのみだった。

「さて、帰ろうか」
終戦後、先ほど明久が綾香を抱きしめてるシーンを見た秀吉と美波がアレな事になっていたが、周りを気にするでもなく明久が綾香に告げる。
「おう。帰ろっか、アッキー」
応える綾香の声にはいつもの張りはないが、表情は明るい。
連れだって教室から出ていく明久と綾香。また明日♪　と告げた彼女に瑞希は軽く手を振って応えていた。
「……あのふたり、あれで付き合ってないのよね？」
すでに敗北感を漂わせながら美波が瑞希に訊ねると、彼女ははっきりうなずいた。
「ええ。少なくとも綾香ちゃんと明久君にそのつもりはないみたいですよ？」
「……それでなんであんなにベタベタ出来るのよ……」
「……綾香ちゃんと明久君にとっては、ふたり一緒にいることが、ひとりでいるより何倍も自然なんです。ふたりの間に、距離なんて無いほどに。ただ……それだけなんですよ」

ふたりの背をまっすぐ見送り、瑞希は微笑む。
その表情に美波はおもわず口を開いた。
「瑞希は……」
「はい？」
「瑞希はいいの？　それで。吉井の事、好きなんじゃないの？」
美波に問いかけられ、瑞希は眼をしばたかせると困ったように笑いながら答える。
「ええ。大好きです」
それを聞いて美波は一瞬息をのんだ。
「じゃ、じゃあ……」
「けど、綾香ちゃんの事も、同じくらい好きなんです」
美波が言い募ろうとするのを制するように瑞希は告げる。
その答えと表情に、美波は何も言えなくなってしまった。

教室を出た綾香と明久だったが、昇降口で待ち伏せていた美春が、綾香に謝るというイベントが発生するも、綾香自身はすでに明久が許しているなら。と、彼女を許した。
それから少し日が傾き始めている帰り道をふたりで並んで歩く。
と、不意に綾香が口を開いた。
「なあ、アッキー。今日はあたし……」
「泊まっていきなよ」
綾香に最後まで言わせず、明久が告げた。
その言葉に綾香は立ち止まってしまう。
「だ、だけど……」
逡巡する綾香に振り向き、明久は笑顔になる。
「騒ぎたい奴には騒がせればいい。僕は今日、綾香と一緒に居たいんだ」
その言葉を受けて、綾香も笑ってみせた。

「……明久。……うん。あたしも明久と一緒に居たい」
はにかみあうふたり。
そして明久が手を差しだし、綾香がそれをとる。
並んで歩き始めたふたりの影が重なった。

本日は吉井家のマンションへ帰宅したふたり。
そろって部屋着に着替え、本日は勉強から始めた。
とは言っても、翌日の補給試験に合わせた予習復習だけでは合ったが。
リビングのテーブルにふたりで勉強道具を広げ、肩を寄せ合い……いや、触れ合わせながら二時間ほど勉強する。
それが終われば今度は夕食の準備だ。
ふたり並んでキッチンに立ち、手順を確認するまでもなく作業を分担して調理していく。
「～♪　～～♪　～♪　タッ」
鼻歌交じりで野菜を切っていた綾香が小さく声を上げ、明久がそちらをみる。
「どうしたの？　綾香」
「やっちった☆」
苦笑いしながら左手を上げると、中指から赤いものがこぼれ始めていた。
どうやら軽く指先を切ったらしい。
明久はコンロを止めると、すぐに綾香の手を取り、その指を口に含んだ。
「ンッ……」
傷口に軽い刺激を感じ、綾香の口から軽く息が漏れる。
それから絆創膏で処置して調理を再開するふたり。
そこからはとくに問題もなく料理は完成した。

本日は白身魚のバターソテーにサラダ、ひじきの煮付けとなっている。味噌汁は長ネギと豆腐だ。

ふたりで夕餉を楽しみ、食事が終わったら軽くコーヒーブレイク。ふたりでソファに並んで座り、綾香は明久に寄りかかるようにしてくつろぐ。それに対して明久は嫌な顔ひとつせずに彼女の重さを受け止めていた。

そんな時間を満喫したら、明久は洗い物。綾香が風呂掃除をして湯張りだ。

沸かした風呂に明久を先にやり、綾香は軽くリビングを片づける。程なくして風呂からあがってきた明久と交代で風呂場に向かう綾香。

上がればお気に入りの髪の手入れタイムだ。それを思うと普段より丁寧に髪を洗ってしまう。長くて癖のある髪を洗うのは大変なのでいつもはぞんざいに洗うのだが、泊まりの時は気にならなかった。

そして、風呂から上がると、ドライヤー片手にリビングへ向かう。ぼんやりテレビを眺める明久へいつものようにドライヤーを渡し、彼の隣に横向きで座る。

ドライヤーで乾かし、手櫛で梳いてくれる感触が気持ちよく、綾香は晴れ上がった空のような目を細める。

不意にドライヤーが止まり、背中に何かが押しつけられた。

何かと思って首を巡らすと、明久が綾香の髪に顔を埋めるようにして寄りかかってきていた。

「ア、アッキー？」

どうしたのかと思い声をかけるが反応は無かった。代わりに軽い寝息が聞こえてきた。

「……しょうがないなぁ明久は」

そうして苦笑いしていると、首の付け根辺りにくすぐったいような刺激を感じ、密やかに声が漏れる。

今一度首を巡らし、横目で彼を見ると、髪に埋もれながら綾香の首の付け根の辺りに明久が吸い着き、甘噛みしていた。

その無邪気そうな顔を見て、綾香は小さく笑う。
「……今日はいっぱいがんばって、疲れちゃったんだね」
そうつぶやき、綾香はそのまましばらく、彼の重さと首元の刺激を堪能した。
小一時間ほどで一度目を覚ました明久。まだ軽く寝ぼけている彼を部屋のベッドに引っ張っていくと、明久はそのままベッドに倒れ込む。
綾香はそんな彼を仰向けにして掛け布団を掛けてやり、自分も同じベッドへ潜り込んだ。
ベッドの中で、明久に覆い被さるように寝顔をのぞき込む蒼い瞳。
「……明久、本当にありがとう」
つぶやき、彼の額に口付ける綾香。
そして唇を離して軽く微笑むと、彼の胸板を枕代わりにして意識を落とした。

だい☆さんじゅうななもん……にゃふう……。

翌朝、差し込む朝日に少年のまぶたが震えた。
「ん……ん～」
まだまどろみの中にある頭は起床の信号を出さず、寝返りを打って意識を閉じようとした。
が。
体が……というより腰の辺りが何かにがっちりホールドされており、寝返りが打てなかった。
それどころか下半身に何か重しが乗っているようでもある。
しかもそれはとても柔らかく、暖かかった。
さらには朝の生理現象に柔らかい何かが載っかっており、感覚的にこそばゆくてヤバい。
明久は、何だろうと思い身を起こす。すると大きく膨らんだ掛け布団がはだけ、ボリュームのある金色の毛玉があらわれた。
「……え？」

それが“誰”であるかに思い至った瞬間、明久の頭が覚醒する。
そして掛け布団を一気に剥がすと、驚愕の光景が目に飛び込んできた。
明久の腰回りを両腕でがっちりホールドし、その足の間で丸くなりながら、彼の“朝の生理現象”を枕代わりにした金髪碧眼の従姉、夏目綾香の姿が現れたからだ。
「……う、う～ん」
布団がはぎ取られ、明るくなったことで、顔を“枕”に擦り付けるようにむずがる綾香。
「って！　これはダメだぁっ！！」
ヤバい刺激にあわてて綾香の腕を振り解いて離脱する明久。

それによって綾香は目を覚まし始めたようだ。
「ん～？　もうあふぁ～？」
寝ぼけ眼で身を起こし、軽く伸びをしながらあくびをする綾香。
まだ眠いようで、ぼんやりと明久を見ながら寝間着代わりのフリースに手を突っ込み、腹をバリバリ掻きつつあくびを噛み殺す綾香。
と、その動きが止まり、蒼い瞳が明久のある一点を見つめる。蒼い目が細まり、口が弧を描く。
それを見た明久は嫌な予感がして、冷や汗を流した。
ス、と綾香が四つん這いになりながら明久の方へにじり寄る。
「んふふ～♪　ねえ？　アッキー」
言いながら妖しく笑う綾香。
明久はそんな彼女を警戒しながら後退するが、すぐにベッドの端へ追い込まれてしまう。
「な、なにかな？　綾香」
ひきつるような笑顔を浮かべながら返事を返す明久。
それに構わず、綾香は四つん這いのまま一歩一歩近づき、その度に彼女に実る、二つのたわわな果実が揺れるのがフリース越しにもわかる。
そうして近づいてくる綾香に、危険を感じた明久が、ベッドから降りようと体をズラした瞬間、一気に近づき、彼にのしかかった。
「ちょっ？！　綾……」
抗議しようと声を上げ掛け、下半身への刺激に硬直する。
「おー、結構堅いな☆」
明久のその反応を見ながら小悪魔スマイルを浮かべる綾香。
「こんなに立派になっちゃって」
ニンマリ笑いながら綾香がその白い手で、さらに刺激を与えようとした瞬間。
「ふんぬうぅおおおぉぉぉーーーっっっ！！！」
雄叫び上げつつ明久は強引に彼女を引き剥がすと脱兎の如く部屋から逃げ出した。

「あ、あれ？」
あまりの明久の必死さぶりに呆気にとられる綾香。
「……もしかしてあたし、やり過ぎた？」
呆然とつぶやき汗が一筋こめかみを伝った。

文月学園に続く通学路。
不機嫌そうに歩く明久の周りを、綾香が明久の顔をのぞき込んだりしながら、うろうろしつつ進む。
その様子は、まるで大型犬が飼い主のご機嫌を伺うように周りをうろつくようにも見える。
「なぁ～アッキー。悪かったって」
「いーや、あれはシャレになってない」
謝る綾香に対して明久はにべもない。
それを見て綾香は困りきってしまう。
「だから悪かったって。ごめんってばさぁ。あ～き～ひ～さぁ～」
だんだんと泣きがはいり始めた綾香を横目で見て、明久は嘆息した。
「……はあ。もうああいう……えっと、破廉恥なイタズラはしないように」
「！　うん♪」
明久の言葉に綾香の顔が花が咲くようにほころび、彼の腕に抱きついた。
「ぅおっとお、もう、仕方ないなあ綾香は」
笑顔になった綾香を見て、明久も顔をほころばせる。
綾香は周囲の目を気にもせずに明久の腕をとり、自分の腕を絡めると彼を引っ張るようにして歩きだした。
「♪　～♪　～～♪」
上機嫌で鼻歌を歌いつつ自分を引っ張る綾香の横顔を見て、明久

は優しく笑った。

澄んだ飴色のスープに二本の箸がつっこまれ、そこから麺をすくい上げる。
それが小さく上品そうな唇へと近づくと、先ほどまでの上品さが嘘のように大きく広がって、麺にパクつき唇をすぼめる。
そして……。

ズゾゾゾゾーーーーッ!!

っと、派手な音を立てながら麺が口の中へ吸い込まれていき、最後にはじっこが、ちゅるん♪　と唇の奥へ吸い込まれてしまう。
満面の笑みを浮かべながら、スープのしっかり絡んだ麺を味わい、咀嚼する綾香。
「ふんめーーーっ☆　やっぱラーメンは醤油だな♪」
口の中に未だ麺が残っているにも関わらず、隣の席の少年へそう声をかける。
少年、吉井明久はそんな楽しげに食事をする蒼い瞳の従姉の姿にクスリと笑う。
「ほら、行儀悪いよ？　綾香」
そう言って、自分の昼食であるチャーハンにレンゲを差し込み、すくい上げると口に持っていく。
本日は、Bクラス戦で消耗した点数を補給する補給試験で一日埋まっていた。
時間内問題数無制限という体力と集中力に喧嘩を売るかのような文月学園の試験は過酷だ。なにしろ時間が来るまで解き続けなけれ

ばならない。午前中の試験が終了した時点で、Ｆクラスの生徒達は、かなり消耗しており、昼休みになると同時に失ったエネルギーを補充すべく飯を食いまくる。

そんな中で、綾香は明久を学食まで連れ出し、食事をしているわけだ。

そんな二人に近づく影二つ。

「またふたりで食べてるの？　やっぱり仲が良いわね？」

「おひさ、綾香。一学期が始まったばかりなのに暴れまくってるわね？　Ｆクラスは」

その声に綾香が顔を上げれば、彼女がとても仲良くしている、Ｃクラス代表の小山友香とＥクラス代表の中林宏美が揃っていた。

「やっほ♪　ゆっか☆　それにヒロリンもおひさ～☆」

「ハイ、綾香。となり良いかしら？」

「ヒロリン言うな！　まったく……」

綾香に、良いよ～♪　座って座って♪　と言われて着席する友香と宏美。

それぞれの手にしたトレーに載るのは、友香はサンドイッチとミルク。宏美はカツ丼だ。

そのメニューを綾香の蒼い視線が捉え、不思議そうな顔になる。

「いつも思うけど、ゆっかって運動部のわりには小食だよね？」

「そうよね。あたしなんか部活の後も、おなかが空いて仕方ないのに」

綾香の問いに、宏美が同調する。すると友香は得意げな顔になった。

「ま、燃焼効率良いからね。それより、Ｂクラスに勝ったんでしょ？　おめでとう。まだ設備入れ替えてないけど、これからかしら？」

「よくやるわよねぇ、Ｆクラスも。けど、Ｂクラスに勝ったのは素直にすごいと思うわ。おめでとう綾香。同じ旧校舎仲間がいなくなるのはさびしいけど、仕方ないわね」

代わる代わる祝福してくれる二人に、綾香と明久は苦笑いを浮か

べた。
その意味が分からず、友香と宏美は顔を見合わせる。
「あはは、Ｂクラスとは設備交換しなかったんだよ、ゆっか、ヒロリン。あたし達が狙ってるのは……Ａクラスだから」
二人にそう言いつつも後半さすがに声を潜める綾香。
それに対して友香と宏美は目を丸くする。
「え、Ａクラスって……」
「本気なの……」
信じられないという顔で綾香から向こうの明久へ視線をかえる友香と宏美。それを受けた明久が、苦笑いしながらも右の人差し指を立てて口にあてたことから事実と認識する。
「む、無茶にも程があるわよ？」
「いくら下が無いからって無謀すぎない？」
代表を務めていることもあり、友香と宏美はＦクラスの無茶無謀の挑戦にかぶりを振る。
しかし綾香は笑ったままだ。
「うちの代表には、考えがあるみたいよ？　うまくいけば来週には豪華設備かな～♪」
冗談めかす綾香だが、友香と宏美はまるで笑えなかった。
「……正直勝てるとは思えないけど……」
「……ま、まあがんばってちょうだい……」
微妙な表情でエールを送った二人に笑顔を向ける綾香。
ラーメンを食べ終わり、デザートのプリンへと食指を伸ばした。

そんな綾香と隣の少年を見つめる目。

『……夏目綾香。雄二は渡さない。絶対に』
『くっ、吉井君。なんで君の隣にいるのがそんな下品な外人なんだ

……』

不穏な気配に、綾香の身が震えた。

補給試験も終わり、明久と連れ立って帰ろうと昇降口へ向かう綾香。
と、横合いから声がかかった。
「吉井、すまんが観察処分者の仕事だ。ちょっと来てくれ」
「あ、はい……。そういう事みたいだから綾香、先に帰ってて良いよ？」
西村にそう言われ、少し嫌そうにしながらも了承する明久。
そのまま綾香に先に帰宅するように言うが、彼女は首を振った。
「ううん待ってるよ。鉄人せんせーいつもみたいにご一緒して良いかなあ」
「西村先生だ。ま、良かろう」
一緒に行くという綾香に、西村は注意するも、仕方がないという様子で許可を出す。
本日の作業はガラクタの運び出しとのことだ。初日のFクラスの教卓や、Bクラスに破壊され修理不能になったちゃぶ台がメインだ。
「よし、承認だ」
西村の声と共にフィールドが展開される。
そして廃材の山を前にして、明久が軽く息を吐いた。
「ふぅ……んじゃ、ちゃっちゃとやりますか」
「おう☆　がんばれアッキー♪」
気合いを入れ直した明久の後ろで綾香が応援する。
「試獣召喚（サモン）！」
明久の言霊に従って召喚獣が顕れ、作業を開始する。
「てっちゃんせんせーあたしも良い？」
「……またいつものか。まあ良かろう」
西村はニコニコ笑いながら聞いてくる綾香に嘆息しながらも許可

を出す。
「やった♪　試獣召喚（サーモン）っと☆」
綾香の言霊に導かれ、彼女の召喚獣が姿を顕した。
そしてそのままステップを踏み始める召喚獣。
「あ、そーれ♪　がーんばれがーんばれ、あ・き・ひ・さ☆　ほい♪」
踊る召喚獣と一緒に応援する綾香。
その光景に、明久が小さく笑う。
そんな彼らを見て西村も苦笑いを浮かべた。
「しかし、召喚獣を踊らせて応援とはな。よくわからん考えだ」
「だってせっかくの召喚獣なんだし、殴り合わせるだけじゃつまんないじゃないですか♪　よっと」
不思議そうに言う西村に、綾香は楽しげに答えながら今度は二本の柳葉刀でジャグリングを始めると、廃材を抱えて歩きだした明久の召喚獣の後をついて歩き始めた。
ゴミの集積場まで持っていくため、西村がフィールドごとついていくからだ。
歩きながらもジャグリングは止まらない。
「……器用なもんだ」
「去年からやってますしね慣れました。あ、そーいえばこの間聞いた件どうでした？」
「物理干渉の件か？　設定変更自体は可能だが、権限は学園長にしか無い。まあ無理だな」
「そっかあ～。ジャグリングの数増やしたかったんだけどなあ」
ざーんねん。とつぶやきながらも召喚獣はジャグリングしながらステップを踏み始める。
「……むむむ？　やっぱ難しい……」
眉根を寄せながら召喚獣を操作する綾香。
そうしている間にも明久の仕事は順調に進んでいき、程なく終わった。

「よし、これで終了だ。気を付けて帰るんだぞ」
西村の声に、それぞれ返事をしながら帰途につく明久と綾香。少し遅くなってしまったため、夜の帳が降り始めていた。
「暗くなっちゃったね？　どうする？」
「うん、今日も泊まっていこうかな♪」
今日これからのことを訊ねる明久に、綾香は笑顔で答えた。
それにうなずき、二人寄り添うように歩きながら明久の自宅マンションへ向かう。
「ただいま」
「たっだいま～☆」
誰もいないと分かっていても口に出してしまう。
二人そろっているときならなおさらだ。
本日の台所作業は綾香が担当。
明久は掃除洗濯だ。
そうして夕餉の時間となる、本日は肉じゃがにほうれん草のおひたし。味噌汁はなめこだ。
さらに綾香はどんぶりに納豆二パックに卵とのりをぶち込み、醤油をかけてかき混ぜる。
「ふーん♪　ふーん♪　ふーん♪」
ごはんに山盛りの納豆を掛けて混ぜ合わせ、うまそうに頬張る綾香。それを見た明久が苦笑いを浮かべた。
綾香がそれに気づき、首を傾げる。
「いや、綾香みたいに外国人然とした人が納豆を美味そうに頬張ってるのって珍しいからさ」
「ふぇつにふぃーじゃんひゃー。あふぁしはふぁっふぉうふひふぁんふぁし」
「綾香、行儀悪いよ？」
口いっぱいに頬張ったまましゃべる綾香を明久が注意する。
二人きりだが楽しい夕餉の時間は過ぎていった。

入浴タイムを終え、綾香の髪のお手入れタイムも終わった二人はまったりタイムだ。

ソファに座った明久の足の間に納まるような形で、カーペットの上に足を放り出した綾香が座る。

長くてくせっ毛なボリュームのある金色の髪が明久の腹の辺りを覆うように広がっていた。

ふたりでバラエティ番組を眺めながらくつろぐ姿は自然だ。

時折、綾香がウケて笑いだし、釣られるように明久も笑う。

手持ちぶさたな明久の手が、なんとなしに綾香の髪をひと房もてあそび、気づいた綾香が蒼い瞳で見上げてくる。

一瞬、目が合うが、テレビから聞こえてきた笑い声に、綾香がそちらを見て笑い始め、明久も一緒に笑う。

その間も、明久の手は、シルクのような金糸をもてあそび続けた。

そんな緩い空気を満喫し、綾香が生あくびをしたのを見計らった明久は、そろそろ寝ようか？　と、綾香に促し、彼女がうなずいた。

明久が自室のベッドに入って、電気を消そうとすると、部屋のドアがそっと開いて、空の蒼さを見せる瞳がのぞき込んだ。

綾香だ。

寂しそうな、しかし迷うような眼差しで明久を見つめる。

その意味するところに気づいた明久は苦笑いしながら掛け布団をはだけ、ぽんぽんとベッドを叩いた。

すると見る見るうちに綾香の顔が輝き始め嬉しそうに小走りでベッドまで近づき軽く跳躍して寝っ転がるようにしてベッドに飛び乗った。

小学生の時なら広かったベッドも、いっぱしの高校生二人が寝るには、少し狭い。必然、体を寄せ合う綾香と明久。

大きめの枕に、二人で頭を乗せ、鼻先に相手の体温を感じる。
手と手を絡め、額をくっつけるふたり。
「いよいよＡクラスとだね」
「うん。強敵だよ」
「今度はあたしもがんばる」
「うん、一緒にがんばろう、綾香」
「それじゃお休み♪　明久」
「おやすみ、綾香」

そして翌朝。明久は床の上で目を覚ました。

「まずはみんなに礼を言いたい。周囲からは無理だ無茶だ無謀だと言われていたにも関わらず、ここまでの戦いに勝つことが出来たのは、クラス全員の協力あればこそだ。感謝している」
教壇に立つ雄二が、教卓に手を置きつつ軽く頭を下げる。
それを見たＦクラス一同が目を丸くした。
「うーわ雄二が素直だ。きもーい」
そして、綾香の一言で空気が台無しになり、雄二が頬をひきつらせる。
「ま、まあまあ……。けど雄二がそんなこと言うなんてね。らしくないよ？」
すかさず明久がフォローを入れつつ雄二へ言葉を向ける。
それを聞いて雄二は顔を引き締めた。
「確かにな。だが、これは俺の偽らざる気持ちだ」
まじめな様子の雄二に、今度は綾香ですら茶々を入れない。
「ここまで来たなら、最後の難関。Ａクラスにも勝ちたい。そして勉強だけが人生を生き残る力じゃないってことを証明する！」
力強い言葉に、クラスのあちこちから同調する声が聞こえてきた。
クラスの想いがひとつになる。
それを象徴するかのような出来事だ。
「みんなありがとう。さて、最後のＡクラス戦だが、一騎打ちで決着をつけようと思う」
礼を言いつつそう宣言する雄二。それによって、クラス中に困惑が広がる。
「みんな落ち着いてくれ。やるのは俺と翔子だ」
ざわめく教室を、教卓を叩いて静まらせながら言う雄二。
「アホ雄二が勝てるわけ無いじゃん。瑞希に出てもらいなよ♪」

「ふえぇっ?!　む、無理ですよ綾香ちゃん。相手は学年主席なんですよ?!」
綾香の言葉に、瑞希は大層驚きながら首を振る。
「……まあそう言うな。たしかにまともにやり合ったら勝負にもならんだろう。だが、それはDクラスやBクラスとの戦いだって同じだ。過去に神童と言われた俺の力で、Fクラスに勝利をもたらしてみせる!」
雄々しいまでの言葉に、クラスの男子たちも盛り上がった。
「その勝利の方程式だが、フィールド限定勝負にするつもりだ」
「フィールドを?　教科は何にするつもりなんじゃ?」
「日本史だ。ただし、内容は小学生レベルの百点満点の上限あり。純粋点数勝負に限定する」
秀吉に聞かれ、雄二が丁寧に答える。
「よく分かんないなあ。何で日本史なの?」
そこへ綾香が口を挟んだ。しかし、雄二はその質問を予想していた。
「理由はある。日本史なら、ある問題が出れば、翔子の奴が必ず誤答すると分かっているからだ。それは『大化の改新』!」
「誰が何をしたかとかそんな感じの?」
そう訊ねたのは明久だ。だが、雄二はかぶりを振った。
「そこまで掘り下げた問題じゃない。何年に起きたみたいな年号を問う問題だ。これが出題されればアイツは必ず間違える。そうなれば俺たちの勝ちだ」
自信たっぷりに言う雄二を見て、クラスの大半は感心していた。
そんな中、綾香はわずかに顔を逸らし、背後の明久へと声をかけた。
「……なあアッキー。どう思う?」
「……雄二らしくないね。出題される可能性は確かに高いけど、必ずって程じゃないよ。なのにこの方法を採るってことは……」
「……何か他に手がある?」

「もしくはこのやり方にこだわる意味が、雄二の中にあるってところかな？」
そうして綾香と明久が話し合っている間に、瑞希の質問で雄二と霧島翔子が幼なじみだと知れて処刑されかけたりしたが、まあいつものことなので割愛する。

「一騎打ち？」
「そうだ。Ｆクラスは一騎打ちの形でＡクラスに試召戦争を申し込む」
Ａクラスへの宣戦布告。雄二は、明久、綾香、瑞希、美波、秀吉、康太の六人をつれてＡクラスへと来ていた。
宣戦布告とともに、細かい部分を交渉する雄二。
その間、綾香は背筋に悪寒を感じ、明久の背中にベッタリくっついていた。
その様子に明久が心配そうに声をかけ、秀吉と美波が落ち込んでいた。
「どうしたの？　綾香」
「んー。なーんかね、妙な視線を感じるんだよね。なんだろ？」
少し不安げに周りを見回す綾香。
明久は、肩に置かれた彼女の手に自分の手を重ねた。
それに気づいて綾香の蒼い瞳が明久の横顔を見る。
すると、明久が横目で彼女を見ながら優しく笑った。
それだけで、強い安心感を感じ、綾香も微笑む。
と、そのとき。

『……受けてもいい』

すずやかな声が響き、日本人形のような透明感のある少女が姿を

現した。
様々な意味で綾香とは対照的な美少女だ。
「……雄二の提案。受けてもいい。その代わり条件がある」
翔子のその言葉に、交渉役に出てきていた木下優子は、代表、良いの？　と声をかけるが、翔子は小さくうなずいた。
「……条件だと？」
翔子の言葉に、雄二の目が鋭く細まった。
「……そう。負けた方は何でも一つ、言うことを聞く」
そう言いながら、翔子は綾香へと視線を飛ばした。
殺気混じりのそれに困惑する綾香。そこへ明久が割り込んだ。

すると翔子は何でもないように視線をはずした。
その隙に優子が声を上げた。
「じゃ、じゃあこうしよう？　五つのうち三つはそっちに決めさせてあげる。どう？」
「ま、いいだろ。交渉成立だ」
「……勝負はいつ？」
「……十時からでいいか？」
「……わかった」
その雄二と翔子のやりとりを最後に、交渉は終了した。

午前十時。それは、Ａクラスの教室で始まった。
「ではこれより、Ａクラス対Ｆクラスの特別ルールによる試召戦争を開始します。双方問題ありませんか？」
そう確認をとるのは、立会人のＡクラス担任にして学年主任の高橋教諭である。
その前で、相対するのは両クラスの代表、霧島翔子と坂本雄二。
二人そろって肯定の意思を返し、自陣へ戻っていく。
「それでは、双方一人目の方、前へ」
「は～い☆　ハイ！　ハイ！！　あたしがやるー♪　いーよね？　雄二♪　答えはきーてないっ！♪」
高橋教諭が促すのに、真っ先に反応したのは綾香だ。
雄二の返事を待たずにスキップしながら飛び出していく。
それを見た雄二は痛痒をこらえるように眉間に指を当てた。
「夏目っ！　あのバカ……勝手にしろ！」
「勝手にするよ～ん♪」
怒鳴る雄二をしり目にくるくる回る綾香。
「……なんか……ごめん……雄二」
そんな状況に、明久が微妙な表情で謝る。
そしてＡクラスは。
「最初はあたしが出て向こうの出方を計ります。いいですよね？　代表。……代表？」
綾香の方を見ながら翔子に確認をとっていた優子は、返事がないことに訝しげになり、翔子の席を見る。
が、そこは無人だった。
えぇぇっ？！　っとばかりに驚く彼女に、黄緑髪の少女、工藤愛子が手招きをしながら声をかける。

「ゆ、優子……あ、あれ……」
彼女が指差した方を見て、優子は愕然となった。
Fクラスの一人目、夏目綾香の目の前に、Aクラス代表の霧島翔子が立っていたからだ。
「だ、代表っ?!　なにやってるんですかっ!?　代表の出番は最後ですっ!!」
思わず叫ぶが、翔子はまるで動じない。
「……この戦いは、代表が倒れても終わらない。ただの駒のひとつとして扱うのが正しい。夏目が出るなら科目は選択するはず、なら捨て駒を出すか、最強のカードでひねり潰すのが正しい」
「うぐ」
淡々としゃべる翔子に、優子は何も言えなくなる。そして、もうひとり、この事態に慌てる者がいた。
「おい、翔子!　逃げるのかっ?!　おまえの相手は俺のはずだ!」
雄二の言葉にしかし、翔子は眉ひとつ動かさない。
「……順番に関しての取り決めも組み合わせも決めていない以上文句を言われる筋合いはない。これも勝負の内」
「くそっ!　夏目!　俺と代われ」
「……やーだべんべん。せんせー数学勝負でー」
交代を要求する雄二に、綾香はあっかんべーしながらお尻を振って拒否する。
それを見たFクラスは康太と秀吉を筆頭に鼻血を吹いていた。
「くそっ!　俺が勝たなきゃ意味が無いんだよっ!　代わりやがれっ!」
激昂し足を踏み出そうとする雄二。その足を引っかけられ、腕を捕られて地面に押しつけられる。
「ぐあっ?!　てめっ!　明久っ!」
「隙だらけだよ?　雄二。それに、今の言葉は聞き捨てならないか

な？」
「何言って……」
「“雄二が勝たなきゃ意味が無い”ってどういうことかな？」
「！」
明久に指摘され、息を呑む雄二。
「……僕が言えた義理じゃないけどさ、みんなを利用したんじゃないの？」
「……」
明久の追求に、雄二は口をつぐむ。
と、静謐な声が響きわたる。
「……そこのあなた。雄二を虐めるなら許さない」
それは、静かながらも強い意志のこもった声。
それに応えるように、明久は雄二の拘束を解いた。
身を起こし、痛む腕を押さえながら座り込む。
「……くそ、勝手にしやがれ！」
そう叫んで立ち上がると、近くの席にドッカと座り、目を閉じた。
その様子を見ていた綾香は呆れたように息を吐くと、高橋教諭へ顔を向けた。
「……勝手にしていいらしいんで、進めて下さい、せんせ」
「時間ももったいありませんし、そうしましょう。改めて、霧島さん、夏目さん、前へどうぞ」
「……はい」
「ほーい☆」
二人が進み出て、数学のフィールドが展開される。
「……夏目綾香」
「ん？　なーに？　霧島さん」
名前を呼ばれ、綾香は軽く首を傾げながら応じる。
「……雄二はあなたなんかに渡さない」
「……はい？」
続いた翔子の言葉に、綾香は困惑した表情になった。

「……だからここで思い知らせる。試獣召喚（サモン）」
「え？　いや、ちょ、ちょっと待って？　なんであたしがゴリラ雄二なんかを？」
「早く召喚して下さい」
混乱気味の綾香へ、高橋教諭が召喚を促す。言外に敵前逃亡をチラつかせられたようなものだ。
綾香は苦虫を噛み潰したような顔になり、身構えた。
「あーもー、試獣召喚（サモン）！」
それを受けて綾香の召喚獣が顕現する。

相対する二人の召喚獣。今ここに、Ａクラス対Ｆクラスの戦いの幕が上がろうとしていた。

相対する召喚獣。その頭上に点数が表示される。
翔子の召喚獣は“４８２”。
対して綾香の召喚獣は“５１６”
これを見た双方から声が挙がる。

『そ、そんな代表より点数が高いなんて……』
『大丈夫なのか……？』
『代表……』
『よっしゃ綾香ちゃんの点数が上だ！』
『勝てるぜ綾香ちゃん！』
『愛してるよ～っ！』

そんな声を受けつつ、綾香は召喚獣にステップを踏ませる。
すると腕輪が輝き、輪郭がブレ始める。
跳ね踊るような綾香の召喚獣の姿はみるみる増えていき、十三体にも増えて舞を舞う。
「大盤振る舞い♪　いっくよーっ☆」
綾香の楽しそうな声とともに、二刀を構えた召喚獣が切りかかっていく。
それを見ていた翔子の目が、鋭く細まった。
「……“ブレイクダウン”」
その言霊に、翔子の召喚獣の腕輪が輝きを放つ。
次の瞬間。ガラスの砕ける音と共に綾香の召喚獣の分身たちが砕け散り、霞のごとく消え去ってしまった。
「え？　うそっ？！」
分身が消えたことに驚きつつも舞うように動きながら切りつける。

それを刀で受け、弾き飛ばす翔子の召喚獣。さらに返す刀で切りかかっていく。

「……私の召喚獣の特殊能力は、召喚獣の特殊能力を打ち消し、無効化する」

翔子が淡々と言葉を紡ぎ、綾香が顔をしかめた。

一気に決めるべく、能力を多用したため、点数が“３９２”まで下がっていた。

知らなかったとはいえ、点数を無駄に消費したことになる。

「なら！　ふつうに戦って勝つ！　あたしは最初っからクライマックスなんだからねっ！」

そこから流麗に二本の柳葉刀を振らせて、果敢に仕掛けていく。

翔子はその攻撃を見逃さないように見つめながら、召喚獣に捌かせる。

しかし悲しいかな、操作技術では綾香の方が上だった。

袈裟掛けに振り降ろされる刃を弾くと、すでに右から刃が迫り、体を引きながらそれをかわしたときにはすくい上げるように斬撃が飛んでくる。

それがかすめるのを構わず、次の一撃を刀で受け止める翔子の召喚獣。執念とも言うべき集中力で綾香の召喚獣の攻撃を、最低限のダメージで切り抜ける翔子の召喚獣。

これに対し、綾香は普段の余裕が保てなくなり始める。

その様子を見ていた明久は、言いしれようのない、漠然とした不安を感じていた。

点数も変動し、翔子が“２１１”、綾香が“３２３”にまで下がっていた。

そして異変が起こる。

袈裟掛けに切り込んだ柳葉刀を、翔子の召喚獣が体を逸らしてかわし、ついで横薙ぎに入る斬撃を、“あらかじめ知っていたかのよ

うに”刀で押さえ、片手で綾香の召喚獣を殴りつけた。
点数が十数点修正され、少しだけ後退させられる綾香の召喚獣。
そして……。

「……覚えた」

翔子の漏らしたその一言に、綾香と明久に戦慄が走った。
彼女は今、なんと言ったのか？
綾香はイヤな感覚を抱えつつ召喚獣に剣舞を舞わせる。

が。

その全てに翔子の召喚獣は対処して見せた。
まるで、“全て知っていた”かのように。
その状況に、明久は顔をゆがませる。
「これは……」
「どうした明久。まだ決着はつかないのか？」
明久の漏らした声に応じるように、声がかかる。
雄二だ。
「数学勝負なら夏目の方が点数が高いんだ。すぐに決着のはずだろ？　遊んでんのか？　あいつは」
試合内容を見ることもせず、ふてくされている雄二は半分寝る体勢で明久に言う。
そんな雄二の態度に、明久は苦しそうに顔を歪ませながら答えた。
「……もうすぐ決着だよ。綾香の……負けでね」
「……何だとっ！？」
綾香が勝つと思っていた雄二は、明久の言葉に慌てて跳ね起きた。
そして、見た。
戦う二人の召喚獣を。
ダメージを負いつつも綾香の召喚獣の攻撃を完璧に捌き、カウン

ターを決める翔子の召喚獣。
普段の流麗さが見る影もないほどズタボロにされた綾香の召喚獣。
点数は、“１８３”と“３４”
もはや、一撃で決すると言える。
「あ、明久……いったい何があった」
呆然としながら明久に訊ねる雄二。
「霧島さんの腕輪は特殊能力を封じる能力だったんだ。けど、それだけなら綾香は負けなかったと思う」
「……もったいつけんな」
戦いから目を離さず、ふたりは言葉を交わす。
「……すごいね霧島さんは。点数でも技術でもなく、自分の力で綾香に勝とうとしてる」
「だから何があった！」
「……正確なことはわからない。けど、霧島さんはこう言ったんだ『覚えた』って。たぶん綾香の攻撃パターンを全部覚えたんだと思う」
「……」
明久の言ったことが信じられず雄二は、ただただ呆然と見ることしかできない。
それはＦクラス全体にも言えた。
しかし、それを打ち砕く声が響いた。

「綾香あぁぁっっ！！　がんばれぇっ！！」

静まったクラスを打ち震わせるほどの声。
明久だ。

それにつられるようにFクラスから声が上がり始めた。
その声を背に受け。綾香の召喚獣が切り込んでいく！！

そして。

高橋教諭の宣言がAクラスの教室に響きわたった。

「勝負あり！　勝者Aクラス！」

見れば、翔子の召喚獣の刀に貫かれた綾香の召喚獣が消えるところだった。
綾香は呆然と立ち尽くし、翔子は決した勝負に興味は無いとばかりにきびすを返す。
戻り際に、Aクラス生徒たちの祝福を受けつつ、奥の自席へ戻る。
そこへ優子がやってきた。
「代表！　無茶しないで下さい！」
「……ごめん優子。少し疲れた。後はお願い……」
「えっ？　代表？」
疲労の色も濃く、リクライニングシートを倒す翔子。
実際は、ギリギリの勝負であったことに気づいていた者はどれほど居ただろうか？
翔子は極限まで高めた集中力と注意力を以て、薄氷を割らぬよう

神経を磨耗させつつ戦っていたのだ。その疲労のほどは尋常ではなかった。

一方、立ち尽くしていた綾香は、軽く息を吐いて天井を見る。

数秒、そうしていたかと思うと、くるりと皆の方へ向き直った。

「てへ♪　負けちった☆」

小首を傾げ、おどけるように笑いながら舌を出す綾香。その姿にFクラス一同が安堵の息を吐く。

リズムを取るように皆の方へ戻る綾香に、クラスの面々がねぎらいの声をかけていく。

それに応えながら足を進め、雄二と目があった。

「わーるい雄二、負けちゃったわ☆」

「……勝手なことをするからだ」

ばつが悪そうに笑いながら言う綾香。しかし、雄二にはその向こうに隠れた顔が見えた気がした。

そして綾香は奥に佇む明久の前へと足を進める。

「お疲れさま、綾香」

「あっはっは♪　負けちゃったよー♪」

ねぎらう明久に、綾香はおどけてみせた。

「……」

明久は何も言わずに腕を広げた。

それを見た瞬間、綾香の視界が歪み、そのまま彼の胸に倒れ込むように顔を押し付け、両手を彼の背中に回す。　その手は、彼女の肢体と同じように震えながら彼の制服を掴み、白くなるほど握りしめられていた。

明久は、震える彼女の背中を、優しく二度叩いた。

「では、次の方。前へ出て下さい」
激闘の余韻など関係無いとばかりに、高橋教諭が告げる。
その声に明久が顔を上げた。
「雄二。次はどうするの？」
いまだに明久の胸から離れない綾香の背をさすりつつ聞く明久。
それに対して雄二は渋面を作った。
「……翔子が戦っちまった以上もともとのプランは使えねえか……」
ならばどうするか？　瞑目し、自問する雄二。
「……姫路」
「！　はいっ！」
目を開き、瑞希へと声をかける雄二。
瑞希は驚くように身を跳ねさせたが、しっかりと返事をした。
「夏目の敵討ちだ。やれるな？」
「はい！」
決意と意志の強さを、声と瞳の輝きに乗せ、瑞希は力強く返事をすると、足を踏み出した。
それを見て、明久は綾香の背中に声をかけた。
「綾香、姫路さんが出るみたいだよ？」
その言葉に、綾香の震えがピタリと止んだ。
そのまま明久の胸に、グリグリ～っとばかりに顔をこすりつけてから身を起こし、ステージを見やる。
そして、軽く息を吸った。
「瑞希ぃ～～っ！！」

大きな声に周囲の視線が集まるが、綾香には関係ない。
瑞希が振り返り、二人の蒼い眼差しが絡み合った。

「頑張れぇ～～っ！！」

綾香の応援に、瑞希の顔が満面の笑みとなる。

「ハイッ！！」

普段の彼女からは信じられないほどの、大きく、ハッキリとした返事。
それを受けた綾香も満面の笑みを浮かべ、右手でVサインを突き出す。すると、瑞希もそれに倣うようにVサインを右手で出した。
普段こんな事をするように見えない瑞希の行動に、明久と綾香を除いたFクラスの面々とAクラスの生徒は呆気にとられた。
「……随分余裕そうだね？　姫路さん」
掛けられた声に瑞希が振り向く。
そこに居たのは、メガネのブリッジを左手の中指で押さえながら前へ出てきた少年、久保利光。
知的かつ怜悧な眼差しで、冷ややかに瑞希を見る。
「……君みたいな才媛が、そんなくだらないパフォーマンスをするとはね」
心底ガッカリだと言わんばかりの表情を浮かべる利光。
しかし、瑞希は全く揺らがない。
「……くだらないなんて事はありません」
瑞希の言葉に、しかし、利光は鼻を鳴らすだけだ。
そうやってにらみ合うかのような二人を見て雄二は顔をしかめた。

「……やはり久保が出てきたか。姫路と久保は総合科目で２０点程しか差がなかったはず。ここが一番の心配どころなんだが……」
「大丈夫だよ雄二」
「そうそう、だって瑞希だもん」
つぶやく雄二の隣に明久が歩み出ながら言う。その向こうで綾香も笑顔でうなずいていた。
中央では、高橋教諭に声をかけられ利光が総合科目を宣言し、フィールドが展開されていた。
その様子を見ながら雄二は口を開く。
「……随分自信たっぷりだが、根拠はあるのか？」
二人の余裕のある態度に雄二は不思議そうに訊ねる。
すると明久は一度雄二へ視線を転じてから小さく笑う。
「僕らの幼なじみは、努力家なんだよ雄二」
「確かに体は弱いけど、歩くことを止めたりなんてしないよ♪」
明久の言葉を受け、綾香も紡ぐ。
それに合わせるかのように、利光と瑞希が言霊を解放し、魔法陣を呼び出した。
そして顕現する黒衣に二丁大鎌を携えた利光の召喚獣。
それに相対したのは、白銀の鎧に大剣を構えた瑞希の召喚獣。
ついで双方の点数が表示された。
利光の召喚獣の頭上に“３９９７”が輝く。
それを見た双方の陣営から息が漏れた。
しかし、それを見てなお明久と綾香の態度は崩れない。
まさかと思い、今一度雄二が瑞希の方へ目をやる。
そこに表示された点数は……。
“４４０９”

それによって会場がどよめいた。

『な、なんだあの点数は……』

『学年主席に匹敵するじゃないか……』

『いつのまにこれほどの実力を……』

周囲の喧噪をよそに、瑞希の召喚獣が走る。袈裟掛けに振り降ろされた大剣を、利光の召喚獣が二本の大鎌で受け流そうとして弾かれる。

すかさず切り返された大剣が横薙ぎに利光の召喚獣に襲いかかり、あわてて後退した彼の使役獣の体を掠めた。

そのまま追撃しようと踏み込んだ瑞希の召喚獣へ、腕輪の輝きと共に黒い光が撃ち放たれる。が、それを、瑞希の召喚獣は易々と切り払った。

「ぐく……っ！　姫路さん、いつのまにそこまでの力をっ!?」

瑞希の気迫に気圧されるように利光がつぶやく。

その声に瑞希は口を開いた。

「……私はいつもダメダメでした。けど、そんな私にいつも笑顔をくれる人がいます！　どんな時でも、私の傍で笑ってくれる人たちがいます！　だから私は、どこまでも頑張れる！　立ち止まらずに歩いて行ける！」

そう言い放った瑞希の向こうに、優しげな緩い雰囲気の少年と、空のように蒼い瞳と輝く金髪の少女の姿。

耳を澄ませば、喧噪に混じった二人の声援だけが聞き取れた。

『頑張れーっ！　姫路さーん！』

『瑞希ぃっ！　勝てたらおっぱい揉んだげるからなあ！』

瑞希の足から力が抜けた。

「隙ありだよ姫路さん！」
そこめがけて、利光の召喚獣が突進し、鎌を振るう。
が、そこにはピンク髪の召喚獣の姿は無かった。
「なに……？！」
驚く利光。
天を舞い、大剣を振りかぶった彼女の召喚獣が、大上段からそれを振り降ろすのを見て、利光は召喚獣に受け止めさせんと大鎌を交差させる。
だが、バターにナイフを入れるよりたやすく、二丁大鎌もろとも両断される利光の召喚獣。

光となって消え去るそれを確認し、高橋教諭が宣言した。

『勝負有り！　勝者、Ｆクラス』

その言葉に、Ｆクラスから歓声が上がった。
そんな瑞希の勝利に飛び上がらんばかりに喜んだ綾香は、勢い余って明久に抱きつき、その頬に口づけた。

「みぃずきぃ～～☆」
戦い終わって、自陣に戻る瑞希の胸元へ、金色の塊が飛び込んだ。
「わひゃう?!　あ、綾香ちゃん!?　もう……」
じゃれるような彼女に驚きつつも、苦笑いを浮かべる瑞希。
そして向こうでは明久が、血涙流すＦＦ団に包囲されていた。

『てめえよくも綾香ちゃんにほっぺチューなんてして貰いやがって』
『……万死に値する！』
『あんな美人の従姉にベタベタしてもらうなんて羨ましすぎるぜ』
『俺の従兄弟なんざ全員むさいおっさんなんだぞっ!?』
『覚悟は出来とるのかのう』
『……やっぱり吉井はサンドバッグ確定よね♪』

「く……っ」
尋常ではない殺気にまみれた集団に囲まれ、さすがの明久も覚悟する。
と、そのとき。

『ふあぁぁぁんっ』

突如色っぽい悲鳴が上がり、秀吉と美波を除いたＦクラスの“全員”が素早くそちらへ振り向いた。
するとそこには……。

『うりうりうり～♪』
『やぁん、あ、綾香ちゃ……やめ……』

『うわ……瑞希、“また”大っきくなってない？』
『だ、だめです……綾香ちゃ……』

瑞希のたわわに実っためろんを揉みしだく綾香の姿があった。
『眼福じゃ～～～～っ！？（ぶしゃあぁぁっ）』
鼻血を吹き出し轟沈するＦＦＦ団員。
やわやわと変形するスーパーボリュームに打ちひしがれる美波。
しかも……。

『ほーら、ホック外しちゃうよ～～☆』
『あ……いや……だめ……』

などと聞こえてきたため、ＦもＡも男子はほとんど中腰状態に……。

『外れるよ～？　外れちゃうよ～♪』
『だ、だめ……だめだめだめ……』

すでにガン見状態の男子勢に、女子の白い視線が突き刺さるが、気にするものは居ない。

『ほ～ら、ほ～ら……』
『あ、いや、だめ……』

皆が固唾を飲んで見守る中、二人の美少女はクライマックスへと上り詰める。

『……えい♪』
と、綾香が楽しそうに声を出した瞬間。
『らめ～～～～っ！？！？』

という瑞希の悲鳴のような声とともに、瑞希の制服を盛り上げている双丘が、弾けるように膨らみ、ボリュームアップ。
それを見ていた男子のほとんどが血の海に沈んだ。
「綾香ってば……」
「何やってんだあいつは……」
その様子に雄二は赤くなってそっぽを向き、明久は頭を抱える。
一方Ａクラス側では。
「夏目さん、また馬鹿なことしてっ！！」
「Ｆクラスは楽しそうだねえ」
騒ぎを見ていた優子は柳眉を逆立て、愛子は楽しそうに笑う。
と、二人は背後から圧力を感じた。
ガシイッとばかりに優子の肩に手が置かれ、真っ黒いモノをまとった翔子が顔を出した。
「……あんな手で雄二を誘惑するなんて……優子」
「な、なに？　だ、代表」
翔子の迫力に涙目になりながらも応じる優子。
「……揉んで」
「へ？」
翔子の言葉に、優子は目が点になる。
「……私の胸も揉みしだいて優子」
「代表っ？！　しっかりして代表っ！！」
翔子の突拍子もない言葉に、Ａクラス生徒も顔が、代表が壊れたーっ？！　っとなった。
そんなふうに双方に混乱をもたらした二人はというと、未だ中央付近にいた。
「はあ……はあ……」
羞恥のあまり、荒く息を吐く瑞希。それを見ていた綾香は何か別のスイッチが入ったらしく蒼い瞳を輝かせる。
「むは～～☆　みぃずぅきかぁわぁい～い～～♪　第二ラウンド、直揉みいってみよ……」

興奮した綾香が両手をワニワニ動かしながらさらなるいたずらを仕掛けようとした瞬間。

硬い石に金属製のハンマーを振り降ろしたような重い音が響き渡った。

「ぬおおおぉぉぉぉーーーーっ?!?!」

およそ年頃の娘らしくない奇矯な声を上げ、頭を押さえながら床を転がり回る綾香。

それを見下ろす黒い影。

浅黒い肌に、野太い眉。

身を包むスーツを、内側から破らんかのように盛り上げる筋肉。

暑苦しくも漢らしい鬼神。

鬼の生活指導担当、鉄人こと西村宗一教諭が仁王立ちしていた。

「高橋先生から騒ぎを治めてほしいと連絡を受けてきてみれば、なにをバカなことをやっとるかっ!? このバカもんがっ!!」

怒鳴られ、しゅーんとなりながら痛む頭を押さえつつ西村を見上げる綾香。

「高橋先生、少しここを頼みます。夏目! お前は説教だ! 来い!」

「ゲッ?!」

あわてて逃げ出す綾香。しかしあっさり首根っこを押さえられて捕まってしまう。

「わわっ?! アッキー助け……」

鉄人に引きずられ、明久に助けを求めようとする綾香。

しかし、この時ばかりは自分に甘いはずの従弟は首を振った。

「……綾香はちょっと反省した方が良いと思う」

「あ、明久っ?! 裏切り者おぉ〜〜っ!!」

助けてくれないことにショックを受けつつ、綾香は教室の外まで引っ張っていかれた。

混沌と化したＡクラスの教室の片づけが終わり、ようやく戦争が再開される。

その片づけの最中、西村教諭にこってり絞られ、悄然とした綾香は、首から『私はハレンチなイタズラをした大馬鹿者です』と書かれたプレートを下げ、床に正座させられていた。

「うぅ……、ちょっと瑞希の成長具合確かめただけなのに……」

しかし、まだ懲りないのかぷちぷち文句を垂れている。

それを聞いてため息をつく明久。

「……ぜんぜん懲りてないみたいだね」

「当たり前☆」

キリッとした顔で答える綾香に、明久は頭を抱えたくなった。

「……それは一度置いておこう。雄二、次はどうするの？」

とりあえず反省してないっぽい綾香を捨て置き（「放置とか酷いよっ？！　アッキーっ！？」）雄二に次の手を聞く明久。

すでに頭を切り替えた雄二は、顎に手を当てつつ思案する。

「順当に行けば科目も選択できるからな。ムッツリーニを出したいところだが……」

「何か問題が……？」

渋面を作りながら答える雄二に、明久は訝しげになりながら訊ねる。すると、雄二は親指でＦクラス陣営の奥を指さした。

『ムッツリーニ！　目を覚ますのじゃっ！』

『輸血パックが足りない！』

『ＡＥＤはどうしたっ？！』

『いま、持ってきた！』

『還ってこい……ムッツリーニっっ！！』

叫びとともに電撃が走り、康太の体が跳ねる。
「……とまあ、まだ蘇生作業中でな。目を覚ましてすぐに勝負では実力も出し切れんかもしれん」
「……ムッツリーニ、鼻血の出しすぎで黄泉への扉を開くなんて……」
クラスメイトたちが施す蘇生作業を見て、明久は微妙な表情でつぶやいた。
「そんなわけでな。悩みどころというわけだ」
そういって肩をすくめる雄二。
すると、それを見計らったように高橋教諭の声が響いた。
『騒ぎはありましたがそろそろ再開するとしましょう』
その宣言に、双方顔を引き締めた。
『双方三戦目の代表者の方、前へとお願いします』
そううながされ、両クラスに緊張が走った。
「……仕方ねえ。ここは明久に……」

『……待て』

雄二が断を下そうとした時、Fクラスの奥から声が響いた。
康太だ。
未だ顔色は悪く、足下にもくるものがあるらしい彼だが、声の張りは本物だ。
「ムッツリーニ……いけるのか？」
「……無論」
少し心配げに訊ねる雄二に、康太はしっかり頷いてみせた。
それを見て雄二も頷く。
それを皮切りに歩き出す康太。
「頼んだぞムッツリーニ」
雄二からかけられた言葉に、片手を振って応える康太。

そんな彼の背中に、彼女の声が投げかけられた。
綾香だ。
「康太ー？　勝てたら例の撮影会の話、協力したげるよ♪」
そんな綾香の言葉に、康太の目が輝きを放つ。
「……任せておけ。俺を誰だと思っている？」
生気を甦らせ、康太が力強く言い放った。
綾香の一言で血色も良くなり、足取りも力強くなる。
エロスが絡んだときの康太は、まさに無双の力を発揮するといえよう。
そうして進み出てみると、目の前に黄緑髪の少女が姿を現した。
体形はスレンダー。綺麗に絞られた肢体はバランスがとれていて美しい。
そして浮かべているのは、綾香が良くやる小悪魔スマイル。
康太は内心警戒しつつ、名乗りを上げる
「二年Ｆクラス、土屋康太」
これに対し、少女は軽くウインクしながら応えた。
「ボクは工藤愛子。一年の終わり頃、転校してきました♪　よろしくね？　土屋康太君♪」
そう言ってニコニコ笑う愛子。
『選択科目はどうしますか？』
「……保健体育」
高橋教諭の問いかけに、すかさず康太が答える。
しかし、愛子はあわてることもなく余裕の態度だ。
「ふうん、随分保健体育に自信があるみたいだね？　康太君」
妖しく笑う愛子に、康太は警戒を強めた。
「でも、ボクも得意なんだよね、保健体育」
笑みが深まる。
「……実技でね♪」
ウインクしながら投げキッス。
それだけで康太はボディーブロー受けたような衝撃を受け、片膝

を着き、鼻血を吹く。
その様子に愛子は満足げに笑った。
「ふふふ♪　良ければレクチャーしてあげるよ？　康太君♪」
「……？！（ぶしゃあぁぁっ）」
愛子の提案に、康太はフックを顔面に受けたような衝撃を受けた。
もはやグロッキー状態だ。
そして、ツイッと視線が転じ、明久の顔をとらえた。
「そっちの君もどうかな？　勉強苦手そうだし、ボクが教えてあげるよ、保健体育。……実技でね」
そう言いながら片目をつむる愛子。
だが明久は困ったように頬を掻く。
そして彼が答えるより早く、割り込む声があった。
「よ、吉井には必要ないわよ！　そんな機会、永遠に来ないから！」
そう言って愛子を牽制するのは美波だ。
そしてもう一人……。
「そうそう、アッキーモテないしなー。教えたって無駄になるだけだよ？　だから必要無ーし」
金髪碧眼の少女の口からも、そんな言葉が飛び出した。

綾香のその言葉に明久が軽く落ち込み、瑞希が苦笑いする。
それで雄二はピンときた。
考えてみれば当たり前である。四六時中金髪美人の従姉が明久の横に居るのだ、よほどの事がなければ明久にアタックする女子は居ないだろう。
逆に明久がほかの女子にモーションをかけたとしても、普段からあれだけ目立つ綾香と一緒にいることが多いのだから本気に取ってもらえることは無いだろう。
また、本気と受け取ったとしても、綾香と明久と並べられて平然と出来る女子はそうは居ないはずだ。
つまり明久がモテないのは綾香が常に一緒にいるからと言える。

しかも、瑞希の態度から察するに綾香も明久もそのことにまるで気づいていないようだ。
「……島田も大変だな……」
「え？　どうしたの雄二？」
ぽつりと漏らした言葉に明久が反応するが、雄二は、何でもない。と首を振って中央へ目をやった。
『そろそろ召喚して下さい』
少し焦れたような高橋教諭にうながされ、二人は頷く。
「はーい。試獣召喚（サーモン）っと」
「……試獣召喚（サモン）」
二人の言霊が重なり、魔法陣が展開する。
そこに顕現するは、セーラー服に巨大な斧を持った愛子の召喚獣と、黒装束に身を包み、二本の小太刀を携えた康太の召喚獣。
そして愛子の保健体育の点数が“４４６”と表示されると同時に召喚獣に装備された黄金の腕輪が光輝いた。

それと同時に轟音が鳴り響き、天より稲妻が降り注ぎ、愛子の召喚獣が持つ斧に直撃する！

「実践派と理論派、どちらが強いか見せてあげる！」

愛子の声に応え、彼女の召喚獣が雷撃をまとった巨斧を頭上に掲げながら飛び出した。

「それじゃあバイバイっ！　康太君っ！！」

あり得ない速度で突進し、雷光をまとわりつかせた斧を豪腕で振るう愛子の召喚獣。

その電光石火の一撃に康太は微動だにする事が出来ず、わずかに口元が動かせたのみ。彼の召喚獣は攻撃を避けることも出来ずに脳天から唐竹割りにされてしまう。

康太の敗北。

その事実に愛子が笑みを深くした瞬間、康太の召喚獣の姿が揺らぎ、霞のように消えてしまった。

「え？　な、なにがっ？！」

勝利を確信した瞬間に起きた異変に、愛子は混乱する。

そこで康太が口を開いた。

「……どこを見ている」

その一言に我に返った愛子は、康太の召喚獣が、自分の召喚獣のはるか後方で、腕を組んだままたたずんでいることに気づいた。

「くっ？！　逃げ足は早いようだけどっ！！」

いつの間にか逃げられていたことに歯噛みしつつ、召喚獣を振り返らせて追撃させようとする愛子。

だが、康太は静かにたたずんだまま告げる。

「……勝負はもう着いている」

「な、なにを……」

言ってるんだ？　と続けようとした愛子の目の前で、康太の保健体育の点数が表示された。

“572”

その数字が見えた瞬間。
愛子の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れつつ光の粒子に還った。
その点数に、Aクラス、Fクラスを問わずどよめきがその場を支配した。
「Bクラス戦の時辺りは出来がイマイチだったらしいからな」
「すごいねムッツリーニ……」
つぶやくような雄二の言葉に明久はひきつったような笑みを浮かべた。
その向こうで綾香が蒼い瞳を輝かせた。
『いよっ♪　さっすがむっつりスケベ☆』
「……そんな事実は無い（ブンブンブン）」
綾香のツッコミを否定する康太の向こうで、愛子がショックのあまり、床に膝を着く。
「そ、そんな……！　まさか、このボクが……一瞬でなんて……」
ただ呆然とつぶやく愛子。
『これで……一対二ですね』
まさかの連敗に高橋教諭の表情が揺らぐ。

『……次の方、お願いします』
軽く動揺したことを取り繕うように言う高橋教諭。
その言葉に雄二は渋面を作った。
「雄二、次だってさ」
「……分かってる」
明久に言われ、返事をするもなかなか動かない。
単純に言えば手札が無いのだ。
Ａクラスに対抗できる札は三枚。
瑞希、康太、綾香の三人だ。
これに雄二と翔子が対決する一手が有ればこそ勝利は盤石なはずだった。
しかしフタを開けてみれば、初動から綾香と翔子に作戦をつぶされた形だ。
残されたカードはワイルドカード一枚。
なるべく有利な形で使いたい。
「……捨てるか？」
つぶやき、横目でクラスの連中を見やる。
秀吉や美波などが視界に入るものの、今使う札としては心許ない。
「……しゃーねーか」
軽く嘆息し、頭を掻く雄二。
片手をズボンに突っ込んだまま一歩踏み出す。
「……雄二？」
その行動に、明久が訝しげになりながら声をかける。
が、雄二は頭を掻いていた手を振るだけで応え、歩きだした。
両手ともズボンに突っ込み、目を閉じながらも不敵に笑い。
悪童らしく、堂々と中央へ進み出る。

「次の相手はこの俺だ」
右の親指を立てて己を指す。ふてぶてしい態度で笑い、Ａクラスを威圧する雄二。
その姿に、Ａクラス、Ｆクラスともにどよめいた。
「向こうは代表を出してきましたね」
その様子に、優子がつぶやき、翔子がうなずく。
「……けど、これは自分自身を捨て駒にした雄二の作戦。恐らく最後の一人に賭けるために、科目選択をＡクラスに振るはず」
「じゃあ……」
「……優子は最後に回って？　それでこの対戦は……」
そう言いつつ周りを見回す翔子。その表情はわずかに曇っていた。
「……代表、私が出ます」
そんな翔子の心情をおもんばかってか、ボブカットにメガネの少女、佐藤美穂が名乗り出る。
Ａクラスでも理数系でトップレベルの点数を保持する理系少女だ。
「……美穂、ごめんなさい」
「いえ、構いませんよ代表。それに、相手は元神童。なにか策があるのかもしれません」
申し訳なさそうな翔子に笑ってみせる美穂。
そのまま歩きだし、中央へ進む。
「……二年Ａクラス、佐藤美穂です」
雄二と相対し、名乗りを上げる美穂。
そんな彼女を見て、雄二は口の端を持ち上げた。
「……いいのか？　あんたで」
「……あなた“ごとき”、私で十分ですよ、元神童さん」
雄二の口撃を、あっさり切り返す美穂。
そのやりとりに、両陣営ともに固唾を飲んで見守る。
「……科目は何にするんですか？　選んで構いませんよ」
美穂に言われ、雄二は眉を跳ねさせた。
「……いや、今回は譲ってやるよ。もともと翔子とやるために用意

した策もあるしな」
雄二の言い放った言葉に、Aクラスがざわめく。
「……そんなハッタリが通じるとでも？」
どこか探るような美穂の声。しかし、雄二は余裕を崩さない。
「……元々俺と翔子の一騎打ちだけで決めるはずだったんだ。策くらい有るさ。科目の違いくらいじゃひっくり返せないような奴がな」
その高圧的な態度に、美穂が顔をしかめる。
「……なら、お望み通り選択権を使わせてもらいます。高橋先生、物理勝負でお願いします」
美穂の声に高橋教諭がうなずき、物理のフィールドが展開された。
すかさず召喚する美穂。
「試獣召喚（サモン）！」
その言霊に導かれ、二丁鎖鎌に軽装鎧を装備した美穂の召喚獣が顕現する。
それを見届けた雄二は軽く笑んだまま右手を突き出した。
「試獣召喚（サモン）！！」
力強く言霊を解放し、右手を握りしめる雄二。
解放された言の葉に応え、幾何学模様の魔法陣が展開し、白ランにメリケンサックを装備した雄二の召喚獣が顕現した。
にらみ合う二人と二匹。
そして、高橋教諭が腕を振りあげた。
「……始めっ！」
よく通る声に応えるように、二匹の使役獣が飛び出した。

「ウラァッ！」
勢い込んだ声とともに、メリケンサックをつけた召喚獣の拳が繰り出される。
それを鎖鎌で受けさせる美穂。そのまま弾いた時には次の拳が迫り、防御を強いられる。
次から次へと拳が繰り出され、防戦一方となる美穂。
メリケンサックという、最軽量の武器は、攻撃のサイクルも早い。
それが十二分に発揮されている。
しかしながら、一方で雄二にも余裕はない。
双方の点数は、美穂が“３８９”。対して雄二は“９８”。
その差は四倍以上。
下手を打てば、最初の一合で勝負が着いていただろう。
雄二が懸念していたのは、まさにそこだ。
だからこそ、相手を挑発し、隠した札をチラつかせた。
これがＦクラスの連中や、短慮なタイプの相手だったなら、本当に一撃でケリが付いていただろう。
だが、落ち着いていてまじめなＡクラスの人間相手なら話は別だ。
警戒し、見に回って慎重に対処する可能性が高い。
雄二はそこを突いたのだ。
「オラオラオラッ！！」
拳の弾幕によって面制圧する雄二。
美穂はそれを防御していく。
被ダメージが小さいとはいえ、これだけのラッシュをもろに喰らえばバカにならないダメージとなる。チリも積もれば何とやらだ。
だが、美穂自身に焦りはない。冷静に雄二の攻め手を分析する。
点数もいくらか削られてはいるものの、致命的なほどではない。

彼女は、いまだに雄二の策を警戒していた。

「なあなあアッキー」

正座しながら中央の戦いを蒼い瞳で眺めつつ、ボリュームのある金髪の少女、夏目綾香が従弟の明久に声をかける。

「……なに？　綾香」

対して明久も、雄二の戦いから目を離すことなく応じる。

そんな彼へ、ちらりと蒼い視線を転じる。

「アホ雄二、どうするつもりだろうな？」

「……勝てる可能性が低いことは、雄二自身わかってるんじゃないかな」

「だよなあ……。むしろ勝てる要素あんの？　って感じなんだけど……」

明久の答えに、綾香は首を傾げる。

そんな彼女に明久もうなずく。

「そうだね。操作技術はどっこいで点数は四倍も差がある。ふつうに考えれば無理だしね」

言いながらも二人の様子に表情が引き締まる。

「……雄二が勝つとしたら、あいつの口車か……」

「リアルファイトの実戦経験」

明久の言葉に、綾香が続け、明久がうなずく。

その時、試合が動いた。

血しぶきが舞い、白ランの召喚獣の肩口が裂けた。

防御に集中していた美穂が、使役獣に攻撃を命じたからだ。

そのメガネの向こうの眼差しが、鋭い光を放つ。
「……何かあるかと思い、様子を見ていましたが、仕掛けるのはラッシュだけ。策など何もない、ハッタリだったというわけですか」
「チ、」
美穂の指摘に軽く舌打ち。その言葉を肯定する雄二。
「……ならば、そうそうに決着をつけます！」
美穂の声に応え、召喚獣が二本の鎖鎌を構えた。
それを見た雄二は、右手で自分の顔を鷲掴みにするかのように覆い、指の間から目をのぞかせる。
「行けっ！」
声を背に受け、突進する美穂の召喚獣。
鋭く、早いその攻撃に、皆が息をのむ。
そして、手のひらで隠された雄二の口元がゆがんだ。
次の瞬間、雄二の召喚獣が美穂の召喚獣の攻撃を空かし、その腹に一撃を打ち込んだ。
カウンター気味に入ったそれにより、数十点のダメージが入る。
「な……」
思わず絶句する美穂。それを見て雄二はほくそ笑んだ。
「悪いな。あんたがこっちのブラフを見破るところまで織り込み済みだったんだよ」
雄二のその言葉に美穂が歯噛みする。
その一瞬の隙をついて、メリケンサックが美穂の召喚獣の顔面を捉え、大きく吹き飛ばした。
「く！？」
あわてて召喚獣に体勢を整えさせる美穂。そこへ、雄二の追撃が決まる。
対して、お代えしとばかりに切りかからせる美穂。
だが、その攻撃が空を切る。
「当たらないっ？！」
驚く美穂に、雄二が笑みを深くする。

美穂の召喚獣は、点数に沿った素早い攻撃を繰り出している。しかし、雄二の召喚獣はそれをわかっているかのように、のらりくらりと避けてみせる。

「な、なぜ当たらないのっ？！」

思わず声を上げる美穂。その様子に雄二は笑いがこみ上げるのを止められなかった。

「やるじゃない、アホ雄二のくせに」

感心したように言う綾香。明久もそれに同意するようにうなずいて口を開いた。

「うまくやってるよね。召喚獣ではなくて、佐藤さんの挙動を注視してる。彼女は無意識に召喚獣が攻撃する場所を見てしまっているから、雄二には攻撃がどこへくるのか丸分かりだろうね」

「……けどさあアッキー。雄二の奴」

「うん。明らかに調子に乗り始めてるよね……。ああなるとたいていポカをやらかすからなあ……雄二は」

綾香の不安そうなつぶやきにうなずく明久。そして自分も不安を吐露する。

『……大丈夫かなあ』

二人の口から、異口同音に漏れ出る言葉。

しかし、そんなことはつゆ知らず、雄二の召喚獣は美穂の召喚獣にカウンターを決めていく。

それがおもしろいように決まるため、雄二のテンションも上がって行った。

「このまま押し切ってやるぜ！」

美穂の点数は“１１３”、雄二は“７２”。
ラッシュを掛け、勝負を着けるべく殴りかかる雄二の召喚獣。
それに対して美穂は鎖鎌を投擲して牽制する。

だが、雄二にはその軌跡が見えていた。それを避わして肉薄していく雄二の召喚獣。
「これで決まりだ！」
召喚獣に拳を振りかぶらせ、勝利を確信する。

かれは失念していた。

美穂の召喚獣の武器がなんなのかを。

その特異な形状を。

振りかぶった拳が振り降ろされた瞬間、美穂の口元に笑みが浮かんだ。
そして、“繋がった鎖によって引き戻された”鎖鎌の刃が、雄二の召喚獣の首に突き刺さった。その一撃は、致命傷。
雄二は、ただただ呆然と己の召喚獣が消えゆく姿を見送ることしかできなかった。

だい☆よんじゅうはちもんなのら～。（後書き）

☆お知らせ☆

いつも『バカとテストと召喚獣　～蒼い瞳の従姉～』をお読みいただき、まことにありがとうございます♪

先日みなさんにうかがいました、本作の連載継続に関するご意見を検討し、継続していくことにしました♪

これからも『バカとテストと召喚獣　～蒼い瞳の従姉～』をよろしくお願いします♪

『勝負有り、勝者Ａクラス』

高橋教諭の声が響き、Ａクラスから安堵の吐息が漏れる。
首の皮一枚で助かったようなものだからだ。
美穂も小さく息を吐き、ギリギリの攻防を制したことに安堵していた。
そんな彼女が自陣営に戻ると、少しきつい感じの気の強そうな少女が声をかけてきた。
「お疲れさま美穂。けど、もう少し余裕をもって勝って欲しかったわね」
ねぎらいながらもたしなめるような調子の優子に、美穂は顔をしかめる。
「……軽く言ってくれますね？　優子。そんな簡単なものじゃありませんよ召喚獣戦闘は。もっと奥の深い……」
「点数の高さが召喚獣の強さ。当たり前の話でしょ。なら、あたし達Ａクラスは最強であり、そう振る舞わなければならないのよ」
美穂の話を遮りながら言う優子。
そも、Ａクラスは、代表の翔子がリーダー向きではないため、女子では二番手でもある優子がリーダーシップをとることが多い。
そんな彼女が標榜するのが、文月学園の品格であり、Ａクラスはすべてにおいて模範足るべし。
という考え方だ。
美穂にしてみれば、少し着いていけない部分もあるのか、彼女の言いように、顔をしかめる。
「まあまあ二人とも落ち着きなよ。せっかく佐藤さんが勝ったんだから。ね♪　優子」

そう言いながら割って入るのは愛子だ。発言に突拍子もない部分があるが、人の心の機微に聡い彼女は、Aクラスのムードメーカーであり、調整役でもある。

そんな彼女に言われ、優子は口が過ぎたことに気づいた。

「……それもそうね。悪かったわね美穂。ご苦労様」

軽く頭を下げながら言う優子。それに対して美穂も、いえ。と言いながら軽く頭を下げた。

そして、優子は顔を上げるとFクラスを見やる。

「なんにしても次で決着ね。どうせFクラスに成績の良い人間なんてこれ以上いないのだから、勝ちは決まったようなものだけど、やるからには全力でやらせてもらうわ」

それだけ言うと、彼女は中央へ足を向けた。

一方Fクラス。

対決が終わった雄二は、ふてくされるように両手をズボンのポケットに突っ込んだまま自陣営へと足を進めた。

Fクラスに漂うのは微妙感。

翔子を倒すといきまいていながら美穂に負けたのだ。

失望感は大きい。　だが雄二にはそんなクラスの空気も関係なかった。

そのまま歩き、明久の元までやってくると、おもむろに口を開いた。

「……さて、次の戦いに出るのは、明久、お前だ」

何でもないように言ってくる雄二に、明久は目を丸くした。

「えええぇっ？！　僕なのっ？！」

「そうだ。お前はうちのクラスのワイルドカードだ。姫路や秀吉、ムッツリーニのように、お前にはお前の秀でたところがあると俺は

思っている。そしてそれを駆使すれば、Ａクラスにだって負けない力となるはずだ」

少し熱っぽく語る雄二に、明久は照れくさそうに頬を掻く。

「……なーんか、雄二にそうやって持ち上げられるのって、裏がありそうで怖いよね」

苦笑いしながら言う明久。

そう言われて雄二も苦笑する。

「……そうだな。だが、本当にそう思ってるんだ」

男二人で、くつくつと笑う。

そして雄二は表情を引き締めると頭を下げた。

「……頼む、勝ってくれ明久」

あのプライドの高い雄二が頭を下げる。そのことに明久は驚きを禁じ得ない。

「……頭を上げてよ雄二。確約は出来ないけど、やれるだけやってみるからさ」

発端は僕だしね。と、笑う明久。

雄二も顔を上げニヤリと笑い、右の拳を持ち上げた。

それに自分の拳を打ち合わせる明久。

「任せたぞ、明久！」

「任されたよ、雄二」

言葉を交わし、明久は歩き出す。

「アッキー！」

不意に、金髪の従姉に呼び止められた。

蒼い眼差しが、明久を包み、彼女がふわりと笑う。

そして、花の蕾のような唇が開いた。

「……勝てよ、明久。勝ったらハグしたげるから♪」

笑顔とともに送られたエールに、秀吉達ＦＦＦ団がいきり立つ。

すると綾香が視線をそちらに流した。

「……あたし、クラスメイトを応援できないような人は嫌いだな」

その一言で、風向きは変わった。

『頑張るのじゃぞ？　明久！』
『負けんじゃねーぞ吉井！』
『そうだぜ！　未来の親類に恥掻かせないでくれよ！』
『ふれー、ふれー、よ・し・い！！』
『……とりあえず頑張れ』

手のひらを返し、次々に明久を応援し始めるFクラス。
その様子に苦笑いを浮かべつつ、妙なことを言った奴の顔を記憶しておく。
彼らの声を背に受けた明久は、前へと一歩踏み出した。

文月学園二年Ａクラス。
高級ホテルのロビーとみまごうかのような豪華設備の教室の真ん中で、一組の男女が向き合っていた。
かたやＡクラス。クラスを代表する真面目な優等生、木下優子。
かたやＦクラス。学園最低の成績を持つ観察処分者、吉井明久。
互いのクラスの命運を背負い、二人は対峙している。
と、明久が不思議そうな顔になった。
「……秀吉？」
そのつぶやきが聞こえたらしい優子は、嫌そうになる。
「違うわよ。あたしは木下優子。秀吉は、あたしの双子の弟よ」
うんざりするように答える優子。その様子に明久が、おや？　となった。
それを気にすること無く、彼女はため息をつく。
「はあ……」
「どうしたの？　木下さん」
その様子に明久が声をかけた。
「……いえ、大事な大トリに出てくるのが観察処分者の吉井君だとは思わなくてね。あなたとあたしじゃあ点差が有りすぎて勝負にならないでしょ？　Ｆクラスは勝つ気が無いのかしら？」
「……」　小馬鹿にしたように答える優子に、明久はわずかに顔をしかめた。
「それと君、いつも夏目さんと一緒にいる子でしょ？」
「……？　綾香のこと？　確かに親戚だし、よく一緒にいるかもしれないけど？」
いきなり話が飛んだ気がして戸惑う明久。
しかし優子は気にした様子もない。
「ふふ、お似合いじゃない？　ちゃらんぽらんで不真面目なあんな

子と学園最低の観察処分者。Ｆクラスらしい組み合わせね」
「……」
優子の言葉に明久の表情が固まったが、彼女は気づかない。
「あんな外見だけでちやほやされて、点数が穫れるからってなんの努力もしないような子にＡクラスの設備なんて必要ないでしょう？　猫に小判でしょうしね。いつもいつもふざけた言動で騒ぎばかり起こして、悪目立ちする。ああいう子が学園の品位を落とすのよ。まったく困ったものだわ」
強い口調で言い切る優子。
すると、それまで黙って聞いていた明久が口を開いた。
「……綾香は、不真面目なんかじゃないよ？」
「……はあ？　あの子のどこが真面目だというのよ？　馬鹿馬鹿しい。さっさと始めましょう。こんな結果の分かりきった戦い、時間の無駄よ」
明久の言葉に、優子は呆れたように言う。
それを見た明久は悲しむような顔になった。そんな明久を見た優子は、バカにされたとでも受け取ったのか顔を険しくする。
「……なによその顔は。あたしをバカにする気？　Ｆクラスの、それも観察処分者のあなたが！」
いきり立つ優子だが、明久は答えない。その態度に優子は苛立ちを募らせる。
「……早く科目を選びなさい。どんな科目でも構わないわ。実力の違いを思い知らせてあげるわよ」
「それじゃあ数学で」
優子に促され科目を選ぶ明久。そしてフィールドが形成されるのと同時に優子が口を開いた。
「……試獣召喚（サモン）」
彼女の口から紡がれた言霊に従い、魔法陣が門を開く。
そこに顕現したのは、瑞希のような西洋鎧に、ランスと盾を携えた、ディフォルメ優子だ。

それを見て明久も言霊を解放する。
「試獣召喚（サモン）」
力ある言葉に導かれ、魔法陣が展開し、学ランに肩当てと籠手を装備し、木刀を担いだ明久の召喚獣が姿を現した。
それを見て優子がせせら笑う。
「弱そうな召喚獣ねえ？　本当に戦えるのかしら？」
そして、二人の点数が表示される。
優子は“３６２”。
明久は“１０４”。
その差は三倍以上。
「どうかしら？　これがＡクラスの点数、あたしの努力の成果よ。夏目さんのようなたまたま穫れる点数じゃなくてね」
己の点数を誇るように言い放つ優子。しかし、明久の反応は薄い。
「……どうでも良いよ。始めようか木下さん」
その態度が優子の神経を逆なでする。
「！　いいわよ、すぐに終わらせてあげるわ！」
言葉とともに、優子の召喚獣が突撃する。点数にふさわしい、鋭く、早い一撃。
それを明久の召喚獣は、ひょいっと避けた。
「なっ？！」
思わず声を上げる優子。その隙をついて、木刀が優子の召喚獣の頭を殴りつけた。与えたダメージは十数点。
「……やっぱりダメージが低いなあ」
無防備なところへの一撃だったはずだが、明久側の攻撃力の低さと、優子側の防御力の高さのせいか、あまり大きなダメージにはならない。
「く……っ！？」
優子はランスをなぎ払うように振り向き、明久の召喚獣をねらうが、すでに距離を取られていた。
それを見て奥歯を噛みしめる優子。

そのまま彼の召喚獣に向けてランスを連続で突き出した。
しかし、その全てを明久の召喚獣は余裕をもって避けてゆく。
「な、何で当たらないのよっ！？」
イラついたように声を上げる優子。対して明久は落ち着いて優子の召喚獣の攻撃を避け、カウンターを入れていく。
その一撃毎に、優子の召喚獣の点数か修正されていく。
「あ、あたしはエリートなのよっ！？　そ、それが……なんて無様な……」
ワケが分からないと言う風に声を上げつつ攻め手をゆるめない優子。だが、その穂先は明久の召喚獣を捉えることが出来ない。
嵐のように繰り出されるランスの連続突きを、まるで揺れる柳の枝のように避け続ける明久の召喚獣。
その要所要所で突き込まれる木刀は、的確に急所を捉えていく。
「ああもうっ！　ちゃんと動きなさいよっ！」
イライラが募り召喚獣に当たり散らすが、当然何の反応も返ることはない。そのことが、余計に腹立たしい。
「こんのっ！！」
なりふり構わずランスを振り回す優子の召喚獣。
その時。

『なにやってるんです優子！　もっと相手をよく見てっ！』

大きな声に、優子は振り向いた。
それは美穂の声。両の手を口元に添えて、メガホンのようにしながら優子へ声を届ける。
それを皮切りに、聞こえてきた。
自分を応援するクラスメイト達の声が。

『負けるなー！』
『ファイトです！　木下さん！』
『ほら、頑張って！　優子！』
『頑張りたまえっ！　木下さん！』
『……優子、がんばって』

美穂が、愛子が、利光が、そして翔子が声を張り上げ、クラスメイト達の声がAクラスの教室を埋め尽くそうとする。
「み、みんな……」
思わず立ち尽くしてしまう優子。そこで気づいた。
Fクラスからも声が上がっていることに。

『うおー！　負けんじゃねー吉井！』
『がんばって！　吉井ー！』
『相手は弱っておるぞい！』
『……今がチャンス』
『やってやれ！　Fクラス魂じゃー！』

その声を受けて、明久が笑った。
それを見た優子が小さく笑った。
「……そうだったわね。これはクラス同士の戦いでもあったんだっけ……」
かぶりを振り、改めて身構える優子。
そこには、先ほどまでの焦りや強張りは無くなっていた。
「さあいくわよ、吉井君！」

改めて対峙する優子と明久。
点数は“１６２”と“１０４”。
優子は半分以下にまで減っているが、明久は一点も減っていない。
しかし、明久は油断すること無く優子とその召喚獣を見つめる。
そんな彼の姿に、優子は気を引き締めた。最初に侮っていた時のような雰囲気は微塵もない。
「……まず謝っておくわ、吉井君。正直あなたを侮っていた。けど、あたしもＡクラスの代表としてここに立っているの。負けるわけにはいかないのよ」
「……僕のことはどうでも良いよ。Ｆクラスで観察処分者なのは紛れもない事実だしね。けど……」
謝罪する優子に、瞑目しながら答える明久。
そして、目を見開きながら優子の目を射抜く。
「……綾香を悪く言ったことは許さないよ」
「……？！」
明久が放つその気配に、下の方からつめたいものが彼女の背筋を駆け上がった。
二人のやりとりは、互いのクラスの声にかき消され、当事者にしか聞こえてはいない。
けれども、二人の雰囲気が変化したことはＡクラス、Ｆクラスともに感じられていた。
そして戦場が動き出す。
先手必勝とばかりに優子の召喚獣が相手に向けて踏み込む。
鋭く突き出された穂先はしかし、彼の召喚獣には届かない。
その一撃をかい潜り相手の右側へ抜けつつ、交差法で木刀がたたき込まれる。

その瞬間。
明久は、己の右頬に衝撃が走るのを感じた。　攻撃をたたき込まれた瞬間、優子の召喚獣の右肘が、明久の召喚獣の右頬へ突き刺さったからだ。
「相打ち上等よ」
フィードバックに顔をゆがめた明久を見ながら、優子は不敵に笑い、召喚獣に追撃させる。
一方の明久は、一瞬操作が途切れたことで、優子につけ込む隙を与えてしまっていた。
まるで雄二が見せた乱打のごとく槍が突き出され、明久は防戦一方になる。
「このまま……！」
押し切ろうとする優子。しかし、明久がそれを許すはずもない。
あえて槍ぶすまへ踏み込んでいく明久の召喚獣。
その一歩は、ランスを引き戻すタイミングに合わせていた。
そのまま優子の召喚獣の右腕の付け根へ木刀が突き込まれ、ランスを取り落とす。
「そ、そんなピンポイントをっ？！」
驚く優子だが、明久は隙を与えないとばかりにすかさず木刀を返して切り込んでいく。
その一撃は、とっさに持ち上げられた盾に激突して受け止められた。
そのまま明久の召喚獣にぶつかっていく優子の召喚獣。
短い距離のショルダーチャージ。それを胸に受けた明久の召喚獣が両足で床をこすりながら後退していく。
「がっふっ？！」
胸板に受けた衝撃のフィードバックが、肺の中の空気を強引に吐き出させた。そのダメージによって、明久と召喚獣は、同時に片膝を着く。

この隙に優子は召喚獣をランスに飛びつかせた。
「とどめっ！　間に合えっ！！」
優子の叫びに呼応し、ランスを突き出し突進する彼女の召喚獣。
その穂先が、明久の召喚獣の胴体……はなく、右腕を貫いた。
「……っ！！」
右腕がちぎれる激痛をかみ砕くように歯を食いしばり、召喚獣を左へ転がす明久。
そのまま体勢を整え召喚獣を立ち上がらせる。
その右腕は、木刀を握ったまま向こうに転がっていた。
それを見て優子はランスの先を明久の召喚獣に指向させつつ口を開く。
「……とどめはさせなかったけど、勝負有りね？　吉井君。出来れば降参して欲しいのだけど……」
「……断る」
優子の提案を、脂汗を流しつつ痛む右腕を押さえながら拒絶する明久。
優子もそうするであろう事は薄々感じていたため、特に驚きはない。
「なら！　すぐに楽にしてあげるわ！　じっとしてなさいっ！」
そのまま飛び出していく優子の召喚獣。
それを何とか避ける明久の召喚獣。
そのまま木刀に向けて飛ぶ。
「見え見えよっ！」
が、優子はそれを読んでおり、盾を木刀へ投げつけた。
それは制御に難のある優子が投げたにしては、奇跡的に命中し、木刀を真上に跳ね上げてしまう。
「しまっ……」
すぐに掴めない高さに跳んだ木刀に明久は顔をゆがませる。
その隙を優子は逃さない。

高々と上がった木刀の下まで来た明久の召喚獣へ、必殺のランスが伸び、それが明久の召喚獣へ襲いかかった。
それは、果たして、明久の召喚獣を刺し貫いた。

彼の召喚獣の。

左の手のひらを。

「なっ？！」
あまりのことに驚く優子。
その瞬間、声が響きわたった。

『いっけぇ～～～～～～～っ！！　あぁきひさあああぁぁっっ！！』

綾香だ。
その声に応えるように明久の目が鋭く光り、召喚獣が落ちてきた木刀に食いつくようにして口でキャッチする。それに驚きながら優子はランスを引き戻し、次の一撃を放とうとした。
だが、その一瞬で左手を抜き去り、素早く踏み込む明久の召喚獣。
その口にくわえた木刀の切っ先が、優子の召喚獣の首元へ突き込まれ、たたら踏む。しかし、明久の召喚獣の動きはそれで止まらず、木刀を口から放しながら跳躍し、その柄へ、渾身の膝蹴りを見舞った。
その勢いも加算され、木刀の先端は優子の召喚獣の首を貫いた。
Ａクラス　木下優子

数学　　0点

VS

Fクラス　吉井明久

数学　　3点

『……勝者、Fクラス。これで総計二対三で、本戦争はFクラスの勝利とします！』

高橋教諭のその声に、言葉に、その場の誰もが耳を疑った。
そして、その意味が浸透し、優子は膝から崩れるように、その場にへたり込んだ。
「……う、嘘……、負けたの？　あたしが……？　Ａクラスが……」
呆然とつぶやき、悄然となる優子。そんな彼女と対峙していた脂汗にまみれた明久が、握った左拳を天井に向けて突き上げると、Ｆクラスから歓声が上がった。

『やった……やったぞ俺たち……』
『Ａクラスに勝ったんだ！』
『すげーな俺ら！』

対してＡクラスは意気消沈し、お通夜状態だ。

『そ、そんな……』
『Ｆクラスなんかに負けるなんて……』
『これからどうすれば良いんだ……』

そんな声が聞こえてきていた。
ヘタリ込んだ優子に近づく明久。そのまま彼女に手を差し出す。
それに気づいた優子が顔を上げると、そこには、優しそうな少年の笑顔があった。
「いい勝負だったね？　木下さん」
そんな彼に、わずかに見とれてしまう優子。
「……勝てなきゃ、意味ないわ」
そう呟くように言いながらそっぽを向く。その頬は、わずかに赤

い。
そっと持ち上がった手を明久が取り、軽く引っ張るようにして彼女を引き起こす。
が、勢いがつきすぎて、優子は明久の胸板に飛び込んでしまう。
「……ふわ」
細身な身体からは信じられないような逞しい胸板。
そして、男の体臭に優子の顔の赤さが加速する。
「やっぱり吉井君、良い肢体してる……」
ぽそりと呟かれた言葉は、誰にも届かない。
「？　……木下さん？」
「これなら坂本君との絡みの方が……」
訝しげになった明久の耳に飛び込んできたのは、悪夢のような言葉。
「……待つんだ木下さん。その妄想は危険すぎる」
「ふぇあひゅっ？！　あ、あたし言葉に出してた？」
明久の突っ込みに狼狽する優子。
「わ、忘れてちょうだい……っ！　お願いだからっ！」
「……いや、僕も覚えていたくないし……」
そのやりとりをきっかけに身体を放すふたり。
わずかに名残惜しそうにする優子が居たが、明久は見なかったことにしてFクラス陣営に戻った。

「……よくやったな明久。これでこの教室は俺たちのもんだ」
出迎えた雄二がねぎらう。
「……微妙そうだね？　雄二」
だが、明久は雄二の様子に気が付いていた。
「……なに言ってやがる、Aクラス打倒は悲願だ。嬉しくないわけがないだろう」

明久の言葉に、憮然と答える雄二。
「そんな嬉しく無さそうな顔で言われても説得力無いよ？　雄二」
明久に指摘され、しかめっ面になる。
「そんなことより戦後対談だ」
まるで逃げるように歩き出す雄二。
その後ろ姿に、明久はため息を吐いた。
そんな明久の隣に、ボリュームのある金髪が近づいてきた。
綾香だ。
首から下げられた『私はハレンチなイタズラをした大馬鹿者です』のプレートはそのままになっている。どうやら気に入ったようだ。
「お疲れアッキー。雄二となんかあった？」
明久に声をかけ、雄二の背中へと蒼い視線を投げかける。
「ん？　うん、雄二の奴、この勝利に納得がいってないみたいでさ」
「ふーん。なんか考えがあって起こした戦争だとは思っていたけど、やっぱりか」
明久の言葉に、綾香はつまらなさそうに答える。
「どうやら雄二の目的は果たせなかったみたいだけどね」
明久は、どうしたものかと首傾げる。
だが。
「アホらし」
綾香は一刀両断すると、軽く疾走した。
次の瞬間。
跳躍した綾香の両足がそろえられ、雄二の背中にたたき込まれた。
「ドゥゲラバゴワシャッ？！」
派手に吹き飛び、Ａクラス陣営につっこむ雄二。
「あ。」
どうやら雄二はぼんやり歩いていたらしい。もう少し抵抗があると思っていた綾香は、力加減を間違えてしまっていた。
『う、うわあぁ～っ？！』

『な、なにが起きたんだっ？！』
『え、Ｆクラスの代表が、ミサイルのように……』
『だ、代表～～っ？！』

Ａクラス側は大混乱。Ｆクラスですら呆気にとられている。
「やっぱぁ……」
「なにやってんの？！　綾香はっ！？」
綾香と明久は、あわててＡクラスの方に駆け寄っていき、雄二の安否を確かめる。
「だ、大丈夫か！？　アホ雄……」
「生きてるか～？　雄……」
ふたりでのぞき込んで絶句した。

そこには。

Ａクラス代表の霧島翔子を。

雄二が組み敷いて。

その唇で、彼女の唇を塞いでいる姿があったからだ。

その光景に、一瞬、世界の時間が止まったかのような感覚を覚える。

Aクラスとfクラス、双方の代表の接吻シーンは、それほど衝撃的だった。

と、目を閉じた雄二の眉が動きだし、身じろぎを始める。

「……？」

身体の下の柔らかい感触に気づいてか訝しげになり、目を開いた時、雄二はなにが起きているのかさっぱり分かっていなかった。

「……」

彼のすぐ目の前に人の顔があった。

それは、絹糸のような黒髪はさらりと流れ、ブラックダイアモンドのように輝く瞳は潤み、白い肌は陶器のように美しい。

まるで、世界中のあらゆる芸術作品の集大成として作られた日本人形のような彼の幼なじみ。

形の良い黒い眉は緩い弧を描き、白い頬が朱に染まり、見開かれた目は惚けていた。

と、そこで雄二は彼女の小さな口唇が見えないことに気づく。感情をなかなか表さない彼女が、わずかに見せる喜びの曲線。

もう何年見ていないであろうか？

そんなことを考えつつ、自らの唇に感じる柔らかい感触に気づく。

それは、いままで口にした、いかなるものより甘美で心地よきもの。

それをもう少し味わいたくて、わずかに甘噛みした瞬間。

彼女の身体が震えるのを雄二は全身で感じ、自身の身体の下にある、白い雲より柔らかいベッドが、彼女の肢体であることに気づき、己が味わっている甘味が、彼女の唇であることに気づいた。

翔子　ＯＮ　俺。

マウストゥマウス。

「……」

そこまで考えてやっと、雄二は自分の体勢と、やらかしたことに気づいた。

一瞬、真っ赤になった雄二があっという間に真っ青になる。

「うわあ信号機みてえ」

「あ、あはは……」

そんな二人を取り囲んでいるＡクラス一同に混じって見ていた綾香がつぶやき、明久が乾いた笑いを浮かべた。

ふだんならからかい混じりに言いそうなものだが、雄二が唇の辺りを動かし始めた辺りから翔子の反応が艶っぽくなっていったせいか、綾香と明久の二人を含むＡクラスの面々は頬に朱が散っていた。

その向こうでは、瑞希と美波が目を輝かせ、秀吉と康太を始めとする異端審問会が、怪しげな衣装に身を包み、血涙流しながら拷問用具の手入れを開始していた。

しかし雄二はそれどころではなかった。

「だあぁぁああっ?!?!　な、なんでこんな事に～～っ?!?!」

翔子の上から飛び退き、頭を抱えて天を仰ぐ。

一方の翔子は完全に固まっていた。

『だ、代表、大丈夫？』
『うわ……石みたい』
『こ、これ気絶してるの？』

周囲のＡクラス女子がなんとか介抱しようとしている。
そんなカオスな状況で、雄二は綾香に食ってかかった。
「夏目っ！　てめえ、なんて事してくれやがったんだ！」
「いやあ、悪い悪い。けど、あんな美人とキスできたなんてラッキー……」
茶化すように言う綾香。だが最後まで言えなかった。
雄二の表情があまりにも真剣で、せっぱ詰まったものだったからだ。
それを見てさすがにバツが悪そうになる綾香。
「あ……いや、ゴメン……。本当に悪かった」
言いながら頭を下げる。
その時聞こえたつぶやきに、綾香は顔を上げた。
その時、雄二の周囲を黒覆面の怪人たちが包囲した。
「な？！おまえらなんのつもり……」
周囲を睨むように見回す雄二。
それに対して怪人どもが騒ぎだす。

『当然だ。てめえばかりイイ目見てんのを許せるか！』
『あんな美人を押し倒した上にキスだとっ？！』
『く、くくくっ、もう俺の漲る殺意は止められねえぜ？』
『……殺したいほど妬ましい』
『雄二よ、わしも殺気が抑えられんのじゃ。許せよ』

「ちくしょうっ！？」
叫ぶや否や包囲を突破して逃げ出す雄二。
そしてそれを追跡する黒装束の一団。

明久はそれを見送って嘆息する。
が、綾香の様子に気づいて彼女に近寄った。
「どうしたの？　綾香」
「え？　ううん、なんでも……」
明久に訊ねられるもあいまいにごまかす綾香。
その蒼い視線は、走る雄二を追う。
「……雄二の奴、なんであんなことを？」
俺なんかが汚しちゃいけない。なんて……。
声にもならないほどのつぶやき。
それを反芻するように、綾香の眉が八の字を描いた。

結局その日、戦後対談は行われなかった。
Aクラス代表の霧島翔子は気を失ったままであったし、Fクラス代表の坂本雄二は彼を追い回していた同じFクラスのメンバー諸とも、学園名物鋼鉄の生活指導担当西村宗一教諭に制圧され、午後一杯を補習室で過ごしていたからだ。
その他のAクラス、Fクラスの面々は土曜日だったこともあり、午後には下校となっている。
そんな中、綾香の気分は晴れなかった。
雄二のつぶやきが、どうしても頭から離れなかったからであったが、そんな彼女の様子を心配した瑞希と美波が彼女を遊びに誘い、綾香と仲の良い友香も呼んで遊び回っていた。

本来なら明久も、となりかねないところではあったが、さすがに女子が六人いるところに、男一人は肩身が狭いらしく、そうそうに退散してしまっていた。
残ったのは綾香、瑞希、美波、友香、律子、真由美の六人。
カラオケに行ったり、マックでおしゃべりしたりして楽しく過ごす。
そして日が傾く頃には綾香も屈託無く笑っていた。

あまり遅くなれない瑞希や、妹のことがある美波の事もあって、日が落ちる前に解散する一同。
すっかり上機嫌になった綾香は、買い物をして帰ろうか？
などと考えて歩く。

と、その耳がわずかに響いた声を拾った。
「……この声って」
聞き覚えのある声に綾香は眉をひそめ、暗い路地の奥へ蒼い視線を向ける。
本来、護身の考え方からすればこのような場所に近づくべきではない。
けれども綾香は足を踏み入れた。聞こえた声の持ち主のことが気になり、それが綾香の背を押していた。

傾いた日差しがあまり差し込まない、薄暗い路地裏。
どこか薄汚れている通りを、金髪の少女が歩く
奥を見据える蒼い眼差しは、真剣そのもの。
周囲を警戒しつつ足を進める綾香。
「……近い」
聞こえてきた喧噪に、綾香がつぶやく。
そして、ビルに囲まれるようにしてできたコンクリの広場に出た。
そこに広がる光景は……。

倒れ伏す三人の男。

不良っぽい男の胸ぐらをつかみあげ、執拗に殴り続ける雄二の姿。
その光景に、綾香は息を呑む。
『ハーーッハッハッハッハァアーッ！』
路地裏にこだまする笑い。それが綾香の耳を打つ。

喧嘩と呼べるような代物ではなく、ただ一方的な蹂躙。
それを為した赤毛の少年の姿に、綾香は奥歯を噛みしめ、大地を蹴った。
「やめろ雄二っ!!　やり過ぎだっ!!」
綾香の声に、一瞬止まりかけるもさらに殴りつけようとする雄二。
その腕に、綾香が飛びつく。
「だからやめろって!!　顔面の殴打は死ぬ可能性だってあるんだぞっ!?」
雄二の腕を抱え込みながら叫ぶ綾香、そんな彼女を睨む雄二。
「邪魔するな夏目っ!!」
雄二の怒声に、綾香はわずかに目を細めるが、怯むことは無かった。ただ、雄二の態度が気に入らない。
「あーもう!!」
イラついたような声を上げると、素早く雄二の前に回り込む綾香。
小気味の良い破裂音とともに平手が雄二の頬に炸裂する。
それが雄二の頭に冷や水をかけた。
胸ぐらを掴んでいた男を放し、一瞬呆ける雄二。が、すぐに目に力が戻り、綾香を睨みつける。
「何しやがる!　このエセ外人」
「頭冷やせっての!　このゴリラっ!」
「んだとっ?!」
怒鳴る雄二に負けじと怒鳴り返す綾香。その隙に男どもは算を乱して逃げ出した。
「あっ?!」
その素早い逃げっぷりに声を上げるもすでに遅かった。
「くそっ!」
彼らの背を見送り、悪態をつく雄二。そして、目の前の金髪の少女に視線を戻した。
底冷えするような視線が綾香を射抜かんとする。が、綾香も相応の眼力を以て雄二を見上げた。

しばしにらみ合う二人。
先に口を開いたのは綾香だった。
「……なに荒れてんだ？　アホ雄二」
「……」
訊ねた綾香に対し、無言で返す。
「霧島のことか？」
「ッ」
雄二の表情が揺れた。
それを見た綾香は嘆息する。
「……まるわかりだっつうの。ったく。で？　霧島の何が気に入らないんだ？」
「おまえには関係ない」
「……『翔子を俺みたいな奴が汚しちゃあいけない』だっけか？」
「！　……てめえ」
綾香の言葉に怒気が強くなる雄二。それを見て綾香は息を吐く。
「……霧島との間に何があったかなんて聞く気はないよ。けど、こんな風に荒れるんじゃあ困るんだよ。今回のアレは……あたしのせいでもあるし……。機嫌直せって。あたしに出来ることなら、今回に限ってなんでもしてやるからさ」
バツが悪そうに顔を背けて頭を掻きながら言う綾香。
その様子に、雄二は毒気が抜けていくようだった。
そして、“いつもの”悪童らしい笑みを浮かべると口を開いた。
「……ち、仕方ねーな。ならそうだな……口直しさせてくれよ」
「は？」
雄二の提案に、綾香の目が点になった。
「だから口直しだ。望まない形でキスなんかしたんだぞ？　それくらい当然だろう？」
ニヤニヤ笑いながら言う雄二。綾香の狼狽する姿を楽しむ気満々だ。
だがしかし。

「……わ、わかった」
あっさり承諾した綾香は、眼を閉じ、顎を少しあげて唇を突き出してくる。
「え……？　お、おい……？」
これに動揺したのは雄二である。からかうつもりが、素で承諾されてしまい、顔を赤らめ狼狽する。
その間も綾香はキス待ち体勢のままだ。
それを見た雄二は、一瞬だけ綾香の唇に目を奪われたがすぐにかぶりを振って頭を掻きむしると、綾香の額を軽く小突いた。
「あたっ？！」
想像の範疇外のことをされて、？マークを飛ばしながら額を抑える綾香。
「ばーか。冗談に決まってるだろう。……おまえがしおらしいと、俺の調子もおかしくなりそうだ。おまえはいつものお前で居ろよ」
そう言われた綾香は、ぽかんとした顔で雄二を見ていたが、彼の顔から険がとれているのを感じて満面の笑みを浮かべると、「おう☆」と、返事をした。

「って感じで雄二も一応落ち着いたかな？　ってところかな。けど、根本的な解決にはなってないんだよなあ」

「……」

夕餉をいただきながら話す綾香に、明久が少々憮然とした表情を見せる。

それに気づいた綾香は、ほおばっていたチキンの照り焼きを嚥下し、蒼い瞳で明久を見る。

「……アッキーどした？」

不思議そうに訊ねる綾香を横目で見て、小さく息を吐く明久。

「……キスの口直しなんて……」

ぽそりと紡いだ言葉に、綾香が苦笑いする。

「なーに？　アッキー。ヤキモチ？　アッキーとだってキスしたことあるじゃん」

「……幼稚園と小学校の頃にね」

綾香の爆弾発言に、冷静に答える明久。当時、綾香の両親が挨拶代わりにキスしているのをさんざん見た結果として、幼い二人には、キス＝家族同士の挨拶位の認識でしかなかった。

だが、さすがに小学校に上がってからはおかしいと気づき始めて（余談だが、明久を可愛がっていた彼の姉は鼻血を吹くほど喜んでいた）おり、プライベートでのみ、ふたりっきりのときに唇と唇をくっつけたりしたことはあった。

しかし、小学校の高学年くらいには、思春期のせいか、その辺に恥ずかしさを覚え始めて、しなくなっており、かれこれ五・六年くらいは唇を重ねてはいない。

もっとも、二人が経験しているキスは、小鳥のキス。

さきっちょを、ちょんとくっつける位のものだけだ。
昼間、雄二と翔子が見せたような軽くとも官能さのあるものとは無縁のキスである。
なんとなしに、互いの唇へ目線が吸い込まれる二人。
そのことに気づいて、お互いに頬に朱を散らしながら苦笑い。
そして、少し思案した綾香はばつが悪そうに明後日の方を見ながら口を開く。
「……ま、まあ確かに軽率だったかもな。考えてみたら、身内以外のキス第二号が雄二なんてことになってたわけだし」
ちなみに第一号は瑞希だ。
仲良くなった綾香が彼女にキスして、泣かれたのが綾香と明久が間違いに気づくきっかけでもあった。
明久は身内以外とはしたことはないが、逆に姉からキスを迫られることが増えて辟易していた。
まあ、そんな風に漠然とした物しかなかった二人のキスのイメージだったが、昼間の出来事の鮮烈さを思いだし、揃って顔の赤さが増していく。
いつもの二人には無い、微妙な空気がその場を支配していた。

「お風呂先にいただいたよ～」
湯上がりの綾香が、ドライヤー片手に居間へ姿を現す。
それを受け取った明久が、背中を向けながらとなりに座る綾香の髪を乾かし、手櫛で梳いていく。
ふと、明久が綾香の髪を一房手にした。ドライヤーの電源を切り、そのまま彼女の金糸に軽く口づけてしまう。
「どした～？」
不意に聞こえた綾香の声に、明久はあわてて顔を上げた。

「な、なんでもないよ」
明久のその言葉に、綾香がふーん。と答えて黙る。
そのまま手入れを終わらせた明久は、小さな声で、少し頭冷やそう……。とつぶやいて風呂場に向かった。
その背中に綾香が、いってら～。と声をかけ、それからテレビの方を向いた。
しばらく画面を見ていた綾香だったが、その手がなんとはなしに自分の唇に触れる。
実は、さっきの明久の行動が綾香には見えていた。ちょっとしたガラスの反射で見えてしまったのだが、誤魔化すように声をかけてしまった。
唇に触れていた手が下へ降りていき、胸の真ん中を軽く押さえた。

「……なんだろ？　奥の方がキュッとするや」
自身に確認するように声が漏れた。頬も熱い気がする。
そんな初めての感覚に戸惑う綾香。
結局、明久が風呂から上がるまでそれがなんなのか考えていたが、わからずじまいだった。
その後も二人で微妙な空気を感じつつ過ごした。

そしてその日、二人は別々に床についた。

だい☆ごじゅうろくもんだす

日曜日。
明久と綾香は、かねてから予定していた護身術の道場にきていた。
古流の流れを汲む流派で、柔術を起点としている流派だ。
そしてそこの師範代が。
「来たよー♪　鷹介おじさーん」
「お邪魔しまーす」
綾香と明久ふたりで声をかける。
と、その背後に黒い影が立った。
突然の気配に、明久が肘撃ちを背後に放ち、綾香が振り向きざまにローキックを放つ。
だが、ローは空かされ、肘には膝が激突した。
そのまま明久は突き飛ばされ、綾香の視界一杯に手のひらが迫る。
その気配に、避けようと体か反応し、バランスを崩してひっくり返る綾香。
彼女が軽く混乱してる隙にその腹へ拳が突き込まれる。
そこへ明久が飛び込むように拳を振るうが、その軸足をあっさり刈られて地面へダイブ。
その後頭部へ、踏みつけるように足を落とした。
「はい、二人ともアウト。明久君は下手すれば死んじゃって、綾香はしばらく悶絶してるね。この隙に綾香はお持ち帰りされちゃうだろうなあ？」
飄々とした様子で二人を見下ろす男。
それを見上げる明久も綾香も憮然とした顔だ。
「まあ、僕くらいの腕前の人間は割といるからね。気を付けること」
「へ～い」
「はい……」

悔しさを滲ませながらも返事をする二人。
そんな彼らを見下ろすこの男は、夏目鷹介。綾香の父の弟で、ふたりにとっては叔父にあたる人物であり、ふたりの護身術の先生でもある。
先ほどの明久らとの攻防からわかるとおり、相当な使い手でもあり、明久と綾香、二人掛かりですら勝てたことのない相手だ。
そんな彼が開いているのが、『夏目流柔術』を応用した『夏目流護身術』の道場である。
綾香と明久は、そこの一番弟子と言ってよく、小学三年生の頃から習っている。
本日はその稽古日だったのだ。
「さてさて、十日ぶりくらいか。今日一日、じっくり稽古することにしようか」
鷹介の浮かべる、迫力のある笑みに、綾香と明久の背中を汗が伝う。
「そ、そんなに張り切らなくても……」
「お、お手柔らかに願います……」
顔をひきつらせながら言う二人。
地獄の一日が始まった。

「はあ？　体の奥の方がキュッとする？」
「ええまあ……」
道場での“訓練”が終わり、広い風呂場で汗を洗い流す明久。一緒に入った鷹介に、昨晩感じたことを訊ねていた。
明久は両親が外国にいる手前、こういった相談事は、近場にいる綾香の父虎吉か、叔父の鷹介に相談するようになっていた。
今日はタイミング良く稽古日だったため、思い切って聞いてみたのだ。

「……ふむ。なるほどなあ。まあ、俺に言わせれば“やっとか”と言う所なんだが……」
「そ、そうなんですか？」
浴槽に浸かりながら頭を掻く鷹介。それに対して明久は驚きを隠せない。
そんな彼の様子に、鷹介は苦笑いを浮かべる。
「……おそらく親戚一同、似たような反応だろうよ」
「……」
そう言われてぽかんとなる明久。
明久の反応に鷹介はあきれたようになる。
「だかまあなんだ。それがなんなのかは教えてやらん」
「えぇ？！」
鷹介の言葉に、明久は愕然となる。
それを見ながら鷹介はイタズラっぽく笑った。
「答えは自分で考えろ。悩むのも青少年の仕事みたいなもんだからな」
「そ、そんな殺生な……」
鷹介の物言いに、情けない声を上げる明久。
一方、台所でも似たような会話が繰り広げられていた。
「えぇーっ？　教えてよ百合香さん！」
「ふふふ、それが何かは自分で気づくべきよ？　綾香ちゃん」
「むぅ～」
明久と同じように、綾香が鷹介の奥さんである百合香に、昨晩自分が感じた奇妙な感覚について訊ねたのだが、やはり明久と同じようにあしらわれていた。
結局二人とも答えを教えてもらえず、夕食をいただいて家路につくことになった。
綾香の操るバイクの後ろに座る明久。
綾香の腰に手を回して振り落とされないよう体を固定する。
その感触に、明久も綾香も鼓動が早くなるのを感じた。

だいごじゅうななもん……どり～む

あけて月曜日。Ａクラス、Ｆクラスは朝から戦後対談に入ることになった。

会場はＡクラス。Ａ、Ｆ双方の生徒が全員参加しているため、百人もの人間が集まっていることになる。

それらの喧噪はなかなか賑々しいものではあるが、Ａクラス側の生徒が打ちひしがれるような悲壮感を漂わせているのに対し、Ｆクラスは祭りの開催を待ち望んでいるかのような高揚感に包まれている。

そんな中、明久と綾香は二人そろってあくびをしていた。

それに気づいた瑞希が首を傾げながら声を掛けてきた。

「どうしたんですか？　明久君も綾香ちゃんも眠そうですけど？」

「……いや、昨日はちょっと寝付けなくって……あふ」

「ふあ……同じく～」

昨晩はそれぞれの家に帰った二人だったが、叔父夫婦に教えてもらえなかったあの感覚について懊悩しているうちに微妙に眠れないという状況に陥っていた。

おかげで二人そろって寝不足である。

「……寝不足になるタイミングまで二人そろってとはのう。うらやましい限りじゃ……」

「……妬ましい」

「……ウ、ウチに勝ち目なんてあるのかしら……」

そんな二人を見ながらつぶやく秀吉、康太、美波の三人。

秀吉は嫉妬のオーラを吹き出し、康太は睨むように明久を見る。

そして美波は黄昏ていた。

そんな三人以外にも二人を見つめる目があった。

Ａクラス内から。

『よ、吉井君……なんて可愛らしい欠伸を……』
『……（うーん、やっぱり吉井君が誘い受けで、坂本君が強気ヘタレ攻めかしらね？　ああっ！　妄想が止まらないわっ！）』
『……雄二。夏目を気にしてる？　やっぱり夏目が雄二を誘惑してる』
Ｆクラス以上に禍々しいオーラが吹き出ているＡクラス側。
ある意味大丈夫なのか？　と、思わなくはない。
そんな中、雄二は心中複雑なようだった。
綾香とのやりとりで多少は気が晴れたものの、やはり納得のいく結果ではない。
ふと、その目が綾香に注がれた。彼女ならどうするかを読みとれないかという視線ではあったが、それが唇のあたりにぶつかった瞬間、あわてて目をそらした。
思い出すのは一昨日の一件。
傍若無人な綾香が慌てるところを見てやろうとふっかけた、キスの口直しの冗談。まさか承諾するとは思わなかったそのシーンが克明に思い出される。
特に鮮烈であったのが、彼女の艶やかで鮮やかな唇の朱。
透けるような白い肌とマッチしたそれは、いっそう魅力的で、雄二の心を揺さぶる。
「……って、なにを考えてるんだ俺はっ！」
わずかに頬に朱を散らしながらかぶりを振る雄二。
そして、すべてを振り払うように顔を上げ、Ａクラス代表の翔子の方を見やる。
するとそこには、ドス黒いものを背負った般若がいた。
雄二、ドン引きである。
「……お、幼なじみの知られざる一面を知った気分だ……」
青くなりながら、ゲンナリとつぶやく雄二。
そこで、立ち会いの高橋教諭から声がかかった。
『それでは、戦後対談を始めたいと思います。双方の代表者は前へ

と出てきてください』
「……はい」
「ああ」
双方の代表である翔子と雄二が答え、互いの主要メンバーを引き連れて前へ出る。
Aクラスは翔子を先頭に、優子、愛子、利光、美穂の五人。
Fクラスは雄二を先頭に、明久、綾香、秀吉、康太、瑞希、美波の七人。
中央で対峙し、緊張が走った。

一歩足を振みだした雄二。
そのまま対談に使われるテーブルに向かい、高そうな椅子に、どっかと腰を下ろす。
「ま、戦後対談とは言っても、やることは大して無いわけだけどな」
くつろぐように背もたれに体重を預けるようにしながら、足を組む。
そして、優子等を引き連れた翔子もテーブルにまでやってくる。
その視線が、一瞬、綾香を貫き、彼女は眠気が消し飛んだ。
そんな綾香を無視するように席に着く翔子。
それを見て綾香は少し肩を落とす。
「……あたし、霧島さんに嫌われてるのかなあ」
「どうだろうね」
つぶやく綾香に、明久が微妙そうな表情で答えた。
雄二は背後のそんなやりとりを聞き流しつつ口を開いた。
「さて、土曜日にやった試召戦争の結果、俺たちFクラスが、お前たちAクラスに勝ったわけだが、これに間違いはない。よって、俺たちFクラスは試召戦争のルールに則って、設備の交換を……」
「なー雄二。お前、ほんとにそれで良いのか？」
雄二の言葉を遮り、その声が彼の胸中へ切り込んだ。
それは綾香の声だ。
彼女の紡いだ言葉に、雄二が顔を逸らして彼女を見る。
いや、それだけではなく、翔子に優子や愛子、利光らAクラス。
美波や秀吉に康太達Fクラスの面々も、綾香に注目する。
そんな中、雄二は正面に向き直りながら口を開いた。
「……どういうことだ？　夏目」
「雄二、わかってるんでしょ？　自分が一番納得してない勝利だっ

て」
雄二に答える綾香。対して雄二は何も言えなくなる。
その様子に、周囲が騒がしくなる。

『ど、どういうことだ？』
『俺が知るかよ』
『坂本は勝ちたくなかったのか？』
『綾香ちゃん、モヘ』

主に騒いでいるのはＦクラスだが、Ａクラス側も困惑気味に顔を見合わせている。
しかし、綾香は構わず続けた。
「そーじゃなきゃ、“あんなことしたり”、あたしにキスを要求なんてしなかったんじゃないの？」
特大の爆弾だった。
『坂本を殺せえぇーっ！！』
雄叫びがあがる。
が。
「ちょっとうるさい」
冷たい声音とアイスブルーの眼差しが、異端審問会の足を凍り付かせる。
綾香の放つ、ぞっとするほどの冷たい迫力が、黒覆面の集団をコキュートスへたたき落としたのだ。
一方Ａクラスからも、殺気が綾香に向けて放たれる。
翔子だ。しかし綾香は気にも留めない。
「はっきりしなよ。雄二」
綾香にそう言われ、表情を険しくする雄二。
その口が、重々しく開かれる。
「……翔子」
「……なに？　雄二」

雄二に声を掛けられた翔子は、殺気を霧散させて応じた。
そんな彼女を見て、一瞬口をつぐむが、決意するように口を開いた。
「……たしか、負けた方は勝った方の言うことを聞くんだったな？」
「……そう」
雄二に確認され、うなずく。
それを見て雄二もうなずいた。
「……なら、それを先に果たしてもらう。翔子……俺と戦え」
「……え？」
違うことを言われると覚悟していた翔子は、呆気にとられた。
「俺と一対一、サシで勝負だ。イヤとは言わせない」
「……わかった」
雄二の言葉にうなずく翔子。
そのやりとりに笑みを浮かべる綾香と明久。
「勝負の内容は、召喚獣を使わない純粋点数勝負。内容は小学生レベルで方式は百点満点を上限とする」
一気に勝負内容を告げる雄二。その内容に、翔子が目を細める。
と、そこへ声がかかる。
『それは、もう一度ＦクラスがＡクラスに試召戦争を仕掛けるということですか？』
立ち会いの高橋教諭だ。
「いや……それは……」
その言葉に雄二は口をつぐんだ。

「それでいーですよーせんせー」

割り込む綾香の声。
その言葉に、明久を除いた全員が驚いた。

「おまっ？！　夏目っ！　何勝手なこと……」
雄二は立ち上がって綾香に食ってかかった。
しかし、綾香は涼しい顔で、「勝てるんでしょ？」と言ってくる。
こう言われては雄二も引っ込みがつかない。
「……当然だ」
力強く言う。
それを見た綾香が笑う。
「なら問題ないじゃん☆」
言いながら振り返る綾香。そこにはクラスメイト達の姿。
彼らに向けて、ニッと笑うと口を開く。
「いいよねー♪　みんな～☆」

『……まあ、別にいいか。どうせ勝てるんだし』
『……そうだな。問題ないな』
『……土曜の勝ちからは日を跨いじまってあれだったしな』
『……意義なーし』

綾香の言葉に同意するFクラスの面々。唯一明久だけが苦笑いを浮かべているが、誰も気にしない。
その様子を見てうなずく高橋教諭。
『問題ないようですね。では、この後十時より、視聴覚室にて特別ルールによる試召戦争を行います。双方とも準備を怠らぬよう』
そう告げて教室を出ていく高橋教諭。残った生徒達は、互いの代表の周囲に集まり、激励していく。
それを見ながら、綾香はその輪から離れたところに立っていた。
「綾香」
声を掛けられ、蒼い瞳がそちらを見る。
そこにいるのは幼い頃より供にあった少年の顔。
そのまま自分の隣までやってきた彼に微笑む綾香。
「……ごめんなアッキー」

突然の謝罪に、明久はきょとんとなった。
「どうしたの？　綾香」
不思議そうな顔になった彼を見て、綾香は苦笑い。
「アッキーの頑張りも、全部無駄にしちゃったかもしれないからさ……」
すまなそうにする綾香。
「だから……ごめん……明久」
少年が、誰かのためにこの戦争に一所懸命だったのだ。
それを無為にしてしまうかもしれない。
否。
確実にしてしまうだろうと綾香は感じていた。
すなわち、雄二の敗北を確信しているのだ。
だからこその謝罪。
それを聞いて明久は輪の中心にいる雄二を見る。
「……あんなバクチじみたやりかたを、バクチと思ってない辺り、雄二も平静じゃないんだよ、きっと」
そうつぶやき、苦笑いを浮かべる明久。その隣で綾香もうなずく。
「……それくらい、雄二の中で、大切なことなんだろうと思う」
そう返して、綾香はすべてを見守った。隣に立つ少年の手を握り。
そして、すべての決着が着いた。

日本史勝負
二年Ａクラス　霧島翔子　９７点

ＶＳ

二年Ｆクラス　坂本雄二　５３点

それが、勝負のすべてだった。

だい☆ごじゅうきゅうもんえ（前書き）

ちょっと遅刻しました。すいません。
結構難産だった割に、どうかな？　って出来です。
みなさんの目には、どう写りましたでしょうか？
これからもよろしくお願いします♪

「……私の勝ち」
「……く」
勝利を宣言する翔子に対し、悔しそうに歯噛みする雄二。
そこへFクラスの面々が突入してくる。

『てめえ！　坂本ぉっ！』
『こいつはどういうこった?!』
『しかもこの点数、零点とかなら名前を書き忘れたかと思うが、まさか……』

「いかにも。この俺の実力だ……」

『殺せぇ～～っ!!』

雄二の返答に飛びかかろうとするFクラスの面々。
しかし。

『待ってよっ！』

駆け抜けた声が防壁のように、彼らの足を止める。
その声は、金髪の少女から発せられていた。
彼女に振り向く一同。
そんなみんなを見回し、綾香は。
「……みんな、ごめん！」
癖のある金糸が跳ねるくらいの勢いで頭を下げた。
呆気にとられる雄二とFクラス一同。

『な、なんで綾香ちゃんが謝るんだ？』
『悪いのはこんな点数で負けた坂本だろう？』
『そうだぜ！　綾香ちゃんは何も悪くな……』

「ううん。やっぱりあたしのせいだよ。雄二にやる気にさせたのもあたしだし、試召戦争の形にしたのもあたし。そんなことしなければ、みんなはＡクラスの設備を手に入れていたはずなのに、あたしが勝手な事をしたから……」
頭を下げたまま言う綾香に、Ｆクラスの生徒たちは意気を削がれ、戸惑うように周りを見回す。
そして雄二もうなだれたまま両の拳を握りしめた。
「……だから、まずはあたしに……」
「いや、待て夏目」
その声に、綾香が顔を上げた。
「この対戦に負けたのは俺のせいだ。俺のわがままを通して置きながら、俺はなんの準備もしなかった。所詮小学生レベルの問題だとたかをくくっていたんだ」
俯き、つぶやく雄二。Ｆクラスの面々はその独白を、黙って聞いていた。
よくよく考えれば、自分たちも綾香に同調したのだ。
綾香に非があるなら、自分たちにも非がある。
彼らはそれに気づいた。
「……雄二」
不意に、静謐な声が聞こえてきた。
翔子だ。雄二は顔を上げ、彼女に向き直る。
「この勝負、俺の……Ｆクラスの負けだ」
力無く言う雄二。
「……雄二。私、ほんとは勝てたら恋人になって貰うつもりだった」
「やっぱりな。まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。今までも、これからも、私には雄二しかいない」

「だが、例の約束は最初の戦争のみの取り決めだ。今回のこの戦いには、何の関係もない。俺のことは忘れろ、翔子」

そう言って翔子に背を向ける雄二。

「……絶対、諦めないから！」

強い意志のこもった声。それが、雄二の背中に突き刺さり、その足を縫い止めた。

「……」

が、それを引き剥がすように再び足を進める雄二。

と、その腕が取られ、足を掛けられ、あっという間に頬を床に着けることになった。

「あだだだだだだっ？！」

思わぬ事と痛みに声を上げる雄二。

何事かと視線をあげた雄二の視界に飛び込んできたのは、蒼い眼差しだ。

「な、夏目っ？！　いったいにしやが……」

「……雄二、あんたは霧島さんと別れるために勝ちたかったの？」

「それは……」

「違うよね？　雄二。いったいあんたは“何を証明したかったの？」

綾香の問いに、雄二の体が跳ねた。

「……俺の、“証明したかったもの”？」

「あれだけこの戦いにこだわって、証明したかったのは何だったの？　あなたが霧島さんに見せたいものを見せられなかったからって、逃げるな！　坂本雄二！！」

「……」

綾香の言葉に、何も言葉を紡げない雄二。

不意に、綾香の肩が掴まれた。

「……雄二をイジメたら許さない」

翔子だ。その瞳に静かな怒りをたたえながら綾香に告げる。
綾香はそれを受けて雄二を放した。
「……雄二、大丈夫？」
「……翔子」
翔子に寄り添われ、雄二は力無くうなだれる。
その眼差しから涙が溢れた。
「……ちくしょう。情けねえな、俺は……。また、逃げ出しちまうところだった」
綾香も、明久も、クラスメイトたちも、ただただ見ることしかできない。
「……雄二。泣かないで？　雄二」
「ははっ情けねえだろ？　愛想が尽きたろ？　俺なんかが、おまえに釣り合うわけが……」
雄二の言葉が遮られる。
その唇を、彼女が自らの唇で塞いだから。
突然のことに目を白黒させる雄二。唇が離れ、顔を赤らめた翔子に見つめられ、唇をわななかせる。
「……翔子。お、おま……なにを……？」
「……雄二、好き」
再度口づける。その勢いに圧されるように、雄二は仰向けに転がり、翔子が覆い被さるようにキスをする。
この様に、綾香や明久をはじめとしたFクラスの面々は、開いた口が閉じられなかった。
その後も、翔子が唇を放し、雄二が何か言おうとする度に翔子が口づけて言葉を封ずるしーんが繰り返された。
それを見ていたFクラスの面々は、徐々にその場から姿を消していき、結局、翔子と雄二の二人が鉄人に生徒指導室へ引きずり込まれるまで続いた。

だい☆ろくじゅうもん……☆♪

結局、Ａクラス、Ｆクラス、共に設備は変化しなかった。
だが、Ｆクラスは『最低辺ながらも向上心溢れるクラス』として担任が西村宗一教諭こと、鉄人に変更となるご褒美（嫌がらせ）が与えられ、生徒たちは血涙流して喜んだらしい。
そんなこともありつつ、月曜日だけはあり、午後はきっちりと授業があったわけだが、まあそのあたりは雄二が戻ってこなかったこと以外、特に何も問題は無かったと言えよう。
とにもかくにも、こうして第二学年初日から始まった一連の試験召喚戦争は終わりを迎えた。
しかし、これはまだ序章に過ぎない。
これからの一年、今年度の第二学年は、文月学園史上もっともトラブルが多かった学年として知られるわけだが、それはまた別の話。
当の本人たちにしてみれば、青春を満喫した結果に過ぎないだろう。
そう、彼らの一年は、始まったばかりなのだ。

とまあ、長々と書いていったわけだが、そんなことは些細な問題である。
問題となるべきは、午後の授業中うわの空であった明久と綾香であろう。
最終的に雄二と翔子の熱い熱い、とても熱くて濃厚なシーンを最後まで見ていたのはこの二人であった。
たかがキス一つでここまで官能的な雰囲気になるとは思っていなかった二人の常識が、完全に吹っ飛んだ形だ。

そして、ふたりそろって互いのくちびるが気になり出してしまった。

授業中、明久は前に座る綾香のボリューム満点でクセのある美しい金糸を眺めつつ、彼女の瑞々しいくちびるに思いを馳せ、綾香は綾香で自分のくちびるに指を這わせつつ物思いにふける。

午後の授業が終わり、ＨＲも終えて、肩を並べて歩く帰り道でも、互いの視線がお互いの口元に吸い寄せられ、同時に気づいて二人で顔を逸らす。

いつにない雰囲気に戸惑い、その顔に黄昏時の朱を写し込んで頬の熱さをごまかす二人。

普段より、互いの肩の位置が遠いのは、そのせいであろうか。

「……なあアッキー」

不意に、綾香から声を掛けられ立ち止まる明久。

それにかまうことなく、綾香は一歩、二歩と跳ねるように進んで、クルンと回る。

広がった金色が、黄昏の陽を反射してきらめいた。

「霧島さんはすごいな♪」

童女のように笑いながら明久へ声を掛けた。

「あんな風に、いつまでも、何があっても、好きな人だけを想えるなんて、ほんとにすごいよなあ」

「そうだね」

しみじみとした綾香の言葉にうなずく明久。それを見た綾香は、きびすを返し、歩き出す。

「あたし達にも、いつかそういう相手が出来るのかな？」

「どうだろうね？」

ちょっと想像つかないや。と綾香に返す明久。

それを聞いて綾香は赤さと青さと黒さが見え始めた空を見上げて、あたしもだ。とつぶやく。

明久も、空を見上げて歩き出した。

しばしのあいだ、静寂が二人を包む。

見つめる空は、同じはずだった。
「……アッキーさあ」
「ん？」
唐突に綾香に呼ばれ、明久は彼女の方を見た。
いまだ空を見ながら歩く綾香。
そのくちびるが、言の葉を紡ぐ。

もし、ふたりともそんな相手が出来なかったらさ
……。

「へ？」
思わず間抜けな声を出す明久。
すると綾香が足を止め、今一度ターンしてみせた。
舞う金糸の向こうに見えた彼女の口元が笑い、海に映る空の色のような蒼い瞳が彼を見る。

なーんでもない☆

そう言うと足を踏み出し、白く、ほっそりした手で彼の手を取った。
「ホラホラ♪　早く帰ろうぜ～☆」

そのまま歩き出す綾香に先導されるように歩き出す明久。
その口元に、笑みが浮かんだ。

それは、男の子の手を引いて歩く女の子のようにも見えた。

だい☆ろくじゅうもん……☆♪（後書き）

はい、これにて『第一部：試験召喚戦争編』が終了となりました。
当初の予定では、これで終わりのはずでしたが、出来れば続きを！　との声が多かったため、連載を継続させていただきます♪

それではみなさん。
これからも、『バカとテストと召喚獣　～蒼い瞳の従姉～』をよろしくお願いします♪

ＧＡＵ

だい☆ろくじゅういちもん♪（前書き）

いよいよ始まりました『蒼い瞳の従姉』第二部♪
これも読んで下さるみなさんの応援のおかげです♪

ありがとうございます♪

これからも、本作品をよろしくお願いしますね♪

だい☆ろくじゅういちもん♪

夏に向けて若い芽が息吹き始め、桜色の季節が過ぎ去った今日この頃。

文月学園では、今年度最初の行事でもある『清涼祭』に向けた準備が始まっており、どのクラスもＬＨＲの時間は活気に満ち満ちていた。

むろん、我らがＦクラスも……。

「女の子相手だからって手は抜かないぜっ？！　綾香ちゃんっ！！」

「ふっふーん♪　野球部ならいざ知らず、すがっちにあたしの球が打てるかな？」

「くっ！　勝負！」

当然のようにサボって野球をしていた。

ピッチャーマウンドに立つのは、長くて癖のある金髪に、蒼い瞳の少女、夏目綾香。

投げやすいようにブレザーを脱いで、ネクタイまで外した彼女のブラウスの胸元をたわわな果実が彩る。

スパッツを履いているとはいえ、文月学園指定の短いスカートが翻るのも何とも思わないかのように足を上げ、流麗なフォームから速球を投げ込む綾香。

それを受けるミットを構えるのはクラス代表の坂本雄二だ。

余談だが、キャッチャーのポジションを巡って、争乱が起きそうになったが、綾香の投げる速球を雄二以外誰も捕球できず、泣く泣く彼にミットとマスクが渡された。

ちなみに最初にチャレンジした秀吉は捕球し損ねた際のイレギュラーを急所に受けて悶絶するという、まことに“男らしい”退場を

していた。
危うく美少女にクラスチェンジするところではあったが。
そんなこんなで始まった野球だったが、綾香の揺れる山脈や、丸い腰回り。健康的で長い足を堪能せんとするクラスメイト達だったが、彼女の放る球に呆然となる。
野球部のエースが投げそうな剛速球が飛んできたからだ。
ほかにもカーブ、シュート、フォークを投げ分け、三振の山を築く。
打てば鋭いスイングでホームラン。
男子のメンツ、丸潰れである。
そんな綾香の活躍を、明久は瑞希や美波と一緒にFクラスの教室から眺めていた。
「……すごいわね綾香って」
男子相手に活躍する綾香の姿に、思わずひきつるようにつぶやく美波。
それを聞いて明久と瑞希が苦笑いを浮かべる。
「小学校の時も男子に混じってやってたしね」
「それもクラスで一番うまかったんですよね？」
当時を懐かしむように明久と瑞希が漏らす。さらに中学校でも女子の野球部やフットサル部などに積極的に助っ人に入るなどして活躍していたらしいことが明かされ、美波は目を丸くした。
と、グラウンドで新たな動きがあったようだ。
『貴様等！　清涼祭の準備をサボって、なにを遊んでおるかぁっ！』
「ゲッ！？　鉄人先生！？」
綾香の上げた声に、Fクラスの面々が蜘蛛の子を散らすように逃げまどう。
「夏目！　お前がサボりの主犯かあ！」
「ち、違うわよ！？　なんであたしだけ名指しなのっ？！」

脱いでいたブレザーを回収していた分スタートが遅れた綾香は、全力疾走するがまるで引き離せない。
「雄二だって！！　出し物決めがめんどいから野球やろうって言い出したのは雄二！！」
ちなみに真っ先に同調したのが綾香である。
必死に走る綾香がチラリと雄二を見れば、真面目な顔ですばやくサインを出してきた。
『鉄人の　股間に　フォークを』
最後にサムズアップ。
「バカかお前っ？！　そんなことしたら、あたしが無茶苦茶怒られんだろがっ！？」
併走しながら雄二にツッコミを入れる綾香。その間にも鉄巨人の魔の手はこく一刻と迫り来る。
「ひいっ？！」
そのプレッシャーに振り向いた綾香は涙目で悲鳴を上げた。

「つーわけで、春の学園祭『清涼祭』の出しもんを決めなきゃならん訳だが……とりあえず議事進行及び実行委員を任命してそいつに全権を委ねる。後は任せた」

教壇に立った雄二は、いかにも面倒そうにのたまう。

それを眺めるクラスメイトらにも覇気はない。

畳に寝転がったり、ちゃぶ台に突っ伏して居眠りしたり、やる気の無さは文月学園一だろう。

お祭り好きな綾香にしても、今は鉄人の拳骨を食らったせいか大人しい。

ちゃぶ台にアゴを載せて両手を前へ投げ出し、上唇を突き出すようにしながら頬を膨らませ、柳眉を逆立てながら雄二をにらむ綾香。

先程の逃走劇では対鉄人対処に関しては雄二に一日の長があったらしく、彼は逃げきって教室に戻ってきたが、綾香は捕まって説教を食らったのだ。

その際頭に落とされた鉄拳のおかげで、頭頂部にでっかいタンコブが出来ていた。

「っきしょ～アホ雄二の奴……全部あたしに擦り付けやがって……」

今一度言おう、野球を提案した雄二に真っ先に同調したのは綾香である。

そんな綾香の斜め後ろで、瑞希はしんなりしていた。

雄二やクラスのみんなのやる気の無さを残念がっているのだ。明久とて思い出を作りたくない訳ではないが、無目的に盛り上がれるわけではない。

「そうなんですか……。すこし、寂しいです。私は、明久君や綾香ちゃんと思い出を作りたいですから」

そう言ってはにかむように笑う瑞希。

明久は、そうだね。と同意しながら微笑み、聞き耳を立てていた綾香も小さく笑う。
「んじゃ、実行委員は島田で……」
「あー、あたしやるわ」
美波を指名しようとした雄二を遮り、綾香が立ち上がった。
瑞希の話を聞いて、やる気に火が点いたようだ。
「……夏目がか？」
その様子に雄二が顔をしかめた。確かに綾香なら雄二に劣らないリーダーシップを発揮できる。
それだけなら雄二も最初から綾香を指名しただろう。しかし、彼女がやる気の時は、大抵振り回される。
それを警戒し、彼女以外で牽引力のある美波を指名しようとしたのだが。
本人がやる気の上、クラスの空気がそれを歓迎している風潮もあり、雄二は仕方なく了承した。
「んじゃアッキーは副実行委員な♪」
言うが早いか明久の手を取り、教壇へ引っ張っていく綾香。
明久は、仕方ないなあ。とばかりに苦笑いしつつ着いていく。
「そんな訳で！　アホ雄二に代わってあたしが仕切るよ☆」
『イエーーーィッ！！』
教卓の横でポーズを取りながらウインクする綾香。
それだけでクラスのテンションうなぎ登りである。
「そーだなー。みんなはやりたいものあるか？」
軽く思案した綾香がクラスへ問いかける。
すると数人が手を挙げた。
それを見て綾香は楽しげな顔になる。
「なんだ。結構いるじゃん♪　んじゃ、まずこーたからいってみよー☆」
指名されて立ち上がる康太。
「……写真館」

「まぁーたこーたってばエロいんだからあ☆」
康太の案に、綾香が小悪魔スマイルでツッコミを入れると、康太はあわてて、……そんな事実は無い。と否定する。
その様子を見て綾香が笑い、明久が苦笑いしながら板書する。
「つぎはーっと、横溝！　いってみよー」
綾香は新たに適当な男子を指名し、彼が立ち上がった。
「メイド喫茶！　っと言いたいところだが、使い古されてるしな。斬新に、ウエディング喫茶なんてどうだ？」
「ウエディング喫茶？　仮想結婚式でもすんの？」
「ぶふぉーーっ？！」
訝しげに聞き返す綾香に、なぜか雄二が思い切り噴いた。
突然のことにクラス中が雄二に注目し、綾香があきれたような顔になった。
「……なにやってんだアホ雄二。進行の邪魔すんなよ」
「きゃ、却下だ却下！　ウエディング喫茶なんて恐ろしいもん、却下に決まってる」
綾香のツッコミを無視してわめく雄二。そのあわてぶりに、綾香がまたもや小悪魔スマイルを浮かべる。
「アッキー候補にあげといて♪」
「てめえっ夏目っ！　却下って言ってんだろがっ！」
言うが早いか教壇へと駆け出す雄二。
そのまま候補から取り下げさせんと綾香につかみかかるが。
「ほいっと」
軽く体をかわして雄二の背後に回ったかと思うと、彼の首に、綾香の腕が素早く巻き付いた。
チョークスリーパーだ。
「うきゅっ？！」
奇声を上げ、あっというまに落とされる雄二。
「アッキー、“これ”そっちに捨てといてー。はい、次いこーかー☆」

物言わぬ体となった雄二を捨て置き、綾香は進行を再開する。その間、明久は傷病者搬送で雄二を教室の隅に運び、回復体位をとらせて放置した。

「次すがっちなー」

「おう。俺は中華喫茶を提案するぞ」

刈り上げた頭に、つぶらな瞳の少年が、勢い込んで立ち上がった。

「中華？　チャイナドレスでも着んの？」

いまいちイメージがわかなかった綾香は首をひねりながら聞き返す。

すると須川は首を振った。

「いいや違う。俺が提案するのは本格ウーロン茶と簡単な飲茶を提供する店で……」

と須川の熱弁が続いた。

「ふーん。とにかくこだわりがあるわけね？　アッキー書いといて？　ほかには……無いの？　なら、あたしからひとつ」

ほかに挙手する者がいないのを確認し、綾香は自身のアイディアを開陳した。

「“召喚獣喫茶”なんてどうよ？」

『“召喚獣喫茶”？』
「おうよ」
クラス中が異口同音に聞き返し、綾香がうなずいた。
それを見てクラス中がざわめく。

『それってどんなことをするんだ？』
『パッと聞いただけじゃ想像つかないな』
『けど、召喚獣はこの学園の目玉だぜ？』
『宣伝としても良さそうだな』

そのざわめきを聞きながら、綾香はニヤリと笑う。
否定的にしろ肯定的にしろ意見が出る以上は関心がある証拠だ。
「基本は喫茶店だな。で、イベントとして召喚獣でパフォーマンスするんだ。ほんとは給仕させたいんだけど、物に触れんのはアッキーの召喚獣だけだしな。後はそーだなー。全員召喚獣のコスプレかな」
綾香の説明に感心する一同。
と、その時、教室の扉を開けて巌の如き漢が姿を現した。
「ゲッ？！　鉄ゴリラ……」
「西村先生と呼ばんかっ！　っと、夏目が進行しとるのか。出し物は決まったか？」
「いちおー四つ候補が出てるよ」
西村に応えるように黒板を見る綾香。それにつられるように西村も黒板に目をやった。
「ふむ。展示物が一つに喫茶店が三つか。まあ、真面目に決めるのならいいだろう。売り上げで設備の向上もやってやれんことはない。

がんばることだ」
　西村のその言葉に、皆が色めきたった。
『そ、そうか！　その手が……』
『なにも試召戦争にこだわる必要はなかったんだ』
『ナイスアイディアだ西やん！　チンパンジーのくせにやるな！』
『ああ、まったくだ。とても猿に毛が三本追加されただけとは思えないぜ！』
　等々言いつつ西村にサムズアップするFクラス男子。
　それを眺めた西村は、軽く嘆息した。
「……どうやら補習の時間を倍にした方が良いらしいな」
『すんませんでした！　自分らちょーし扱いてましたーーっ！！』
　西村教諭の言葉に四十四人、総土下座である。
「……アホだな、こいつら」
　その様を見て、半眼でつぶやく綾香。
　気を取り直しつつ皆に声をかける。
「もう面倒だから、この四つから決を採るよ！　答えはきーてない！　キリッ☆」
「……自分で『キリッ☆』って言っちゃうのもどうかと思う」
　ポーズを決めた綾香に、明久がツッコミを入れるが、綾香はそれをスルーしてよく通る声で挙手を促す。
　候補一つ一つを挙げ、賛成する手を数えていく綾香。
　そして、あっという間に結果が出た。
「つーわけで、出し物は『召喚獣喫茶』に決定☆　みんな協力しろよー」
　綾香の宣言に、クラスメイトらが応じる。
「んじゃ、班分けしちまうかー。基本はホールと厨房な？　料理で

きる奴は基本厨房に集まれよー」
「それなら任せてくれ。お茶や飲茶に限らず大抵のことはできる」
綾香の声に真っ先に応じたのは須川亮だ。自身の提案した中華喫茶では無くなってしまったが、率先して名乗りを上げる。
次いで康太も、……紳士のたしなみ。と厨房班へ立候補した。
それを聞いて綾香が小悪魔スマイルを浮かべた。
「こーたが料理って、エロス目的で通いつめた結果なんじゃないの？」
「……そんな事実は無い」
綾香のツッコミを全力否定する康太。
「私も厨房に……」
「み、瑞希？！　どっちかというと瑞希はホールにいてほしいかな？　うちのクラス、女子が三人しかいないし」
瑞希の言に、少しひきつりつつ言う綾香。しかし、瑞希はそれに得心がいったようだ。
「……それもそうですね。今回は諦めます」
「ってことはウチもホール？」
「うん、女子は基本ホールでお願いしたいな」
瑞希や美波をホールに振り分け、周りに指示を出していく綾香。
普段のふざけた様子とは違い、真面目にやっている。
「教室の掃除もしないとなあ。畳は外して、テーブルと椅子は誰かに頼んで……。あ、そーだ鉄人せんせー」
教室の様子にいろいろ思案する綾香。ふと、なにかを思い出したかのように西村へ声をかける。
「西村先生だ。まったくおまえは何度言っても……」
「まあまあ。それより召喚獣の事なんですけど……」

「なに？　物理干渉をか？」
「そ。特別サービスってことで召喚獣に給仕させたいんだけど、物理干渉できんのアッキーだけだしな。何人か見繕って許可が欲しいんだよ」
綾香の説明に、西村が顔をしかめる。
「その辺りは学園長に相談しないと何とも言えんな」
「それはわかってるよ。あたしもちゃんと説明するし、頼むよ～。あ、後、召喚許可もいるから、せんせーも一日教室にいてくれよな」
西村の返答にうなずきつつ、召喚許可についても話し出す。すると西村はさらに渋面を作った。
「む？　俺がか？　しかし、当日は見回りをすることになっているからなあ」
「なんだよ、担任だろ？　受け持ちのクラスを優先しろよな」
当日用事があると言う西村に、綾香が口をとんがらかせて文句を言う。
「教師には敬語を使え。全く……。だが、そうだなおまえの言い分も正しい。ほかの先生とも話し合って調整するとしよう」
言うが早いか教室を出ていく西村。こういう時の行動は早い。
「うし、次はっと、厨房班のリーダーは須川な。ホールはアッキー頼む～」
西村を見送った綾香は、新たに指示を出し始めた。
「こーた、コスの手配できるか？」
「……女子の物なら即座に用意する。男子のは知らない」
「……いっそ清々しいよな。こーたって」
きっぱり言い切る康太をジト目で見る綾香。軽く嘆息して頭を掻く。

「……しゃーない。今度の撮影モデルの話、指定するコス増やしても良いぞ？」
「……任せておけ！」
「ほんと清々しーな……」
綾香の出した条件に、前言を翻して承諾する康太。その変わり身の早さにさすがの綾香も呆れてしまった。
「よーし、まずは掃除だな。みんな協力して畳みひっぺがせー♪」

『オウ！！』

綾香の指示にノリノリで従う一同。
「にったんにあさっちは掃除の指揮な。きちんとやっとけよ。えーと、雄二はっと。まだ寝てんのかよ……。オラおきろ！　アホ雄二！！」
「ぐぅっ……、ま、待て翔子……結婚なんざする気はねぇ……ハッ？！」
綾香に肩を揺すられうなされていた雄二が目を覚ます。
「お、恐ろしい夢だった……まさか付き合ってもいない翔子に婚姻届けを突きつけられるとは……」
「どんな悪夢だよ……」
ヒドい寝汗を拭いながらつぶやく雄二に、綾香が呆れたようにつぶやく。
と、雄二が顔を上げ、周囲を見回した。
「っと、作業が始まってるってことは、出しもん決まったのか？　なんになった？」
「召喚獣喫茶だ」
「……またよくわからんもんになったな」
綾香から出し物を聞いて、雄二が渋面を作った。
「そういう訳だから、ちょっと学園長室までつき合えよ」
「は？　意味が分からん。おまえに委任したんだから一人で行け。

めんどくさい……」
露骨に嫌そうな顔をする雄二。その反応自体綾香の予想通りだったので、予定通りに行動する。
「ま、言うと思ったけどな」
ヒュッと風を切る音が聞こえ、雄二がそちらを見た瞬間。
意識がブラックアウトした。
重い物が倒れる音が響き、何事かとクラス中がそちらを見れば、先ほど起きたはずの雄二が白目をむいて倒れていた。

『……』

無言で作業を再開する一同。
見なかったことにしたらしい。
「んじゃアッキー。ばーちゃんのとこいこーぜー☆」
そう言いながら綾香は雄二の“右足”を持って、彼を引きずりながら教室を出ていった。

「で？　なにか言うことは無えのか？」
「あっはっはっは♪　悪い悪い♪」
綾香の蹴りで意識を刈り取られた雄二だったが、さすがに引きずったまま階段は無理だったらしい。
頭をコブだらけにし、怒り心頭中の雄二に笑いながら謝る綾香。
「チッ。まあいい。それより本当なのか？　姫路の転校の話は」
「……うん。真っ先にあたしのところに電話が来たし、瑞穂さんにも確認したから間違いないよ」
言ってるのはおじさんらしいけどね。と続けた綾香の言葉に、明久が顔を伏せ、雄二はアゴに手をやって思案する。
「……そうか。恐らく姫路の転校の理由は三つだな」

「まずは貧弱な学習環境だろ？　畳とちゃぶ台に座布団って寺子屋かっつーの」
雄二に続いて綾香が言う。
セリフを取られた形の彼は顔をしかめるが、言葉を続けた。
「……そうだ。まあ、これは売り上げ次第ではイスと机に出来るかもしれん。で、ふたつめは……」
「教室だな。廃屋同然で健康に害があるんじゃ話になんないよ」
そして、またもや綾香に後半を乗っ取られ、顔をひきつらせる雄二。
「……こっちは売り上げ程度じゃどうにもならん。学校側の協力が必須だな。んで三つ目……」
「学習意欲の低いクラスメイトだろ？　あれじゃあ瑞希の競争相手にはならないからな。あたしがもうちょっと成績上げられたら良いんだけどな」

三度言葉尻を取られた雄二は、肩を震わせ、ひきつった笑みを浮かべた。
ちなみに綾香はいつもの小悪魔スマイルだ。
「夏目……分かっててやってるだろ」
「当たり前じゃん☆」
キレそうな雄二を相手にしても悪びれない綾香。そんな二人に挟まれ、明久は気が気でない。
「まああれだよな。一つ目は売り上げ次第だからまだ何とかなるけど、二つ目は難しいしな」
「あれ？　三つ目は？」
綾香の言葉に明久が不思議そうに訊ねる。すると雄二が口を開いた。
「大方、すでに対策を練ってあるんじゃないのか？」
「ぴんぽーん♪　当たりだよ☆　商品は、霧島さんとのデートけ～ん♪」
「いらんわっ！！」
「まあ冗談は置いておくとして」
「ぐく……」
綾香の言動に振り回される雄二。
その様子に明久は合掌するしかない。
「瑞希と美波のペアで召喚大会に出て貰ったよ。最初はあたしとって話だったけど、美波の成績の方が優勝したときのインパクトがあるからね」
「……確かにな」
調子を戻して綾香の説明にうなずく雄二。すると明久は首を傾げた。
「ならふたつめはどうするの？」
「それはこれから行く場所でお願いするんだよ。アッキー♪」
「まあババアに直接頼むのが手っとり早いだろうな」
「頼むのはそれだけじゃないけどな」

言いながら足を進めた綾香たちの視界に、りっぱな両開きの扉が見えてきた。
そこはこの学園を仕切る老女傑、藤堂カヲル学園長の根城、学園長室だった。

『優勝……事をしてるんじゃ……』
『そっち……賞品を……加えてるじゃ……』
扉の前までやってきた三人だったが、向こうから言い争う声が聞こえてきて、明久は困惑した表情を浮かべた。
「なんだか取り込み中みたいだし、後にした方が……」
「なら学園長は中に居るってわけだ。無駄足にならなくて済んだな」
「だな☆　とっとと入ろうぜ？　しっつれいしま～♪」
しかし、明久の言葉をスルーするように、軽くノックをしてから雄二と綾香が扉に手をかけ、室内へ入っていく。
そこには、長い白髪が特徴的な老女傑、藤堂カヲルと、鋭い目つきにクールな態度の竹原教頭が居た。

「うげっ？！　竹原じゃん」
くだんの人物を見た瞬間、嫌そうに言う綾香。
普段、嫌いな人間などいないかのような彼女が嫌悪する人物など珍しいと言える。
雄二もそう思ったようで、かるく眉を跳ねさせた。
「……夏目が嫌うなんざ珍しいな」
「生理的に合わないらしいよ？」
雄二のつぶやくような声に、明久が声を潜めながら答える。
と、学園長が嘆息した。
「やれやれ、失礼なガキどもだねぇ。普通なら返事を待つもんだよ」
そう言って三人を見る学園長。
そしてもう一人。教頭の竹原も三人へ鋭い視線を向けた。
「まったく……。取り込み中だというのに、とんだ来客ですな学園長。これでは話を続けられません。……まさかとは思いますが、あなたの差し金ですかな？」
言いながら眼鏡のつるを押さえつつ学園長をにらむ竹原教頭。
しかし、この女傑が怯むはずもない。
「ハッ、馬鹿を言わんどくれよ。そんなセコい手、どうしてアタシが使わなきゃいけないんだい？　負い目があるわけでも無し」
「それはどうでしょうね？　貴女は隠し事がお上手なようですから」
大上段からぶった切るような学園長に切り返す竹原。
見ている三人にはよく分からないが、かなり揉めている。
このやりとりを、雄二は興味深そうに眺め、綾香は眉をひそめた。
「やれやれしつこいねえ。さっきから言ってるように、隠し事なんてありゃしないよ。アンタの見当違いだ」
「……そうですか。ま、そこまで否定されるならば、この場はそう

いうことにしておきますよ」
嫌悪を隠そうともせずに言い放つ学園長に、竹原は引き下がったようだ。
不意に、軽く顔を逸らしてからきびすを返し、三人には目もくれずに学園長室を出ていく。その背中に向けて、綾香が口の端を両手の人差し指で引っ張りながら舌を出す。
そんな中、明久は室内の隅を見つめていた。
竹原教頭が出ていく前に、そちらへ視線を送っていたからだ。
「……明久、どうした？」
「ん？　何でもないよ」
明久の様子に気づいた雄二にそう答えつつ、アイコンタクトで、後で話すよ。と伝える。
すると学園長が声をかけてきた。
「んで？　アンタらは何の用だい？　ガキども」
先ほどまでのやりとりなど無かったかのような態度だ。
そんな彼女に綾香が振り向いた。
「ばーちゃんやっほー♪　遊びに来たよ☆」
「違うでしょ。学園長にお願いがあって来たんでしょ」
当初の目的を忘れてる綾香に明久が突っ込み、綾香が、おおっ？！　そうだった！　と、手を打つ。
そんな綾香を見て、老女傑が柔らかく笑う。
「相変わらずだねえお前さんは。そういうところは父親そっくりだよ」
そんな学園長を、雄二が気持ち悪そうに見る。
「よ、妖怪があんな笑い方するとは……明日は槍が降るな……」
「ばかだなあ雄二は。空から槍なんて降らないよ」
「アッキーは少し黙ろうな」
雄二の言葉に、明久が笑いながら突っ込み、それを綾香があしらう。
その一言に、明久はマジへコみした。

「もちっと勉強しとけ、馬鹿が」
ついでに雄二が追撃すし、さらに落ち込む明久。
その様子を見て学園長が嘆息した。
「やれやれ、あたしゃいつまでそのくだらない漫才モドキを見てなきゃいけないんだい？」
用がないならさっさと出て行けと言わんばかりの学園長に、綾香が口を開いた。
「用はあるよ、ばーちゃん。頼みがあるんだ」
そう言って説明を始める綾香。
そんな彼女と学園長のやりとりを、雄二は不思議そうに眺めた。
「……明久、夏目はババアと知り合いなのか？　やけに親しそうだが」
「え？　ああ、綾香がって言うより、綾香のお父さんの恩師なんだよ学園長。綾香のお父さんが数学者って事もあって、それなりに付き合いがあるんだ。それだけじゃなくて、綾香のおじいちゃんと学園長が……」
「……そこの馬鹿。なにをぺらぺらしゃべってるんだい？」
雄二に答える明久だったが、学園長ににらまれ口をつぐんだ。
「ったく。で、綾香。フィールドの件は西村先生にするとして、物理干渉だったね。まあ良い宣伝にもなりそうだし、六人まで設定してやろうかね。西村先生が常駐するなら妙な使い方はしないだろうからね」
「やりぃっ♪」
学園長から許可をもらい、指を鳴らして喜ぶ綾香。その様子に微笑む学園長に、雄二は背筋を震わせた。

「で？　そっちの馬鹿面下げたでくの坊は何の用だい？」
雄二と明久を見て、あからさまに態度を変える学園長。
雄二の顔が小さくひきつり、明久が苦笑いを浮かべた。
それでも軽く咳払いし、気を取り直した雄二は話を切りだした。
「今日は学園長にお話があってうかがいました」
「うわ、アホ雄二が敬語使ってる。キモ～」
すかさず綾香が茶々を入れ、雄二のこめかみに小さく十字マークが浮かんだ。
「やれやれ、わたしゃ忙しいんだ。学園の経営に関する事なら教頭にでも聞きな。それから話を聞いて欲しいってなら、まず名乗る。社会の礼儀だ、覚えておくさね」
さも面倒そうに言う学園長。その態度に雄二の十字マークが太くなる。
「……失礼しました。私は二年Ｆクラス代表の坂本雄二です。で、こっちが……」
自己紹介した雄二が明久達を示す。
「……二年を代表するバカとトラブルメーカーです」
「ほぅ。アンタが坂本かい。それにしても綾香と吉井は相変わらずのようだねえ」
雄二のことを興味深そうに見た学園長は、綾香と明久を呆れたように見て嘆息した。
それを見て明久はひきつったように笑い、綾香は口をとんがらかせた。
「ひでーな、そんなに騒ぎばっか起こしてないよ？　……たぶん」
自信なさげに目をそらす綾香。
「ま、いいよ。話を聞いてやろう」

口の端を上げながらそう言ってくる学園長。
対して雄二が軽く会釈する。
「ありがとうございます」
「礼なんざ言ってる暇があるんならとっとと話な、トウヘンボク」
学園長の罵倒は止まらない。
しかし雄二は動じた風もなく顔を上げた。
「わかりました。用件はFクラスの衛生環境改善の陳情です」
「ほぉ、そいつは暇そうで良いねえ」
「……現在のFクラスの教室は、まるであなたの脳味噌のように隙間だらけで風が吹き込んでくるようなひどい状態です。畳も腐っており、衛生状態は最悪。このままではこのバカみたいに頑丈な生徒はともかく、体の弱い生徒は倒れかねません。よって教室の衛生環境をとっとと改善しやがれクソババアってわけです」
「うん、そんな感じ♪」
雄二の話に追従する綾香。
そんな無礼極まり無い説明に思案顔になる学園長。
「（ふむ。ま、ちょうどいいさね）」
その小さなつぶやきは、三人には届かない。
ふと、彼らを見つめ、学園長は笑みを浮かべた。
「なるほどねえ。あんたたちの言い分はよく分かったよ。けど、却下だね」
学園長の言葉に、綾香が、おやっ？　となり、明久も訝しげになる。
雄二は片眉をはねさせながら、学園長に訊ねる。
「……理由をお聞かせ願いますか？」
「フン、理由ねえ。理由もなにも無いよ。設備に差を付けるのは学園の方針だよ。あきらめな」
ばっさり切り捨てる学園長。
しかし、すぐにニヤリと笑った。
「……と、いつもなら突っぱねるところだけどね。可愛い生徒の頼

みだ。条件付きで相談に乗ってやろうじゃないか」
「……」
学園長の言葉に、雄二は答えない。
明久は綾香に目配せをしてから、口を開いた。
「……条件ですか？　それってどんなものですか？」
「召喚大会。知ってるかい？　清涼祭の目玉イベントだ」
「……まあ一応は」
「その大会の賞品がなんだかは知ってるかい？」
学園長に聞かれるも明久は首を傾げたのみ。代わりに綾香が口を開いた。
「優勝したら賞状とトロフィーと『白金の腕輪』が正賞として贈られて、副賞は『如月グランドパーク　プレオープンプレミアムペアチケット』が貰えるんだったっけ？　準優勝と三位入賞は覚えてないや」
「準優勝は賞状と『蒼窮の腕輪』と『如月グランドパークペアチケット』、三位入賞は賞状と学食デザート半額チケットさね」
綾香に続けて学園長が準優勝、三位入賞賞品を告げる。
一瞬、雄二の体が震えたがほかの三人はスルーした。
「へえ。で、それが何の関係が？」
「やれやれ、最後まで聞きな。この副賞のペアチケットのプレミアムの方だがね、ちょいとよからぬ噂を耳にしてね。回収したいんだよ」
その言葉に、雄二と綾香の目が鋭く細められた。

「回収ですか？　なら、賞品から取り下げれば……」
「できるならそうしてるさね。教頭が勝手に取り付けた契約とはいえ、文月学園として交わした正式なもんだ。いまさら無効には出来ないんだよ」
学園長の言葉に、明久は、契約する前に気づいて下さいよ、それくらい。と、嘆息しながら言う。
「うるさいね。こちとら腕輪の製作で忙しかったんだよ。噂も最近聞いたものだしね」
明久に答えつつも顔をしかめる学園長。
そこで綾香が口を挟んだ。
「なーばーちゃん。その噂って、どんなんだ？」
「如月グループなんだけどね、如月グランドパークにかなりグループの威信をかけてるらしくてね。客の入りが良くなるように、ジンクスを一つ作るつもりらしい。『パークにカップルで訪れると幸せになれる』ってね」
学園長の答えに、綾香と明久は顔を見合わせた。いまいち問題視される噂とも思えない。
しかし、学園長の話は終わってはいなかった。
「そのジンクスのためだけに、やってきたカップルを結婚までコーディネイトするらしいよ。プレミアムペアチケットはそのサービスの為のもんだそうだ」
つまり、チケットを使ってやってきたカップルを結婚させることで幸せになれる。とアピールするつもりなのだろう。
それを聞いて綾香と明久は微妙そうな顔になった。
そして雄二は、顔面蒼白で何事かつぶやいていた。
まあ、そんな赤毛猿はスルーしつつ、綾香が嘆息する。

「なるほど。その候補がうちの学園ってわけだ。美人も多いし、召喚システムを導入した試験校ってことで話題性も十分だしね」
「その通りさね。普段なら歓迎したいところだけどねえ。本人の意思を無視してっていうのが気に入らないね」
綾香の言葉に学園長がうなずいた。
「じゃあ条件って言うのは……」
「そう、『召喚大会の優勝賞品』との交換ってことさ。これを成し遂げたら教室の環境改善位はしてやろう。ただし、強奪したり譲って貰ってもだめだ。あくまで優勝が条件だよ」
学園長の言に、明久と綾香は視線を交わす。
ふたりとも、漠然とした違和感を感じていたからだ。
結局、なぜか猛烈にやる気になった雄二により話はまとまり、雄二、明久、綾香の三人が召喚大会出場と相成った。
その後、雄二は学園長と話を詰めるとのことだったので明久と綾香は早々に辞去していた。

「なあ、どう思う？　アッキー」
「さっきの話？　確かにちょっと気になることは多いよね」
教室までの道すがら、二人で先ほどまでの学園長室での話を思い出しつつ歩く綾香と明久。
「うーん。ばーちゃんは口は悪いんだけど、基本的には生徒思いだったはず何だよな。それに学校の不衛生さによって生徒が倒れたら、学園の評判にも悪影響がでる。だからあたしは衛生環境を良くするのには賛成してくれるって思っていたんだけど……」
「実際は交換条件付きでの許可だった。それにペアチケットの事も」
「うん。その気が無いなら断るか、行かなければ良いしな。第一、あたし達学生は結婚が認められない年齢のが多い」
男子は１８からだしなあ。と、綾香はつぶやきながらくせっ毛の

金髪頭を掻く。
　文月は進学校だ。基本的に大学受験を考えている生徒がほとんどで、それらを控える三年生がこのチケットに関心を持つとは考えにくい。よしんば手に入れたとしても、大学進学や就職が決まった後、二学期後半から三学期、学園卒業後に使用となるはず。
　それだけ時間が経つならもうウエディング体験の話は世間の話題に上っているだろう。
「そもそも譲って貰うのもダメっていうのもね……」
　ぽつりと明久がそうつぶやく。
　そう、チケットの回収だけならそれでも構わないはずなのだ。
　なのに優勝しての獲得を条件にされたのだ。
　おかしな事だらけだ。
「……やっぱ腕輪の方かな～。そっちの方がしっくりくるんだよね」
「そうなの？」
　綾香が漏らした言葉に、明久が目を丸くした。
　綾香は周りに人がいないことを確認してから明久に向き直る。
「去年じーちゃんと盛り上がってたときにポロッと漏らしてたんだけど、腕輪は召喚システム関係の新技術らしいからな。『こんな技術を開発しました』って宣伝して置いて公開出来なきゃ、本当にそんな技術があるのか疑わしいだろ？」
「そっか、そうだよね。なら大会の後で腕輪を使ってみせるのかな？」
　綾香の説明に相づちを打つ明久。綾香は、多分な。と返し、また歩き始めた。
「どっちにしても優勝が条件って話だからな。頑張ろうアッキー♪」
　その綾香の言葉に、明久は軽く笑いながらうなずいた。

教室に戻った明久と綾香のふたりは清涼祭準備の打ち合わせの進捗を聞きつつ、進行していった。

その後、学園長室から戻った雄二を交え、物理干渉の事を話し合う。物理干渉の件は、とくに操作経験を積んだと思われる、綾香、瑞希、美波、秀吉、雄二、須川の六人が選ばれ、召喚獣での接客訓練も課されることになった。

召喚大会に関しては、秀吉にも声がかけられたが、すでに明久と綾香が教室に戻る道すがらチームを組んだと知って落ち込んでいた。

いまだ課題は多いものの、こうしてFクラスの清涼祭準備は始まった。

空の赤さが濃い黄昏時。

朱に染まる家路を優しい雰囲気の少年と、ボリュームのある金髪の少女の二人が歩く。

「いろいろあるけどたのしーな♪　アッキー☆」

軽く伸びをしながら言う綾香に明久が、そうだね。と、笑いながら答えた。

ふいに視界の端に光るものを感じ、そちらに視線を転じて軽く息をのむ。

茜色の夕日が、彼女の癖のある金糸に照り返して、キラキラと輝き、彼女を光で包んでいた。

「ん？　アッキーどしたん？」

己を見つめる従弟の視線に気づき、綾香が不思議そうに蒼いまなざしを彼へと向ける。

光輝く金糸に包まれた、蒼い瞳の少女。黄昏時の背景の中にたたずむ彼女の姿は、幻想的でもあり、明久はその吸い込まれそうなほど蒼い眼に、しばし見とれる。
まるで、自分という存在が、その蒼さに溶けていくような……。
そんな感覚が、明久を支配していく。
そして彼の鼻腔を甘い香りが刺激し、澄んだ鈴の音色が耳奥へ流れる。
「……ッキー、アッキーってば！」
「ふへっ？！」
その声に我に返ると、鼻先に己をのぞき込む蒼い瞳があった。
眼をしばたたかせ、そのことがようやく意味となって彼の脳に届いた。
瞬間。

ッ♪

と、鼻先に触れる感触を感じた。小さくすぼめられた少女のくちびるが、彼の鼻先をつついたのだ。
「って。うわあっ？！」
思わず体をのけぞらせる明久。
その姿を見た綾香は、いたずら成功♪　とばかりに、ニンマリと小悪魔スマイルを浮かべた。
「って綾香！」
気恥ずかしさを隠すように声を上げる明久。
綾香は笑いながら逃げはじめ、明久も追いかける。
そのままふたり、童心に返ったかのような追いかけっことなり、楽しげに走る。
が、彼女のスニーカーが、小石にけつまずいた。

「った?!　わわっ!?」
「綾香!」
勢いのまま浮遊感を感じる綾香。
明久は思い切り踏み切って手を伸ばす。
その指が彼女の細い腕に掛かり、そのまま掴まえる。
が、無理矢理踏み込んだせいか、彼も重力と彼女に引っ張られるようにして舞った。
「うわひゃあっ?!」
「わあっ?!」
少年と少女、二人が声を上げ、地面に倒れ込んだ。
「いったあ〜」
「わぷ」
「ひゃあっ?!」
綾香はとっさに受け身をとったが、明久も巻き込まれていたせいか、お尻をしたたかに打ってしまう。
一方明久は、柔らかく、暖かいクッションに顔全体を埋めるような感触を受け、痛みなどはまるで感じなかった。
それどころか、とても甘い匂いが彼の鼻腔をくすぐる。
「ふわぁ……」
そのあまりの心地よさに、身を委ねそうになるが、ハッ?!　となり、あわてて身を起こした。
「あ、綾香!　大丈……」
「ひあんっ?!」
手に柔らかい感触を感じつつ、聞いたことのない従姉の声に、目を丸くする明久。
そんな彼を、蒼い湖のような瞳が潤みながら見上げてくる。
茜色の夕日に照らされながらもわかるほどに、頬へ朱を散らした彼女の姿に、明久は鼓動が早くなるのを感じた。
思わず体中が強ばり、手を強く握ろうとした。
「ひゃんっ?!」

形の良い眉を八の字にした綾香の口から声が漏れ、それに驚いた明久が手元を見れば、己の手が、綾香の形の良い実りを鷲掴みにしていることに気づいた。

「……って?!　わあぁぁっ?!　ご、ごめん綾香っ!?」

あわてて飛び退く明久。

それに対して綾香は、少し間を空け、胸元をさすりながら身を起こした。

「……もう。乱暴にするなよな?　結構デリケートなんだぞ?」

「す、すいません……」

言いながら立ち上がる綾香に対し、明久は地面に正座状態から平伏する。

「罰として晩ご飯とプリンな」

不意にかけられた声に、明久が、えっ?　と顔を上げると、綾香が小悪魔スマイルで見下ろしてきた。

しかし、事故とはいえ揉んでしまった罪悪感から明久は頷くしかない。

まさに転んでもタダでは起きない綾香であった。

「たっだいま～♪」
「ただいま……」
買い物を終え、吉井家に帰宅した二人。ふたりにとっては互いの家も自宅と変わりない。
合い鍵片手にドアを開け、帰宅を告げながら三知土に靴を脱ぎ散らかす綾香。
明久が買い物袋を置きつつ、彼女の靴をそろえる。
もうこのやりとりも二人にとって当たり前である。
そうして明久がキッチンへ向かい、夕飯の準備に取りかかる内に、綾香はラフな部屋着に着替え、お風呂掃除だ。
それを終えたら洗濯機に汚れ物を投入。
スイッチを押した綾香は胸元に手を当て、軽く息を吐く。
「ばれて……無いよね？」
つぶやき、少し頬に朱を散らす。
あの時、転んだ自分にのし掛かるように明久が倒れ込んできて正直驚いた。
さらには胸まで揉まれ、一瞬パニックになりかけた。
あの瞬間、早鐘を打つ鼓動を明久に気づかれてるんじゃないかと思うと気が気では無かった。
今も、まだ、動悸が早い気がする。
「けど……」
嫌じゃない。
綾香はわずかに口の端を持ち上げるようにして笑みを浮かべた。
明久に胸を触られたのは初めてではない。小学生の頃、膨らみはじめたそれに、明久が興味津々で触ってきたり、一緒にお風呂に入ったときなどは食い入るように見つめられたこともある。

それを逆手にとって、さんざんからかってやったら、気にしてない風を装うようになりはしたが、やはり気になるようではあり、その様子が面白くて綾香は特に何も言わずに放置していた。

しかし、中学の頃、いつものように一緒のベッドで寝ていると、明久が背中から抱き締めるようにくっついてきて、その手が綾香の胸を触りはじめた時はさすがに驚いた。

その頃には加速度的に綾香のそれはボリュームアップしていた時期だったので、それなりの大きさだったのだが、明久はそれを確かめるようにおっかなびっくりしながら触ってきたのだ。

その様子が面白くて、くすぐったくて、笑いそうになるのをこらえていたが、とうとう噴き出してしまい、硬直した明久へ向き直り、あの小悪魔スマイルを浮かべながら一言、言い放った。

『変態♪』

以降触ってくることはなくなったが、しばらく明久は綾香の言いなりだった……。

そんなことを思い出しつつ、綾香は自分の胸を軽くさすってみる。明久の手の感触とも違い、別段どうという事もない。

「……そっか、あれから三年以上経つんだ」

ぽつりと漏らし、笑みを浮かべた。

あの時は、ただただびっくりして、楽しかった。けど、今日のは少し違った。

ちょっと恥ずかしく、“嬉しかった”。

そこにどんな違いがあるのか、綾香には見当が付かなかった。

けれども今は、その“嬉しさ”を反芻し、噛みしめていた。

掃除も洗濯も終え、手持ちぶさたになった綾香は明久に調理を手伝おうと切り出した。機嫌が良かった綾香は、キッチンに二人で立って、おしゃべりしながら料理をする時間を楽しみたかったのだ。

だが、明久は先ほどのことをかなり悪いと思いこみ、どうにも罪悪感が強くたってしまったらしく、断られてしまった。

。

そのことに不満を覚えるが、今回は仕方ないと綾香は引き下がる。

そうこうして出来上がったのは、明久特製パエリアをはじめとした料理の数々。

彼の作るパエリアは、彼自身の好物であると同時に、綾香の“大好物である。

”

買い物の内容からそれを察してはいた彼女ではあったが、いざ実物を見ればそのうまそうな彩りと匂いに、大量の唾が溢れてくるのを自覚せざるおえない。

と、綾香の対面に座った明久が神妙な様子で綾香を見つめてきた。

「アッキーどした？　早く食べよ……」

「さっきはゴメン！」

勢い良く謝る明久。これにはかえって綾香が困ってしまった。

「あ～別にもういいよ？　そんなに気にすんなよ従姉弟同士なんだし……」

「けど……」

「はいストップ。辛気くさいと飯がうまくなくなるよ。あたしがいいって言ってるんだからさ」

早く食おうぜ♪　と続けられて明久はきょとんとなる。

「……うん」

恥ずかしそうに小さく笑いながら頷いた彼を見て、綾香にも笑みがこぼれた。

そして立ち上がると、明久の隣に移動して着席する。

顔を見合わせ笑い合い、正面を向いて、手を合わせる。

『いただきます』
二人の夕餉が始まった。

「アッキー髪～♪」

ダボッとしたリラックスウェアをパジャマ代わりにした綾香が、ドライヤー片手に脱衣所から出てきた。

食事のあと、綾香が泊まりを言い出した時、あんなことがあったせいか、明久は最初相当渋っていたのだが、彼女に押し切られる形で承諾していた。

食事中も常時上機嫌だった綾香だが、今も鼻歌交じりなくらい上機嫌で、明久は不思議そうに彼女を見る。温風と冷風を交互に使い分け、手櫛で彼女の柔らかな金糸を梳いてやる。

その感触に、綾香は気持ち良さそうに目を細め、鼻歌を唄う。

それを聞きながら、明久は綾香の長くてボリュームのある髪を手入れしていく。

元がくせっ毛な為、ぞんざいにすれば絡まってしまい、大変なことになってしまう柔らかなそれを、丁寧に丁寧に扱う。

まるで金色の絹糸を扱うかのように、一本一本見ながら梳いていく。

照明に照り返った光で、金糸が柔らかい輝きを放ち、明久は目を細める。

そして髪から香るシャンプーの匂いと、彼女の体から匂う石鹸の香りを楽しむ明久。

彼の視覚と聴覚と触覚と嗅覚が、綾香という少女で埋め尽くされていく。

そして、その無防備な背中が、彼女の彼に対する絶対の信頼を表しているかのようで、それが明久には嬉しかった。

そんな風に手入れをして、はい終わり。と明久が言うと、綾香の背中が、彼の胸元に倒れ込んでくる。

そのまま明久の肩へ頭を預けた綾香は、その蒼い瞳だけで明久の顔を見上げた。
「なー、前も♪」
ちょっと楽しそうにしながら言う綾香に、明久は軽く笑って承諾すると、ソファにきちんと座り直した。
すると綾香がソファに、ころんと寝転がり、明久の太股を枕にして仰向けになる。
いわゆる膝枕だ。そのまま笑顔で、早く早くと蒼い瞳が催促してくる。
それを見下ろしながら苦笑いを浮かべ、明久は綾香の前髪を乾かし始めた。
顔にかからないよう、髪を傷めないよう注意しながらドライヤーを操る明久。
弱風で湿り気をとりつつ、御髪を梳いていく。
丁寧に……柔らかく……優しく……彼の指が、癖のあるシルクの糸を撫でていき、綾香は気持ちよさそうに目をつぶっていた。
そんな心地の良い時間を二人で過ごしたら、さらにくつろぎの時間へシフトする。
並んでソファに座り、テレビのバラエティ番組を眺めるふたり。
明久はソファのはじに体重を預け、若干仰向けのように斜めになりながら座り、綾香はそんな彼を背もたれ代わりに体を預け、明久の胸の辺りを枕にして頭を乗っける。
重なるように体をくっつけながら、ただただテレビを眺める二人。
時折、綾香が笑い、明久もつられて笑う。
ただそれだけの、優しい時間。
そんなひとときを二人で過ごす。
そうこうしているうちに、綾香が大きく口を開け、空気を吸い込んだ。
目の端をわずかに湿らせ、まぶたがちょっとだけ下がる。
そんな彼女のあくびを合図に、明久が、寝ようか？　と告げると、

綾香が、ん。と頷いた。
二人で連れ立ち、当たり前のように明久の寝室へ向かう。
「とぉー☆」
と、声を上げ、明久のベッドへダイブする綾香。そのまま転がり、毛布を体に巻き付ける。
「いや、さすがに今日は……」
ここまで来ておいて帰り道でのことを思い出したか、明久が躊躇する。
しかし綾香は気にした風でもなく、横になったまま布団を広げ、笑顔で小首を傾げながら、来ないの？　と蒼い眼差しだけで語った。
数瞬明久は迷うように視線をさまよわせ、頭を軽く掻いてから嘆息すると、誘われるようにベッドへ近づいた。
二人で布団を被り、一つの枕に二人で頭を乗せ、鼻先が付きそうな距離で笑い合う。
「……なあアッキー」
「ん？　なあに？　綾香」
彼女に声をかけられ、明久が応じる。
「清涼祭、楽しみだな☆」
「うん、そうだね」
楽しそうな綾香に、明久が笑いながら答えた。すると綾香は明久の体に、自分の肢体をくっつけるようにしながら彼を抱き締めた。
その行為に明久はわずかに驚くも、受け入れるように彼女の背中に手を回して抱き締める。
二人は、お互いの温もりと香りに包まれながら意識を落とした。

そして翌朝。
明久は、なぜか床の上で目を覚ました。

それからのFクラスの毎日はめまぐるしいものだった。
召喚獣喫茶のために教室を清掃し、内装を出来るだけ飾り付け、綾香が手配したテーブルと椅子を配し、パフォーマンスの練習と、給仕の訓練などを一致団結してこなしていく。
出し物ぎめの際はやる気の無かった雄二も、がぜんやる気になっており、率先して指示を出したりしていた。
そうして忙しくしているクラスの中でも、特に明久や綾香をはじめとした召喚獣で給仕をするメンバーは、居残り特訓までしており、毎日を忙しく過ごしていた。

そして、清涼祭初日。

「いつもはただのバカなのに、坂本の統率力って凄いわよね」
「たしかにね。普段はただのバカだけど」
小綺麗な喫茶店となったFクラスの教室で指示を出す雄二を見て、美波と明久がしみじみと言う。
しかし、そこに割り込む声があった。
「違うぞ美波、アッキー。雄二はバカじゃない……アホだ！！」
握り拳を作って力説する綾香。その背後に、『バーーン！！』の書き割りまで見えるほどの力の入れようだ。
「そ、そうなの？」
その綾香の迫力に、美波は気圧されつつ聞く。
綾香は、うむ。とひとつうなずくと、顔を背中の方へ巡らせた。
「ああ、にったん。もう良いよ～」

そう綾香が言うと、『バーーン！！』と書かれた背景が外され、一人の少年がそれを担いで向こうへ持って行く。
「セットだったんだ……」
それを見送りながらつぶやく明久。
そんな彼らの衣装もすでに自分の召喚獣と変わらないコスチュームになっている。
綾香は制服にガントレットとレガース。
明久は学ランに肩当てと籠手。
美波は軍服姿。
雄二は白ランで前をはだけていた。
さすがに武器は無いが、どれも作りのしっかりしたコスチュームで、簡単に破損したりはしなさそうだ。
「それにしてもよく出来てるわよね？　このコスチューム……」
「うん。裏地もきちんとしていて着心地も良いし……」
「あたしのガントレットとレガースも、ゴツい外見とは裏腹に軽いんだよな。どうやって作ったんだろ康太と美紀ちゃん」
『えっ？！』
自分たちのコスを観察しながら話していた美波と明久は、綾香の口から飛び出したコスチューム担当以外の名前に一緒に振り向く。
「あ、綾香？　それってDクラスの？」
恐る恐る訊ねる明久に、綾香は、うん。と首を縦に振る。
「期間的に康太だけじゃ厳しいからヘルプ頼んだ。条件提示したら二つ返事だったよ♪」
言いながら小悪魔スマイルを浮かべる綾香。
それを見た瞬間、明久と美波の血の気が引いていく。
「……じょ、条件って？」
よせば良いのに聞いてしまう美波。
そんな二人の様子に綾香は楽しそうに口を開いた。
「女装アッキーとあたしのコスプレ撮影会」
聞いた瞬間床に突っ伏す明久。

「……それ、僕の承諾得てないよね……」
もう、怒るよりあきらめの境地で聞く明久に、綾香は小悪魔スマイルのまま明久の肩を軽く二回叩いた。
「まあ、あたしも一緒に恥かいてやるからさ。召喚獣喫茶の成功のために呑んでくれよ」
「頼む順番間違ってるからねっ?!　それから恥の度合いが違いすぎるからねっ?!」
思わず叫ぶ明久だが、綾香には暖簾に腕押し、柳に風だ。
一方美波は、明久に哀れみの視線を送りつつ、胸を撫で下ろしていた。
「と、とりあえずウチは助かったみたいね……」
つぶやいた言葉に、綾香の耳が反応する。
「ちなみに、『お姉さまがソデを通したコスはすべて美春のものですわっ！　それを呑んでくれるなら、玉野さんがFクラスのコスチュームに全力を注げるよう美春が代表を説得しますわ！』だってさ。美波♪」
「聞こえないっ！　ウチにはなにも聞こえなかったわ！」
全力で聞こえなかったことにする美波を見て、楽しそうにする綾香。
そこへ白い袴姿の秀吉がやってくる。
「なにを騒いどるんじゃ？　おぬしらは」
「……ちょっと世の理不尽さにね……」
不思議そうな顔の秀吉に、明久が答える。
と、綾香が目を光らせた。
「お。似合ってんじゃん秀吉♪　かっちり決めれば、きっとかっこいいぞ？」
「む？　そ、そうかの？　まあワシのパフォーマンスではきっちり演舞させてもらうぞい」
「おう♪　楽しみにしてるな☆」
綾香の言葉に、秀吉は脇を締めて拳を握りしめた。

だい☆ななじゅうさんもん♪（前書き）

今回は、驚愕の出来事が起こります♪

そんな風に騒ぐ綾香達に、黒い影が近づいた。
「……料理も完璧」
「！」
聞こえた声に、綾香と明久が素早く振り向き、鋭く目を細める。
そこにいたのは、トレーを手にし、忍者の黒装束をまとった康太だ。
「ふぅ」
「脅かすなよ康太～。そんなんだからムッツリって言われるんだぞ☆」
「……そんな事実はない（ブンブンブン）」
明久はホッと息を吐き、綾香は楽しそうに康太をからかう。
が、康太は右手と頭を振って否定する。そんな状態でもトレーがまるでテーブルに置かれてるかのように安定しているあたりはさすがと言えよう。
そんな一幕がありつつも、トレーをみんなの方へ差し出す康太。
「……試食用」
載せられているのはスイーツをはじめとした軽食類だ。
「へえ、おいしそうじゃん♪」
「うむ、これはワシらで食べてしまっても良いのかの？」
「……（コク）」
「じゃあ、遠慮無く頂こうかしらね」
綾香、秀吉、美波がそれぞれスイーツに手を伸ばす、ミニプリン、ゴマ団子、ストロベリーサンドとバリエーションは豊富だ。
「……おっ？！　なかなかうまいぞ？　このプリン。てーか、このカラメル手作りじゃないか？　ウチのクラスに作れる奴居たんだな」
「ふむ、ゴマ団子も表面はカリカリ、中はモチモチで良い食感じゃ。

甘過ぎんところも良いのう」
「このイチゴサンドも良いわね♪　生クリームが甘すぎないからイチゴの甘酸っぱさが出ていておいしいわ♪」
　Fクラスの美少女三人から絶賛され、康太もまんざらでもないような顔になる。
　女の子はやはり甘いものに目がないようだ。
「お茶もなかなかうまいのう」
「紅茶も良い香り……」
　試飲のためのお茶や紅茶も好評で、秀吉と美波はトリップ状態だ。
　そんな三人の様子に明久は顔をほころばせた。
「へえ、それじゃあ僕も貰おうかな」
　そう言ってトレーに手を伸ばし、カップケーキを一つ手にした。
「……あむ。うん、おいしい♪　甘すぎないあたりは男性にも好評になるかも……って、どうしたのさ？　ムッツリーニ」
　カップケーキを絶賛する明久の姿に、なぜか康太が不思議そうな顔になっており、明久は首を傾げた。
「……そのカップケーキには見覚えがない」
「へ？」
　康太の言葉に、明久は呆気にとられた。すると秀吉が何かに気づいたようになる。
「おお……見覚えのあるカップケーキじゃと思っておったが、それは姫路が作った奴じゃな」
『えっ？！』
　秀吉の言葉に、あの悪夢を経験している四人が異口同音に声を上げた。
「ほ、ほんとに瑞希が作った奴なの？！」
「う、うむ。間違いないぞい」
　綾香に凄い剣幕で詰め寄られ、秀吉が頬に朱を散らしながらうなずいた。
　それを聞いた美波と康太は信じられないものを見たような顔で、

明久が手にしているカップケーキを見つめる。
「こ、これを姫路さんが……？」
「あ、アッキーあたしにも一口」
言うが早いか、綾香が明久の手の中のカップケーキに食いつく。
そして、頬にクリームを付けたままむぐむぐと口を動かした。
「……お、おいしい……」
半ば呆然となる綾香。
「でしょ？　まさか姫路さんがこんなにおいしいカップケーキを作るなんて……」
その場のメンツは動揺を隠せない。なぜなら、あのケミカルクッキングの場に居合わせたもの達だからだ。
と、五人の背後から声がかかった。
「あれ？　みなさんなにをしてらっしゃるんですか？」
『！？』
その声に、五人の間に緊張が走った。
「ひ、姫路さん……」
振り返った明久の目の前に、鎧をまとったピンクブロンド少女の姿があった。
「あ、試食ですか？　私にも一口……！」
にこやかに試食会の輪に加わろうとする瑞希だったが、明久が手にしたものを見て、息を呑んだ。
「あ……。それ……」
「え？　あ、ああこのカップケーキ、もしかして姫路さんが？」
怖がるような瑞希の声に、明久は努めて明るく訊ねた。
すると瑞希はおずおずとうなずいた。
「あ……。は、はい。そ、そのどうでしたか？」
「え？　食べれたよ？　あいたっ？！」
探るように聞いてきた瑞希に、明久は素直に答えるが、即座に綾香に叩かれた。
「ったく、アッキーは……。うん、おいしかったよ？　瑞希☆　も

っと食べたいくらいだよ♪」
「ほ、ほんとですかっ？！　綾香ちゃん！」
綾香の感想に、瑞希は曇り空からお日様がのぞいたかのように顔を明るくして喜んだ。

「なにやってるんだ？　お前ら」
明久と綾香が瑞希のカップケーキを誉めているところへ掛かる声。
雄二だ。
「ん、うまそうだな。ひとつ貰うぞ？」
言いながら明久の手にした食べ掛けを、ひょいと摘んで口の中に放り込んだ。
『あ。』
明久、綾香、秀吉が同時に声を上げた。
そう、明久が持っていた奴は、さきほど“綾香がかじりついたもの”だ。
「ほう、なかなかうまいじゃないか。甘すぎないし、これなら男子にも……ってどうした？」
カップケーキを誉めようとした雄二は、自分を見つめる彼らの様子に訝しげになった。
明久と綾香は、硬い笑顔。
秀吉と康太は、殺意あふれる笑顔。
「雄二、お主良い度胸じゃな。ワシの目の前で、綾香が口をつけたカップケーキを食らうとは。よほど命が要らんと見える」
「……異端者には死を！」
秀吉と康太の言葉に、雄二の目が点になり、意味を察して顔が赤くなり始める。
「は？　夏目が？　ま、待て知らなかったん……」
言い募ろうとする雄二だが、嫉妬にまみれた秀吉が聞くはずもない。
「問答無用！　異端審問会！！」
『おおーっ！！』

秀吉の号令に応じ、黒覆面の怪集団が姿を見せる。
「なっ?!　お前ら?!」

『おう坂本ぉ』
『いいご身分じゃねえか』
『よりにもよって、綾香ちゃんとか、間接……っきしょう!』
『ぬしはやってはいけないことをしたのじゃ。相応の報いを受けるが良い』
『……万死に値する!』

血涙流しながら雄二を包囲する秀吉以下異端審問会メンバー。
そのプレッシャーに、さしもの悪鬼羅刹もたじろいだ。
「く、くそっ!（ダッ）」
周囲を見回し、包囲網が完成する前にダッシュする雄二。
しかし彼らが見逃すはずもない。
「むっ?!　逃がすでないぞっ!!」
『坂本を殺せえぇっっ!!』
秀吉の号令のもと、追撃戦を開始するFクラス異端審問会メンバー。

ここにデスチェイスが開始された。

そんなやりとりに置いて行かれてしまう明久、綾香、瑞希、美波と、準備に掛かりきりで乗り遅れた数人。
「あ、あはは。ま、参っちゃうな?　間接キスとか」
綾香が少しだけ頬に朱を見せながら、瑞希に苦笑いしてみせる。
それに対して瑞希も美波もどう返して良いかわからず、曖昧に笑う

こととしかできなかった。
仕方なく綾香は明久の方へ振ろうと彼の方へ向き直った。
すると、少年の人差し指が、綾香のくちびるに触れた。
「！」
突然のことに驚く綾香。
そして、指が彼女の唇をなぞり、口の端から頬へと流れ、そこに付いていたクリームをすくい取った。
そのままその指を自分の口に持っていった明久は、そのまま指をくわえ、クリームを舐めとる。
「クリーム付いてたよ？　綾香」
そう言って笑顔を向けてきた明久に、綾香の胸の奥のビートが上がった。
「あ……、うん」
それだけつぶやき、綾香は手で口元を隠すように押さえる。
そんな彼女をそのままにして、明久は康太から押しつけられたトレーを片手に厨房の方へ向かった。
それを半ば呆然と見送る綾香。その横で、美波が落ち込み、瑞希が少し楽しげに笑う。
そんな彼女たちに気づいて、綾香は苦笑いを浮かべた。

パーテーションで区切られた簡易厨房までやってきた明久は、トレーを置くなり真っ赤になる。
「なにやってるのさ！　なにやってるのさ！　なにやってるのさっ！！　僕はぁっ！」
先ほど綾香にしたことを思いだし、身もだえる明久。
あのとき、雄二が綾香が口をつけたカップケーキを食べたのを見て、明久は“面白くなかった”。
そして、少し照れたような綾香の姿を見たとき、胸の辺りがモヤ

ッとした。だからなのか、明久は綾香のくちびるに上書きするように指で撫でた。

付いていたクリームなど言い訳にすぎない。

「はあ……。ほんと、何がしたいんだろ？　僕はさ……」

自問する声に、答えるモノは居なかった。

結局、デスチェイスは長続きしなかった。
職員室での打ち合わせを終えた、鉄人西村に制圧されたからだ。
「……まったく貴様らは。こんな日ぐらい落ち着いて行動せんか。これでは安心して見回りに行けんではないか」
嘆息しつつ呆れたように言う西村。その言葉を聞いて、綾香は、おや？　っとなった。
「あれ？　鉄っちゃん先生一日教室にいてくれるんじゃないの？」
不思議そうな顔で訊ねる綾香に西村の顔が済まなそうになる。
「西村先生だ。うむ、済まんな。最初はそういうつもりで先生方と話を着けてあったんだが、今朝になって教頭から見回りに出るように要請されてしまってな。なるべくこちらにも時間を割けるようにはしたんだが……」
一日中とはいかなかったらしい。
それを聞いて、綾香は少し思案気になり、雄二へと視線を転ずる。
ボロボロではあったが、彼も西村の話に何かを感じたようで、あごに手を当てて黙考中だった。
綾香はそれを確認して西村へ視線を戻した。
「うん。それじゃあしゃーないなあ。代わりの先生は来てくれるの？」
「ああ、福原先生が来てくれることになった。迷惑をかけるなよ？」
西村に釘を刺された綾香は、ほーい♪　っと返事をしながら片手を高々とあげた。
するとそこへ、ぼろ雑巾のようになった雄二がやってきた。
「つつっ。ひでえ目にあったぜ。ま、それはともかく喫茶店はいつでもいけるな？」
「ああ、大丈夫だ」

「……料理もばっちり」
喫茶店の状況を聞いてきた雄二に、須川と康太が答えた。
それを見てうなずく雄二。
「よし、少しの間喫茶店は須川とムッツリーニに任せる。頼んだぞ二人とも。俺と明久と夏目と秀吉は召喚大会の一回戦を済ませてくる」
そう言って二人の肩を叩いた。
すると美波が不思議そうな顔になった。
「あれ？　アンタたちも召喚大会に出るんだ？」
美波は、確認するように明久の顔を見ながら聞いてくる。
対して明久はきょとんとした顔になった。
「う、うん。ちょっとね、色々あって出ることになったんだ」
アイコンタクトで雄二と綾香に助けを求めるが、二人そろって楽しげにニヤニヤしている。その姿に、明久の奥深いところで何かざわめくのを感じた。
しかし、そんな明久の様子に構わず美波が探るような声を出す。
「まさかとは思うけど……賞品が目的とか？」
「えっと、とりあえずそうなるかな？」
美波の勢いに気圧されるように答える明久。もちろん嘘ではないが、話せない事情を抱えている後ろめたさからか、歯切れは悪い。
それだけではなく、向こうで雄二と綾香が何か話しているのも気にかかった。
少し楽しげな二人の様子が、なぜだかとても嫌なモノに見えた。
「誰と行くつもりなの？　吉井」
「へ？」
突然に耳朶を打った美波の声に、間抜けな声を上げる明久。
「『へ？』じゃないわよ。誰と一緒に行くのかって聞いてるのよ」
明久が上の空だったのが気に入らないのか、美波は声に険を含ませてきた。一瞬、何のことかわからなかった明久だったが、如月グランドパークペアチケットのことだと思い当たった。

「あ、あーいやそれはその……」
明久は、根が素直な人間だ。故に嘘が苦手である。
だからこそ言い淀んでしまった。
と、そこへ割り込む声。
「あー。アッキーな。雄二と行くみたいだぞ☆」
「って、何言い出すんだよ綾香はっ?!」
綾香の言葉に思わずつっこむ明久。しかし、その肩に手が回された。
雄二だ。
「俺は何度も断ってるんだが、しつこくってな」
雄二の言葉に、美波が目を丸くする。
「よ、吉井。あんた坂本とペアチケットで『幸せになりに』行くの……？　綾香ならまだしも、坂本となんて……。あの噂はやっぱり事実だったってこと？」
「待つんだ島田さん。今とても聞き捨てなら無いことを口走ってなかった?!」
美波の言葉にあわてる明久。
そこに雄二が追撃してきた。
「俺も常々もう少し女に興味をも持てと言ってるんだがな。まあ、簡単にできたら苦労しないだろうがな」
「それはフォローでも何でも無いだろっ?!　アホ雄二っ！」
叫ぶ明久を無視した雄二は、秀吉を連れて教室を出ていった。
「と、とにかく誤解だからねっ?!　綾香、行こう」
「オッケーアッキー♪　最初っから、クライマックスでいこーぜ☆」

「それでは、試験召喚大会一回戦を始めます。三回戦までは一般公開もされません。リラックスして全力を以ていきましょう」
校庭に作られた特設ステージ上で、立会人の数学教師木内教諭が、そう告げる。
一回戦は全三十二試合。かなり時間が掛かるだろう。

綾香と明久のいるブロックはCブロック。
ステージ上で対戦相手と対峙する二人。
「いよいよ始まるね」
「そうだな♪　楽しみだ♪」
明久の言葉に、綾香が笑う。
相手はそれを余裕と受け取り、顔を険しくする。
『Fクラスのくせに』
『余裕ぶりやがって』
そんな二人のクラスは二年のBクラスとDクラス。
成績的にも上の方を狙えなくもない。
その二人が同時に言霊を口にした。
『試獣召喚（サモン）！！』
二つの魔法陣から、二体の召喚獣が顕れる。

【数学　Bクラス　山本昇　１６５点　＆　Dクラス　小橋健　１１３点】

山本の召喚獣はブロードソードに金属製の鎧、小橋はクロスボウに皮鎧だ。
飛び道具持ちの召喚獣は非常に珍しく、有利でもあるが、操作が

難しい。
ある程度は自動でやってはくれるが、狙ったところに当てるにも一苦労だ。
そんな二人の召喚獣を見て、綾香と明久が笑い合う。
「よっしゃ行くかアッキー☆」
「うん！」
ウインクする綾香に、明久が笑顔でうなずく。
『試獣召喚（サモン）！』
異口同音に紡がれた言霊に、魔法陣が二つ形成され、それが重なり、大きな魔法陣となり、二匹の召喚獣が姿を顕した。
「ん？　よくみりゃ召喚獣と同じ格好してないか？」
「そうだな。なんか意味あるのか？」
綾香と明久の格好が召喚獣と同じなのを見て、山本も小橋も不思議そうな顔になった。
ステージ周辺で試合待ちをしている生徒たちも興味深そうに綾香と明久を見る。
と、綾香の蒼い眼が☆マークになった。
くるんと振り返って両手を広げると。
『みんなー♪　二年Ｆクラスは召喚獣喫茶【サモン！】をやってるから来てくれよな！　召喚獣の芸や給仕姿が見れるぞ～♪』
よく通る声で宣伝する綾香。
それを聞いた生徒たちが話始めたり携帯を開き始めたりしている。
それを見た綾香は宣伝の効果アリと見て、満足げにうなずいていた。
そんな彼女に声がかかった。
「あのー、そろそろ試合を始めてくれませんかね？」
立ち会いの木内教諭がじれたようだ。
そのときになって、山本らは綾香と明久の点数に気づいた。

【数学　Ｆクラス　夏目綾香　３８８点　＆　Ｆクラス　吉井明久

１０４点】

「あっ？！　そういや夏目は数学が得意だって……」
「仕方ない、俺が吉井をやるから山本はなんとか夏目を押さえてくれ。二対一ならなんとか……」
綾香の点数に作戦を相談し始める二人。
一方、明久は綾香をジト目で見ていた。
「……綾香、この間のテスト手を抜いたね」
「～♪　～♪」
明久の追求に、綾香は明後日の方を見ながら口笛を吹く。
その様子に嘆息する明久。
それを見て綾香は伐の悪そうな顔になった。
「だって～、この間のテスト、解きがいのある問題が少なくってさ～。いまいち乗り切れなくって……」
「……すいません。つまらない問題ばかりで」
綾香の言葉に落ち込む木内教諭。
「い、いえ、先生のせいじゃ……」
「次回はもっと面白い問題作ってね～♪」
「ハイガンバリマス……」
フォローしようとした明久の横で、綾香はあっけらかんと言い放ち、さらに落ち込む木内教諭。
その隙をついて、ブロードソードの召喚獣が綾香の召喚獣へ切り掛かった。
クロスボウも横に走りながらクォレルを射かけてくる。
綾香の召喚獣は、その剣の側面を蹴り飛ばし、流れるよう顔面へガントレットをはめた腕をたたき込むと、たたら踏む山本の召喚獣の正面から、コマが回るように回転しつつ後ろへ回り込み、抜き放った柳葉刀の刃で相手召喚獣の首筋を撫でるように切り裂いた。
たったそれだけで山本の召喚獣は戦死してしまう。
一方明久は、自分へ放たれるクォレルを丁寧に木刀でたたき落と

しながら小橋の召喚獣に近づいていく。次弾をセットするのに手間がかかるクロスボウでは、余程操作がうまくない限り連射など出来ない。

山本が壁になり、小橋の装填時間を稼いでいれば、また違う形になったかもしれないが、綾香の点数に浮き足立ち、二手に分かれた時点で結果は見えていたといえる。

こうして、明久と綾香の一回戦は、二人の真価を見せることなく終了し、二人は早々に教室へ戻っていった。

一方、雄二&秀吉のコンビは、綾香が教室に戻ったことに気づいてなかった秀吉が大活躍を見せ、Bクラス女子のトリプルスコア相手に善戦し、その隙に相手の一人を倒した雄二が加勢して勝利を納めていた。

だが、綾香が見ていなかったことに気づいた秀吉は、ハンパなく落ち込んだという。

教室に戻った綾香と明久。
宣伝効果かはたまた口コミか、『召喚獣喫茶【サモン！！】』は盛況なようだった。
喫茶だけではなく、召喚獣によるパフォーマンスを入れたことで、休憩だけではなく、パフォーマンスを見に来るお客も多いためだ。
「おっ？　吉井に綾香ちゃん、戻ってきてくれたか」
「……助かった」
二人の姿を認めた須川と康太が、安堵の息を吐く。
「何かあったの？」
「トラブルは起きてないみたいだけど？」
声をかけてきた二人に、明久は首を傾げ、綾香が周りを見回す。
「いや、トラブルは起きてないんだが……」
「……『召喚獣給仕セット』が大人気」
「へ？　あれ一セット千円なんて設定だよ？　そんなに出てるの？」
素っ頓狂な声を上げた明久に、須川と康太がうなずく。
「初っぱなに注文したお客さんを見て、自分もって人が多くてな。俺が出ずっぱりなんだ。その間ムッツリーニが厨房を一人で切り盛りしてくれてな」
「……さすがに疲れた」
召喚獣で給仕に出れるのは七人。わざわざ高い値段設定にしたのは、注文を抑えることで対応する人数の少なさをカバーするためだったのだが、召喚獣が給仕する姿に、お客の財布の紐は緩みっぱなしのようである。
「今も三組待ち状態なんだ。すぐに入ってくれるか？」
「おっけー☆　行こうぜアッキー♪」
「わかった！」

須川に答えながら、綾香と明久はホールへ向かう。
そこは、通常の空間とは違う召喚フィールドに包まれており、店の内装と併せて幻想的な空間となっていた。
そんな場所でお茶を楽しめるのだ、人気が出ないはずもない。
そして。
『試獣召喚（サモン）！！』
ふたりが歩きながら紡いだ言霊に応えるように魔法陣が広がり、軽い破裂音を響かせながら二体の召喚獣が飛び出し、バク宙をし、着地と同時にポーズを決める。
綾香と明久が二人で決めた召喚時のパフォーマンスだ。
それだけでお客さんから感嘆の声が挙がり、拍手をされた。
そのまま二匹は用意されていた“召喚獣用”のエプロンを手に取る。
それをちまちま身につけるところすらも、お客さん達にとっては十分なパフォーマンスだ。
さすがの明久も後ろ手で結べず、綾香の召喚獣が紐をちょうちょ結びする。
それが終われば、今度は明久の召喚獣が綾香の召喚獣の背後に回って結んでやっていた。

『あの二匹、お互いのエプロンを縛ってあげてるわ』
『可愛い～♪』
『召喚獣さん達仲良しだね♪』
『そうね』

仲睦まじい二匹の姿に、お客さん達がハートを飛ばす。一方、須川は綾香と明久の召喚獣をみていて顔をひきつらせていた。
「しょ、召喚獣でちょうちょ結びなんてどうやるんだよ……」
それもわりかしテキパキ結んでおり、康太がそれを写真に収めている。

「……そのうち裁縫とか始めそうだな……」
須川のつぶやきをよそに、給仕セットの飲み物と軽食を乗せたトレーを自分の召喚獣に手渡した。
「はい、頼むよ？」
明久の言葉にうなずき、ちょこちょこと足を動かしながらトレーを運ぶ彼の召喚獣。
その横を、綾香の召喚獣がトレー片手にすいすいと移動していく。
そのままお客の待つテーブルにたどり着くと、そのままトレーを掲げた。
ん。と言わんばかりの召喚獣に、お客の顔が綻び、トレーを受け取りながらちっちゃな綾香の頭を撫でた。
それを見ながら微笑む綾香。
と、隣に立つ明久の様子がおかしい。
何かに耐えるような、堪えるような、身悶えるような感じだ。
「どうした？　アッキー」
「い、いやなんでも……ほぅっ？」
小さく奇声を出した明久に、綾香が訝しげになった。
と、あることに思い当たり、周囲を見回すと、それをみつけた。
明久の召喚獣が、給仕した先のお客さんに捕まっていた。
大学生とおぼしき女性ばかり三人に抱っこされたり、撫でこすられたり、頬摺りされたりしていた。
ここで思い出されるのは、明久の召喚獣の仕様だ。
観察処分者専用の、フィードバック付きの召喚獣だ。
つまり、実際の何分の一かではあるが、触られた感触もフィードバックされる。

ということは、明久は女子大生三人にもみくちゃにされていることにもなる。
それに思い当たった綾香は、なんだか面白くなくなり、明久をジト目で睨んだ。

だが、明久はそれどころではない。感触を感じられるとは言え、それは何分の一程度。
どちらかと言えば羽毛か何かで触られてるようなレベルで、気持ちよいと言うより、こそばゆくくすぐったい感じだ。
しかも感覚が繋がっていると知られれば、なにを言われるかわからない。
明久は必死で耐えていたのだ。
不意に、二の腕にはっきりとした柔らかい感触を感じた。

フィードバックよりはっきりした感触に、明久がそちらを見ると、綾香がみんなからは分かりにくいように、ぴったりくっついてきていた。
「ど、どうしたの？　綾香」
「べっつにー」
彼の言葉にそっぽを向く金髪の少女。
その様子に明久は？マークを飛ばすことしかできなかった。

「そうか、『召喚獣給仕セット』はそんなに出てるのか」
少しして戻ってきた雄二は、状況を聞いてあごに手をやる。
その隣で説明をしていた綾香が嘆息した。
「うん。あたしとアッキーが戻るまで須川が出ずっぱりって言ってたけど、こんどはあたしらが出ずっぱりだよ」
明久と二人、召喚獣での給仕を始めた綾香だったが、二人の操作が巧みすぎて、一番人気になっていた。
お客によっては、ペア注文までしてくる人も出てきたため、二人は大忙しだ。
今も明久をはじめとして瑞希や美波、秀吉も召喚獣での給仕にかかりっきりだ。
「まあ、仕方ないか。最悪召喚大会は俺と秀吉で何とかしよう」
雄二にそう言われ、綾香は軽く苦笑いしながら、まあギリギリまで粘ってみるよ。と告げ、次の給仕に向かう。
そんな盛況な『召喚獣喫茶【サモン！！】』だが、給仕のみならずパフォーマンスも好評である事を記さねばならないだろう。
バク宙をはじめとする運動系のパフォーマンスからジャグリング。武器を振り回す演武などを披露するFクラスの面々。
むろん、準備の開始が遅かったことから、十分な練習は出来ていない。
バク宙に失敗して顔面から床に落ちる。
演武で武器がすっぽ抜け、隣の奴に刺さる。
組体操を組みきれずに崩れる。
しかし、小さな召喚獣がちょこまか動き回りながら一生懸命取り組む姿がお客さんに好評だ。
まるで小さい子を応援するように、頑張れ頑張れ。と応援する人

もいれば、失敗しても励ます人もいる。
何度も失敗した組体操が組み上がったときなど、大歓声が上がり、それに引き寄せられる形でさらにお客さんがやってくる。
店は大成功間違い無しだった。

「では俺はこれから見回りに行く。くれぐれも騒ぎを起こすんじゃないぞ？　夏目、坂本」
そう言って西村はいったんフィールドを取り消し、福原教諭に交代すると、綾香と雄二を見ながら言う。
「って、なんであたしの名前が最初に出てくんのよっ！？」
「おまえが一番のトラブルの元だからだろうが」
その言葉に綾香が声を上げ、雄二がジト目でつっこんだ。
「なに？　喧嘩売ってんの？　アホ雄二」
「上等だエセ外人。女だからって容赦しねえぞ？」
二人でガンをくれあう綾香と雄二。
それを見て西村がため息をつく。
「やめんかバカもん。お客さんも見ているぞ？」
「う〝っ？」
「む〝っ？」
努めて平静に言った西村に、綾香と雄二は共に詰まった。
喫茶店を成功させるという目標はふたりとも同じだ。
トラブルを起こしては元も子もない。
仕方なく矛を収める二人。
もっとも。
「（いつか決着着けてやるかんな）」
「（そいつは俺の台詞だ）」
小声でのやりとりは続いていた。
それを耳にしつつも、西村は表面上は何ともないように取り繕っ

ている二人に嘆息しつつ教室から出ていった。
これで一時間は戻ってこない予定である。
と、新たなお客が入れ替わりに入ってきた。
「おう、二人だ！」
「早く案内しろよ！」
声を上げるのは、坊主頭とソフトモヒカンの男子生徒二人だ。
「す、すみません。お待たせしました」
そんな二人に対し、瑞希が慌てて接客に向かい、頭を下げる。
だが二人は鼻を鳴らすだけだ。
「とろとろしてんなよっ！」
「早く案内しろよ！」
「ハ、ハイ……」
高圧的な二人に萎縮してしまう瑞希。
その様子に、綾香は顔をしかめた。
この手の客は、騒ぎの元になりやすい。そうそうにお引き取り願うのが理想だが、まだその段階ではないだろう。
綾香がチラリと雄二を見ると、彼も同じ考えのようでうなずいてきた。
それを受けて綾香が足を踏み出した。
「大変失礼しました。お席に案内します」
「あ、綾香ちゃん……」
縮こまっている瑞希の横からにこやかな営業スマイルで声をかける綾香。
瑞希がそちらを見れば、綾香が軽くウインクしてきた。
それで交代してくれるらしいと気づいた瑞希は、胸をなで下ろした。
「チッ、どっちでもいいから早くしろよな！　どうした？　夏川」
「お？　おお、何でもねえ」
組みしやすそうだった瑞希から綾香に交代したことに忌々しげになるソフトモヒカン。

と、相方の坊主が静かなのに気づいてそちらに声をかける。
すると、ボーッと綾香を見ていた坊主が我に返った。
そんな二人に、綾香はおやっ？　となったが、気を取り直して席に案内し始めた。

『しっかしよくやるよなあ！　ゴミ溜めみたいな教室で食べ物扱うなんてよお』
『まったくだぜ！　去年見に来たときなんざキノコが生えてたぜ！』

席に案内されたソフトモヒカンと坊主頭は、注文を取った綾香が下がってから騒ぎ始めた。
内容はFクラスの教室が、いかに汚いかというものだったが、それ以上に耳障りな騒音のような声が不快感をあおる。
仕方無しに綾香が注意に向かう。
「お客様。申し訳ありませんが、ほかのお客様のご迷惑になりますのでお静かに願います。それに教室はきちんと清掃消毒し、先生方に確認していただいております」
『だぁっ？！　口答えすんのか？　俺らは三年だぞ！　生意気な口を利くんじゃねえ！　なあ、夏川！』
「お？　お、おう、すまねーな。静かにするからよ……」
激高したモヒカン……常村が、相方の坊主……夏川に同意を求めるも、綾香に見とれていたらしい夏川は、素直に謝ってしまった。
「はい♪　ありがとうございます♪」
そんな夏川に、綾香は笑顔で礼を述べると下がっていった。
これに慌てたのは常村である。
「って、なに謝ってんだよ夏川！」
「い、いやすまん常村」
戸惑うように謝る夏川。
そんな彼らをチラリと横目で見て、綾香は首を傾げた。
と、そこへ明久が近づいていく。
「大丈夫だった？　綾香」

「ん？　大丈夫だよアッキー♪　坊主頭の方は意外と素直に謝ってきたし」
そう言って彼に笑顔を向ける綾香。それを見た明久は安堵の息を吐く。
しかし、その様子を見ていた夏川の顔が険しくなった。

『あ、あの野郎。あんな天使みたいな子と、あんなに仲良く……』
『な、夏川……。ま、まさかお前あの子に……』
『う〝？　い、いやまあな……』
『そういや、お前が落としてくる保健体育の参考画像は、修正の無い金髪ねーちゃんばっかだったな……』
『それ今言うとこか？！　常村！？』
『ま、まあ俺もあっちのミディアムボブの子が……』
『……』
『……』
『さ、作戦を続けよう……』
『そ、そうだな……』

「な、なんじゃ？　いま寒気が……」
「ひ、秀吉もか？　あたしも寒気が……」
そろって身を震わす秀吉と綾香。
「って、どうしたのさ？　秀吉」
「お？　おおそうじゃった。『召喚獣給仕セット』の指定注文じゃ。明久、お主が十二番テーブルで、綾香が三番テーブルじゃ」
それだけ告げると、秀吉も召喚獣を連れて『召喚獣給仕セット』を取りに向かう。
どうやら彼も指名が入ったらしい。
もともと指名制では無かったのだが、明久&綾香ペアの注文に始

まり、小さい子や女性が好みの召喚獣での給仕を頼むようになって暫定的に指名できる形になったのだ。
おかげで明久、綾香、瑞希、美波、秀吉は引っ張りだこである。
反面、雄二と須川の手が空くようになり、ホールや厨房に詰めるようになったのだが、雄二はともかく、須川は軽く落ち込んでいた。
そんな彼の事情は置いておくとして、セットの軽食を運ぶ明久の召喚獣とそれを操作しながら移動する明久。
彼らが、例の二人の横を通過しようとしたとき、それは起きた。
「へっ」
明久が、常村の薄ら笑いに気づいたときにはもう遅かった。
足に衝撃を感じたかと思ったら召喚獣が転んで、運んでいたトレーが宙を舞う。
「しまっ……？！」
思わず声を上げそうになった明久が見たのは、己の召喚獣の足を引っかけるように出されたソフトモヒカンの足。
派手な音と共に食べ物と飲み物が床に散らばり、明久の召喚獣がころける。
その衝撃を我慢しつつ、立ち上がらせようとした明久の背中に衝撃が走った。
「がっ？！」
少しよろけながらも足を踏ん張る。
そして見た。
坊主の男の足が、明久の召喚獣の背中を踏んでいることに。
苦しそうな明久を見て、坊主が嫌らしい笑みを浮かべた。
「はあ、そういやお前、観察処分者だったな？　それじゃあフィードバックがキツいだろ？」
「う、ぐ……」
召喚獣を踏む足に力を入れていく坊主。それと共に明久の背中に感じる圧迫感が強まり、うめいた。
「アッキー！」

騒ぎを聞きつけ、綾香がやってくると、坊主は足を退かした。
そしてソフトモヒカンが忌々しそうに口を開く。
「はやく片づけろよな」
「まったく騒がしくしやがって。接客もまともに出来ないのかよ、観察処分者は」
そう言って、夏川は明久を嘲笑した。
しかし明久は、すみませんでした。と頭を下げ食器を片づけ始める。
不意に静かな気配が現れた。
「常村君、夏川君」
突然かけられた声にぎょっとなり、二人がそちらを向くと、そこには元Fクラス担任の福原教諭が佇んでいた。

「常村君、夏川君」
静かに響いた声に、二人がぎょっとなった。
「って、福原先生ですか……」
「お、脅かさないで下さいよ……」
振り向いた先に佇む、冴えない中年教師の姿を認め、安堵の息を吐く常村と夏川。
しかし、福原は構わず続けた。
「先ほどから見ていましたが、ふたりは行儀が悪いようですね？」
『ハア？』
福原の様子に、常村の顔が、なに言ってんだ？　コイツ。となった。
「いやいやいや福原先生、違いますよ。俺らは先輩として、コイツらFクラスのクズどもに現実を教えてやってんですよ」
「そうですよ。見てくれは体裁を整えちゃあいるが、ここはゴミ溜め教室。しかも、最低辺のバカの称号を持った“観察処分者”はろくに接客も出来ないクズの中のクズだ。そいつが社会に出て困んねぇようにしてやってんですよ」
へらへら笑いながら言葉を吐いていく二人。
Fクラス全体のみならず、周囲のお客からも嫌悪の視線が集中していることにも気づかず垂れ流していく。
その言い様に、綾香が奥歯を軋ませながら声を上げようとした瞬間。
一喝。
『黙りなさい！』

常夏はおろか、Ｆクラスの生徒やお客さん達までもが息を呑んだ。
『君たちは、自分達がどれほどみっともないことをしているのか分かっているのですか！　確かにＦクラスは成績に問題はある。しかし、彼らは力を併せてこの展示を成功させるべく努力しているのですよ？　それが実るかは彼ら次第です。ですが、それを踏みにじり、あざ笑い、邪魔をする。そんなことは許されることではありません！』
普段物静かな福原からは信じられないような力強く、良く通る声だった。
その勢いに呑まれた常村と夏川は、そこでようやく周囲の視線に気づいた。
「チッ、出ようぜ常村」
「ああ……」
色を無くして逃げ出す二人。
福原の制止する声をも振り切っての逃亡だった。
「やれやれ……。困った二人ですね。っと」
つぶやいた福原は周囲の様子に気づいた。
「すいません。年甲斐もなく声を荒げてしまいました。みなさん、お騒がせして申し訳ありませんでした。どうか、お気になさらずに生徒達の展示を楽しんでやって下さい」
少し照れたような顔で頭を下げる福原。
それに対して、お客さん達から拍手が巻き起こった。

『いいぞ！　よく言った！』
『良い先生で良かったね！』
『君、大丈夫だった？』

次々に福原や明久をはじめとしたＦクラスの生徒達に声が掛けられていく。
その事に、Ｆクラスの生徒たちは照れたように顔を赤らめた。

成績不良と学習態度不良のレッテルを貼られ、後ろ指さされる彼らが応援してもらったりする事などまれだ。

そんな中、福原はしゃがみ込んだ明久の元までやってくると、しゃがみ込んで彼の片づけを手伝い始めた。

「あ、ありがとうございます先生」

「いえ、これくらいお安いご用ですよ。それより、フィードバックの方は大丈夫でしたか？　吉井君」

「はい！　これでも結構鍛えてるんで、大丈夫です」

「そうですか。けれど、無茶はいけませんよ？　あなたを大事に思う人が心配をしますからね？」

笑顔で答えた明久に、微笑みを向けていた福原が、ついっと顔を上げ、つられて明久もそちらを見た。

すると、そこにはボリュームのあるくせっ毛の金髪少女が、蒼い眼差しを彼に向けていた。

「先生、替わります」

「はい、お願いします」

交替をかって出た綾香に、福原は柔らかくうなずいて立ち上がった。

替わりにしゃがみ込んで明久の片づけを手伝い始める綾香。

「なあ、アッキー」

不意に綾香が彼を呼ぶ。

「ん？」

それに応じつつも片す手は休めない。

「良い先生だな☆」

笑顔でそう告げてきた彼女に、明久は、うん、そうだね。と、笑顔で答えた。

「さて」
定位置に戻り、一息ついた福原。
ひとつうなずき、その手を懐にしのばせる。
出てきたのは携帯電話。それをプッシュし、どこかへ電話を掛け始めた。
「あ、西村先生ですか？　福原です。いえいえ、みんな真面目に取り組んでますよ？　で、ひとつお願いしたいことがあるんですが……」

「さて、そろそろ二回戦の時間だが、一辺に抜けてしまうとこちらの状況が悪くなる。そこでギリギリまで接客し、試合を終えたら即戻る方向で行こうと思う」

いよいよ二回戦の時間が押し迫り、雄二が大会参加者全員に向けて言葉を発した。

それに対してうなずいてみせる綾香、明久、瑞希、美波、秀吉の五人。

その顔は真剣そのものだ。

「まずはBブロックの明久と夏目だ。勝っても負けてもすぐ戻ってこい。俺らは四人ともDブロックだからあまり時間に差は付けられない。その間はお前たちと須川の三人で給仕セットの対応をして欲しい」

「忙しくなりそうだね？」

「全くだよ～。ちょっとくらい周りたかったのに」

雄二の言葉に苦笑いする明久。

綾香も両手を頭の後ろでくみながら嘆息する。

そんな綾香を見て雄二も苦笑いを浮かべた。

「まあそう言うな。タイミング見計らって一時間くらいは休憩できるようにしてやるから」

「へーい」

彼の言葉に、下唇を突き出しながら返事をする綾香。

明久はそんな彼女に行こうとうながした。

すると綾香はまずホールの方へ足を踏み出した。

『みんな～っ！♪　今からあたしたちは試験召喚大会の二回戦に行かなきゃいけないのっ！♪　だから、少しの間お休みさせてねえ☆　必ず勝つから、応援よろしく～～っ♪』

お客さん達に対し、明るく大きな声でそう言う綾香。
何事かと彼女の方を見たお客さん達は、笑顔でそれを了承し、口々に応援の言葉を口にする。
それに応えるように召喚獣と一緒に手を振る綾香。明久も同じように手を振りつつ教室の外へ向かった。
教室外の列にも説明をすると、やや残念そうにしていたが、大会を頑張るよう応援してもらえ、綾香と明久はなんだかうれしくなった。

会場に駆け込んだ二人を待ち受けていたのは、茶色い髪をソバージュにした気の強そうな少女と、艶のある黒髪の少女だ。
「遅いじゃないの綾香」
「あれ？　ヒロリンじゃん」
「ヒロリン言うなっ！！」
そこに居たのが顔見知りの少女だったのできょとんとなる綾香。
二年Ｅクラス代表、ヒロリンこと中林宏美。テニス部のエースとして知られる少女だ。
綾香なりに可愛いと思って付けた愛称は気に入らないらしい。
そのパートナーは同じクラスの三上美子。宏美のサポート役として、彼女を支えるＥクラスのナンバー２である。
「ま、いいわ。早速やるわよ？　試獣召喚（サモン）！」
「なんかすいません試獣召喚（サモン）」
一人でさっさと召喚を始めてしまう宏美。
その隣で、美子が苦笑い気味に謝罪しながら言霊を紡いだ。

【英語　Ｅクラス　中林宏美　１０３点　＆　Ｅクラス　三上美子　１１２点】

野球のキャッチャープロテクターに金属バットを持った宏美の召喚獣に魔法使いのような姿に本を持った美子の召喚獣、二人の使役獣が姿を顕し、その点数が表示される。
それを見た明久と綾香は視線を交わして笑い合いながら言霊を解放した。
『試獣召喚（サモン）！』
同時に紡がれたそれに呼応し、二つの魔法陣が展開、それが重なり、大きな魔法陣になる。
そこから飛び出すように姿を顕す二体の召喚獣。
くるんと同時に回転してから着地。二匹同時にポーズを決める。
その様子をぽかんと見る宏美と美子。

その二人の様子に、綾香が胸を張った。
「どう？　かっこいいっしょ☆」
自信満々な綾香に、宏美と美子が微妙そうになり、明久が苦笑いした。
「……あんたって、いつも妙なところに労力を割くわよね」
自慢げな綾香を見た宏美が盛大なため息をついた。

「いくわよ！」
そう叫んだ宏美は、綾香と明久の点数が表示されるのを待たずに召喚獣を突撃させた。
バットを振りかぶり襲い来るそれは、全く迷いを見せずに二人へ踊りかかる。
その意外に鋭い一撃に、二人は左右に分かれるように飛んで回避した。
素早く着地し、綾香は柳葉刀を宏美の召喚獣の“背中”へ投げようとして気づいた。
宏美は、“綾香を無視”するように背中を向け、明久の方へ殴りかかったのだ。
それが意味することに気づき、飛来した攻撃を柳葉刀で弾いた。
そこには、手にした本を掲げた三上美子の召喚獣。
それは特殊な攻撃法を持つタイプ召喚獣だ。
掲げた本から、まるで魔法のようにエネルギーが飛んでくる。
「って、特殊能力っ？！」
あわてて召喚獣に大きく避けさせる綾香。
対して美子は次々エネルギーの塊を飛ばしてくる。
不意に、綾香は自分と美子の点数を見比べた。
美子が１１２、自分が１４６。差は大きくない。
と、綾香は、アレ？　っと首を傾げた。
特殊能力は４００点を越えなければ使用できない。
美子の点数では、使えるはずもない。
先程は弾くこともできた。
そもそも全く消耗すらしていないように見える。
そこまで考えが至って綾香は彼女の召喚獣を見つめた。

一方、明久は意外なことに苦戦していた。
「たあぁぁっ！！」
宏美の勇ましい掛け声に併せ、召喚獣がバットを振り回す。
そこに迷いは全く無く、異様に鋭い攻撃が明久の召喚獣を襲う。
振り降ろされたバットを木刀で逸らすが、即座に切り返してくる。
まるで攻撃が途切れない。
宏美自身なにも考えていない連続攻撃。どこを狙うとか次はどうするとか一切の迷い無くバットを振らせる。
さらにどういう訳か、宏美は切り返しが異様にうまい。
一撃を逸らしても弾いても、すぐに切り返してバットが飛んでくる。
ゆえに、明久の得意なカウンターを決めづらい。
明久の目が、彼我の点数を確認する。
宏美の１０３点に対し、己は６１点。
二倍近い。
明久は顔をしかめた。
その隣では綾香が真剣に美子を観察していた。
そして。
「わかった！　これ、ガワが魔法っぽいだけだ！」
その言葉を裏付けるように、綾香の召喚獣が、美子の召喚獣が放つエネルギーの塊を、真っ二つに断ち切った。
「魔法っぽいのは外側だけで、その実中身は普通の飛び道具だ！　そうだろ？！」
「バレちゃったか。けど、普通の射撃武器より連射は効くんだよ！　それ！」
美子の言葉に併せ、連射速度を高める彼女の召喚獣。
その弾幕を、綾香は召喚獣にステップを踏ませるように避けさせる。
「うくっ？！」
その動きに、美子は思わず息を呑んだ。

そこを狙い澄ましたかのように、飛んできたエネルギーの塊を、スケートの選手のようにスピンしながら避けた綾香の召喚獣が、その勢いのまま柳葉刀を投じた。
それは狙いあたわず美子の召喚中へ向けて飛翔する。
「わわっ？！」
それを見て、美子はあわてて避けさせようとするが、操作になれていないため召喚獣が魔法使いの衣装の端を踏んでしまい、つんのめって転んだ。
その隙を綾香が逃すはずもない。
投げた柳葉刀を引き戻しながら、瞬時に間を侵略して美子の召喚獣に肉薄する。
戻ってきた得物をキャッチし、そのままのたくた起きあがろうとしている美子の召喚獣の胸へと突き込んだ。
防具らしい防具を身につけていない彼女の召喚獣はバターにナイフを入れるよりたやすくその刃を受け入れ、ひどくあっさりと戦死した。
それに気づいた宏美が声を上げる。
「美子っ？！」
パートナーがやられたことで、初めて彼女の集中が切れた。
明久はその隙を見逃さずに緩んだ連撃の隙間に踊り込む。
力強く踏み込みながら、木刀が素早くコンパクトに振られ、宏美の召喚獣の右腕を叩いた。
その衝撃で、彼女の召喚獣の連撃が完全に止まった。
「あっ？！　しまっ……」
みなまで言わせず、明久の召喚獣の木刀が、袈裟、逆袈裟、横薙ぎと流れるように宏美の召喚銃を撃ち据えながら、その背後へ抜ける。
そのまま流麗な流れに身を任せるように振り向きながら、木刀を召喚獣の後頭部と首の間へと突き込んだ。
その一撃が宏美の召喚獣を貫いて点数が０になると、彼女の召喚

獣はその身を光の粒子に変じて消え去った。

『勝負有り！　勝者、夏目、吉井ペア！！』
立ち会いの教師の宣告を聞いた宏美は、決した勝負に悔しそうに目を閉じた。
「く……っ、さすがは綾香ね。けど次は負けない！　……って居ねえしっ？！」
綾香を指差した宏美だったが、そこに彼女の姿は無い。
その姿に、美子がおそるおそる声をかける。
「あの～代表？　夏目さん達ならすごい勢いで走って行っちゃいましたよ？」
美子の言葉に、宏美の体がわなわなと震えた。
『もーっ！？　最後まで聞いて行けーっ！！』

「う？」
走りながら首を傾げる綾香。
その様子に明久も走りながらそちらを見た。
「？　どうしたの？　綾香」
「いまヒロリンの声が聞こえたような？」
「そう？　僕には分からなかったけど？」
明久の答えに綾香は、じゃあ空耳か。と言いながら走り続けた。
人通りの少ない旧校舎一階から階段を上がり、Ｆクラスの教室へ。
その廊下に出来ていた列は、少し短くなっているように綾香には感じられた。
「……お客、減ってるのかな？」
つぶやくも確証はない。展示はここだけではないし、喫茶をやっ

てるクラスだって少なくはない。
なら一時的なものだろうと思った綾香は、そのまま教室へ入っていった。
『たっだいまーっ☆♪』
入るなり大きな声で挨拶する綾香。
ホールの人間もお客も一斉に注目するが、彼女は意にも介さずにすばやくフィールドへ足を踏み入れ。
「そして試獣召喚(サモン)！！」
言霊を解き放った。
それに応えるように魔法陣が広がり、その中心から綾香の召喚獣が飛び出した。
そのまま前方へくるんと回ってから着地してポーズを取る。
するとお客さんから歓声と拍手がわき起こり、綾香に惜しみない賞賛が送られた。
「お？　戻ったのか夏目に明久」
お客に応じていた綾香の姿を認めて雄二がやってくる。
「首尾はどうだった？」
「ばっちりだよ」
試合の結果を聞いてきた雄二に、明久が答えた。
それに満足そうにうなずく雄二。
「そうか。順調で何よりだ。秀吉！」
「む？　時間かの？」
雄二に声をかけられ、秀吉がやってくる。
「ああ、とっとと行って。サッサと終わらせよう。じゃあな」
「抜からないでよ？　雄二」
「お？　秀吉出陣か？　頑張れよ♪」
明久の言葉に、雄二が不敵に笑い、綾香の声援を受けた秀吉が凛々しくうなずいた。
そうして出陣していく二人。それを見送った綾香と明久に、すぐさま『召喚獣給仕セット』の注文が入り、明久も召喚してトレーを

運び始めた。
そうこうしている内に雄二と秀吉に続くように瑞希と美波も動き出す。
「お、瑞希達もか？　頑張れよふたりとも♪」
たまたまセットを運び終えて通りがかった綾香が二人に気づき、エールを送る。
それに対して瑞希は笑顔でうなずいた。
「はい、頑張りますね♪」
だが美波は別の方をちらちら見ており、その様子が綾香の気を引いた。
彼女の視線を追うと、その先には明久の背中があった。
「ふぅん」
小さくつぶやきながら美波と明久の姿を交互に蒼い視線が往復する。
やがて、接客に集中していて気づかない明久の姿に、美波が肩を落とすと、綾香が口を開いた。
『おーい！　アッキー！』
よく通る大きな声で呼ばれ、さすがの明久も気づいて振り返った。
『美波達、これから試合だってさー！』
続けられた綾香の言葉に、明久は目を丸くした。
そして。
『島田さん！　姫路さん！　頑張れー！』
笑顔と共に二人へ送られるエール。明久のその声に美波と瑞希の顔がほころんだ。
さらにその様子を見ていたお客さん達からも声が挙がり始める。
『がんばれよ！』
『気を付けて！』
『ファイトー！』

自分達に向けられた声援に、二人の少女は嬉しそうにしながら頬を紅潮させた。

そして、二人で顔を見合わせてうなずくと、ホールの方へ向き直り、大きく口を開き声をそろえて。

『いってきます！♪』

と、大きな声で告げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7557x/

バカとテストと召喚獣 〜蒼い瞳の従姉〜

2012年1月11日07時47分発行